良直の子彌直從五位下遠江介に任す景直を經て道政に至る皆遠江介なり

道政の時後醍醐天皇北條高時を討す道政官軍に屬し戰功あり足利尊氏の叛するに及んで官軍に從て王事に勤勞す延元々年十月天皇尊氏の欺くところとなつて京師に歸る道政時に延曆寺に在り尊氏の詐を知り一品宮を奉して遠江に歸り井伊城に據り子新介高顯をして國中の親族に令して來り護らしむ奥山城主六郎直朝其子六郎次郎朝藤秋葉城主天野下野守景達其子安藝守秀政周防守景顯等來り集まり擊て當國守護今川範國を破り兵威大に振ふ

道政女を一品宮に納る尹良親王は實に其の生む所たり道政高顯より成直に至る六世忠勤を南朝に盡し北朝と敵たるを以て井伊家系圖及傳記に載せす然れとも尹良王の信濃大河原の山中に生産するに及ふまで一族奉して王事に勤勞せしこと明なり明治五年一品宮の祠を建て官幣中社井伊谷宮と稱し同六年道政を祭て井伊谷宮攝社に列し道政彦命と稱し千歳血食榮を得

成道の子遠江介忠直今川氏範に屬し六千貫の地を領し井伊城に居る

忠直の子遠江介直氏と稱す

直氏の嫡子宮内少輔直宗繼て井伊城に居る次子兵部少輔直平今川義元の命を以て遠江曳馬城に移り兩城併せて一万二千貫直宗義元に從て三河國田原坂に戰歿す

直宗嫡子直盛繼て井伊城に居る直盛子なし伯父彦次郎直滿の子龜之丞を養ふて子とす家宰小野和泉守逆謀を抱井伊家を押領せんと欲す是に於て事に托して駿府に赴き今川氏に譖して曰く直滿弟直義と謀り私の軍謀ありと義元驕て思慮に乏し輙け之を信し直滿直義を召して自盡せしむ時に天文十三年十二月二十三日なり和泉守歸るや義元の威を假りて龜之丞を害せむとす直滿の家臣今村藤七郎龍潭寺南溪和尚と謀り龜之丞を奉して信濃國伊奈郡市田村松源寺に遁る天文二十三年和泉守病んで死す直乃ち龜之丞を召し還し直親と名つけ肥後守と稱し百貫の地を領し引佐郡祝田村に住す

永祿三年五月義元西尾張を略し桶狹間に陣す織田信長雷雨を冒し奇兵を以て掩襲し義元を殺す直盛從て軍にあり主從十七人之れに死す

直親乃ち家を繼き井伊城に居る曳馬の城主直平と交代を請ふ今川氏許さす初め義元の死するや子氏眞昏弱政道宜しきを失ふ直親父の今川氏のために非命に死せしを憤る是に於て德川家康に連衡せんとす家宰小野和泉守の子但馬之れを知り今川氏眞に告く氏眞怒り掛川城主朝比奈備中守に命して直親を伐たしめんとす

永祿五年十二月十四日直親駿府に赴く蓋し德川氏と連衡の跡を掩はんとするなり途掛川を過く朝比奈備中守大衆を以て之を圍む直親主從十九人奮鬪して死す今の掛川十九首町は即ち直親が戰歿の所直親時に年二十七

直親の子直政年甫めて二歳直盛の息女次郎法師直政を擁立し代つて事を執る

同六年氏眞將に亡父の怨を織田氏に報せんとし師を出して西征す曳馬城主井伊直平衆軍の后殿として遠江白須賀驛に陣す偶ま驛中火を失ひ炎焰天に漲る氏眞もと怯懦之を見るや以て直平織田氏に通し軍後を絶つとなし遽に吉田を去て本坂を越えて掛川城に入り直平を詰責し命して遠江八城山城主天野左衛門尉を攻め功を以て自ら償はしむ直平家を出てゝ之に赴く家宰飯尾豐前守毒茶を進む長上郡有玉旗屋に至て毒發し馬より落ちて死す餘衆喪を護して曳馬に歸る豐前守城を閉ちて拒戰す衆乃ち散走せり豐前守曳馬を押領して氏眞に叛く氏眞欺て駿府に召して之れを殺す

初め直宗の田原に戰歿してより直滿直義今川氏の殺す所となり直盛桶狹間に戰歿してより直親掛川に鬪死し直平奸臣の毒に死し宗族衰頽して直政方に八歳部下心を離す小野但馬父の志をつき井伊家を纂はんと欲する久し乃ち之を時とするや今川氏に依り直政を害せんとす直政悟て龍潭寺に隱れ遂に南溪の言を用ひ奥山六郎左衛門を從へて三河國鳳來寺に逃る初め共保の此に城きてより二十四世五百四十四年にして終に他人の有する所となる

天正二年十二月直政亡父十三年忌辰のために龍潭寺に來る南溪勸むるに德川家康に事ふることを以てす是時德川氏三河遠江を領し威名日に盛なり小野但馬守も亦其擊滅するところとなる直政母の後夫松下源太郎により家康に仕へんとす

同三年二月十三日家康出て鷹獵し直政を見て其の家系を聞き遂に召して仕へしめ井伊万千代と稱し三十貫を賜ふ時に年甫めて十五

天正四年春高天神に初陣し名譽を揚げ三百貫に增進す十八歳千貫に增進し二十歳二千貫に增進す甲州亂入の時戰功あり四千貫に增進す三河長久手の役に殊勳あり井伊谷本知六千貫を賜ふ是に於て父祖の舊物を復す天正十六年四位侍從に叙す

同十八年小田原の役近藤岩見守と謀り要地に據り城中に先登す功を以て上州箕輪に封せられ十二万石を食む

同十九年奥州九戸の役に戰功あり慶長五年關ヶ原の役島津義久に當り之を破り砲傷を蒙る遂に佐和山を攻めて之を拔く同六年佐和山に封せられ十八万石を食む同七年砲傷を病て卒す

長子兵部少輔直勝遠州掛川に封せられ六万石を食む次子直孝智勇人に絶つ部兵皆赤鎧裝を蒙る當時呼んで井伊の赤隊と號し德川氏の軍を出す毎に敵望んで之れ避く江州彦根に封せられ三十万を食み正四位上中將掃部頭に任す

直政直孝の事蹟正史に詳かに人の能く知るところなり故に其の綱領を揭く蓋し共保井中出生より本年に至る凡そ九百余年當主華族從四位直憲公學を好み文章をよくす將門良將を出し名家名士を生す誣ゆ可からざる也

井伊谷村龍潭寺前田の中に地あり數畝石甃之に疊み木柵之を回らす中に櫻松一兩株あり楚々愛すべし樹

下に井あり即ち共保出謫の所井伊直平領田三段歩を寄附し井伊掃部頭直弼井に寄するの作あり

寄井祝　　直弼

わきいつる岩井の水の底きよみ
くもりなき世の影そみえつゝ

（二）齊藤角太郎氏傳

氏は横田德次の七男とし天保十二年十二月濱名郡小野口村（舊内野村）に生る長じて土工となり明治元年十二月引佐郡井伊谷村坂田齊藤氏を嗣ぐ仍て其氏を冒す家極めて貧にして米塩の資なし於是乎如何にもして家產を作らんものと拮据黽勉怠らず四十有余年一日の如く遂に資產を作るに至れり、一日濱名郡北庄内鹿島神社の祭典に至る（井伊谷より二里半）凡人一日の行たり）其の歸るさに服裝をかへ己れの持山に入り木を切り掘立小屋を作りて薪を割り之れを其の中に納れたりと以て氏が勤勉の一端を知るを得べし

又常に家人を誨へて之を善く導きたり嗣子金平氏（十四才）に吾家を繼ぐ者は余以上の勤勉家ならざるべからずと毎日夜二房朝（未明）二房の縄を綯はしめ又休日に堆肥用の土砂を運ばせ之に相當の報酬を與へ以て勤勞の習慣を養ひたりかくして金平氏二十才まで休むことなかりき、後又嫁女（金平氏妻）を戒めて世の妻女の所謂臍繰金を作るの弊を說き嫁の心掛を賞して債券を與へたりと

氏其の身を持する極めて簡素其住居の如きも火災を恐れて瓦茸となすも見ゆる所は藁を以て葢ひ米の如きも二三俵宛諸所に點在せしめて時計の如き鞄の如き文明的利器は早くより用ひしも常に風呂敷に包みて表はさざりき親戚に行くにも辨當を持參せり

然れとも其財を吝むに非ず明治三十四年鄉党に率先して日本赤十字社に加盟し一時に納金し尋て家族を愛國婦人會に加入せしめて忠愛の精神を發揚せり

よりて鄉人よりは着實穩健の精農者として推賞せらるゝに至れり氏寡默謙遜筆者其實を詳にせず之を惜む

明治四十二年二月不幸二竪の襲ふ所となり藥石効なく五月二十九日復た起つ能はざるを知るや嗣子金平隣人新野利作齊藤文郎新野增吉月岡久平五氏を枕頭に招き後事を托して曰く予四十有余年奮鬪を繼續し幸にして大過なきを得たり憾むらくは學才乏しく町村公益上に何等貢献せる能はざりし事を余や病漸く重く復た起つ能はず茲に年來貯蓄の餘財九百圓あり之を村の公益事業に投せんとす卿等宜しく之を圖れと言ひ畢り莞爾として瞑目せり於是金平氏等其遺言に從ひ時の村長安間安太郎校長石牧藤重兩氏と謀り協議の結果九百圓中四百五拾圓を以て井伊谷尋常高等小學校御影奉安庫を石造に貳百圓を以て菩提寺及氏神社に各燈籠一基を奉納し他の貳百圓を以て農事改良上耕地整理に關する資金に充て五拾圓を雜費に充てたり氏の如きは實に報德の眞意義にかなひたる人と云ふべし

明治四十三年四月九日官、齋藤角太郎嗣子に對し賞狀及銀杯を交付せらる其寫

靜岡縣引佐郡井伊谷村

齋　藤　金　平

故齋藤角太郎明治四十二年十二月靜岡縣引佐郡井伊谷村立井伊谷尋常高等小學校御眞影奉安所茲に重要書類藏置の爲倉庫壹棟寄附候段寄特に付爲其賞銀杯壹箇下賜候事

明治四十三年四月九日

賞勳局總裁從二位勳四等伯爵正親町實正

(三)　齋藤六藏氏傳

氏天保九年八月十日生る公事に盡瘁すること四十余年村民之を德とし其の功を不朽に傳へんとし相謀りて壽藏を龍潭寺境内に建つ氏の傳記すべて之に具はる今其の文を左に錄す

齋藤六藏翁壽藏誌

今茲夏余訪安間瑞甫于遠之三嶽邑々屬濱松負山面湖一望開豁綠樹稻田與湖水相映朝嵐夕暉宛然畫圖淹留數日使人忘歸越四月君寄書爲隣邑齋藤翁請誌壽藏余既遊其地愛其風光則雖未識翁猶舊知也乃欣然諾之翁名茂喬初稱喜三郎後改六藏考諱德治郎妣太田氏以天保九年八月十日生于南神宮寺村世業農弱冠襲家夙夜勵精冢道大興自安政六年爲小前總代歷任組頭戶長書記又選爲學務土木等委員營學校修道路築堤防便灌漑拮据奉公四十余年如一日受褒賞前後數次其爲戶長也病村民耽博戲每夜親巡視閭巷不以風雨寒暑少廢者三年弊風覺止井伊谷村龍潭寺素有田供佛明治維新之際沒入于官、翁慨然爲訴寃據証歷々辨疏甚力遂獲復歸者四百余畝翁乃說檀越醵金修堂宇使寺有今日蓋翁之力居多也性好讀書有暇則涉獵野乘地誌探勝區訪名蹟以自娛足跡殆遍內海云嗚呼生長于山水秀麗之地以從其樂既爲異常之福況利用厚生其功卓異齡亦躋壽域如翁者乎可謂福壽事功兼該者矣若夫事業風化之深銘于人心者亘久而不朽固不俟余文也

明治四十二年十二月

東京　文學士齋藤担藏誌

(四)　小野澤角四郎氏傳

小野澤角四郎は遠江國引佐郡井伊谷村の人なり嘉永元年某月某日を以て愛知縣尾張國中島郡下津村に生る歲廿九にして今の小野澤氏を繼く家世々農を以て本業とし傍に染工を兼ぬ而して染工の如きは率ねこれを職工に委し氏は專ら農事に心を寄す其志や凡庸農夫と同しからざるなり抑本邦は氣候溫暖にして農事に適する國なり就中遠江の如きは田圃頗る開けたりと雖も其業未た幼稚にして此に產するも彼に產せず彼に在りて此にあらざるは夫或は土地の其產に適合せざる者ありと雖も未た千思萬考を費さずして既に之を產せすと爲し他の產を仰くもの往々之れ有り引佐郡の如きも農民の間多年比弊風を存す故に之を改革するは今日の急務とする所なり夫蔬菜類の本邦食品中欠く可からざるは米穀と等しくして下等人民

の如きは大半之に依て生命を維くや普く人の知る所なり然るに古來引佐郡の農民は之を培養するの法を知らざるか知て未た之を爲さゝりしか傳舍酒店は勿論各家日々の需用に至る迄率之を長上郡より仰き地方之を產すること甚少し氏の本郡に來りて之を聞くや以爲らく彼土之を產し此地之を產せざるは其理果して如何ぞや彼も農なり我も農なり彼之を培養するに工みにして我之を培養し得さるの理無し若かす我今之を經驗して以て其理を究めんにはと是に於てか先づ試に自園に人參種を蒔く時に明治九年六月なり隣里相傳へ之を評して曰く古來我地方に於て蔬菜は產せざる者とせり然るに今角四郎之を播種す其功を見さるや明なり世間は廣し徒勞を厭はさる痴頑斯の如きもの有りと之を嘲笑せさる者無し然れども氏は毫も意に介せすして曰く痴頑者は果して我なるか將我を評する者なるか爾後七日を出ですして之を判別するを得べしと蓋し氏の胸中深く見る所有りて此言を發せしならん氏偶事故ありて舊里尾張に行かんとす依りて家人に告くるに其發生の期及培養の法を以てせり期日に至り滿畝處として發生せさるは無く之を培養するに隨ひ漸々生育其宜しきを得長上郡產に劣らさる最上の品を得たり是に於て先に氏を嘲笑する者又傳て曰く奇なり妙なりと是れ其奇と呼ひ妙と唱ふる者は眞の奇なるに非らす眞の妙なるにあらす必竟其知未た及はさるの致す所なり之を目して痴頑者の名を下さゝるを得んや氏の先見是に至り現るゝと謂つ可し爾後亦枝葉類蔬果類及根塊類等諸種の菜類を培養するに一として發育充分ならさる者無し因て鄕黨隣里の農民股甲捲旗遂に氏の農門に降り競ふて其培養法を問ひ之に模倣して各種の蔬菜を作るに至れり未た數年を出てさるに全郡至る所殆んと菜園を見さるの地無し方今に於ては他の產を仰く者少きのみならす却て井伊谷產の名を以て之を地方へ販出するに至れり嗚呼多年間天の此上に產せしめさる者と思惟せし菜蔬をして忽然產出するに至らしめしは全く氏の力なり氏は自作せる菜蔬を車に載せ自ら之を市に鬻き其歸途常に空車を輓かすして肥料と爲す可き樽肥なる者を載す而して此樽肥なる者は其嗅紛々として鼻を貫くを以て兒童輩と雖も亦能く之を知る故に兒童氏を目して樽肥男と呼ふに至れり然れども氏は之を聞き却て喜色あり以て平素農事に熱心するを見る可し氏は既に菜蔬類の產出を地方に普及せしを以て更に又切乾（蘿蔔を細に切り乾したるもの）の製造を始む而して其用ゆる所の器械は名古屋風にして其便なること一人にして尋常の數人に對する働を爲し且精良の品を得るを以て乃ち廣く之を人に傳へんと欲し西遠農學社常會の際之を使用して以て會員に示せしか見る者其便に感し各其器を使用するに至り遂に又一つの物產と爲り現今井伊谷切乾と稱し各地へ輸出するものは全く氏に濫觴す嗚呼其事や平易に似たりと雖も其功や大なりと云ふ可し氏齡未た四旬を超えす身体强健能く其業を勵む爾來又如何なる發明ありて世を益するや知る可からず宜しく刮目して之れを待つ可きなり

（引佐龜玉有効者列傳に據る）

一〇、口碑傳說

柳井戸

井伊谷村井伊谷百六十二番地にあり兵藤宗十氏の所有に係り徑三尺深さ不明圓形の井戸にして地下六尺許りの處に水あり傳說によれは其の昔井戸の附近に柳の樹無きに井戸に向つて臨めば水底に柳の影を沈む時人之れを怪む遠州七不思議の一に數へられたる柳井戸と稱するは實にこの井戸なりと傳ふ現時は井の周圍に注連縄を張り繞らし常に清淨を保ち年一回神職を聘し祭事を行ふことを怠らず

足跡石

井伊谷村社二宮神社の境内に在り方六尺許の岩石にして上面に無數の小足跡を印す土人稱して足跡石と云ふ

鰻井戸

井伊谷村白岩七番地にあり野澤政吉氏の所有に係る本村三郷山の南麓に在る石灰洞にして長さ二間幅二尺水面迄の深さ約一丈許の洞穴にして其の底に當りて五寸四方の穴あり多量の水を噴出し大なる鰻棲息す故にこの名あり現時は洞窟の側に鰻樣と稱へ鰻を祭れる社あり境内老樹鬱蒼として晝尙暗く注連縄を圍らし年々祭典を行ふ

井殿ノ椎（井ドンドノシヒ）

井伊谷村城山の東麓瀧潭寺所有墓地にあり地上五尺の所の周圍は凡二十尺高さ凡そ三十尺（寛政年間の大風により中間より折れたといふ）樹齡三百七十年と想像せらる樹の周圍には間口四間奥行三間高さ二尺の石垣を築き更に高さ三尺御影石の瑞籬を以て周らす樹下に三基の小石塔あり其中央のものには天文十三年十二月二十三日と刻す而して誰人の墓なるかを知るに由なし傳說によれば井伊家の祖井伊直宗の弟直滿の墓標なりと傳ふ舊記により察するに井伊直宗は天文二十三甲寅春織田信長發向三州吉良田原蒙今川義元之命召連引馬井伊谷之人數而赴三州田原、攻信長不慮逢野伏之敵討死天文二十三甲寅正月二十九日也

とあり而して直滿については記錄の見るべきものなきも天文十三年十二月二十三日と刻しあるより察すれば兎に角天文年間の紀念木たることを知るに難からず

神木ヒモロ

渭伊神社の境内社前東側にあり今は枯死せるも周約一丈長さ三丈餘ヒモロの木としては世に珍らしき大木といふに足るべし

一二、天災地變

明治二十二年九月十一日暴風雨あり居宅全潰十棟半潰二十六棟物置全潰五棟に及ぶ農作物の被害も亦甚し

仝二十四年九月三十日暴風雨あり出水七尺に及ぶ居宅全潰一棟あり

仝二十五年九月四日暴風雨あり出水八尺家屋全潰四十六棟半潰五十四棟橋梁流出一箇所農作物の被害亦

甚しく頗る慘狀を極む

仝二十九年十一月十六日午後八時より翌日午前六時に至るまで十時間の濛雨あり出水一丈二尺時恰も稻收穫時に當り稻流失一萬六千一百七十把橋梁流失二箇所其他堤塘道路被害亦少からず仝三十一年九月六日暴風雨あり家屋全潰十三棟半潰二十一棟堤防の潰欠道路の破損亦少からず

仝三十三年九月七日濛雨あり出水一丈二尺堤防欠潰百數十間橋梁の流失破損するもの四箇所あり

仝四十四年八月四日暴風雨あり出水凡一丈二尺堤防缺潰六十間井堰墜落二箇所其他道路橋梁の破損農作物の被害又多大なり

一二、兵　事

明治二十七、八年戰役從軍者一覽表

應召年月日	所屬部隊	兵種官等	勳功	氏名
明治二十七年八月四日	歩兵第十八聯隊	歩兵一等卒		野澤藤太郎
仝　三十七年	歩兵第十八聯隊	歩兵上等兵	勳八等端寶章 賜金五拾圓	前島與三郎
不詳				影山庄太郎
現役中	歩兵第十八聯隊	歩兵一等卒		田力庄吉
明治二十七年八月四日	第三師團彈藥大隊	砲兵一等軍曹	賜金四拾五圓	山岡弘永
仝　二十七年八月五日	歩兵第十八聯隊第十一中隊	歩兵一等卒	勳七等端寶章	影山宗作
仝　二十七年八月四日	歩兵第十八聯隊第四中隊	歩兵上等兵	勳八等端寶章 賜金五拾圓	森下幸太郎
仝　二十七年八月五日	歩兵第十八聯隊第二中隊	歩兵一等卒	勳八等	池田半七
仝　二十七年八月四日	歩兵第十八聯隊	歩兵上等兵	勳八等	山下源藏
不詳				高井覺作
明治二十八年八月五日	後備歩兵第五聯隊第一中隊	陸軍歩兵一等卒	勳八等端寶章	野澤丑太郎
仝　二十八年四月十四日	輜重兵第三大隊補充中隊	輜重輜卒		田力忠作
仝　二十七年十月三日	近衛歩兵第四聯隊第四中隊			池田藤太郎
仝　二十七年十月四日	近衛歩兵第二聯隊	歩兵一等卒	勳八等	山下清三郎

明治三十七、八年戰役從軍者一覽表

應召年月日	所屬部隊	兵種官等	勳功	氏名
明治三十八年三月二十日	近衛歩兵第三聯隊第七中隊	歩兵上等兵	勳八等白色桐葉章 賜金八十圓	大石豐
現役中	近衛歩兵第三聯隊第五中隊	仝	勳八等功七級	福田幾太郎
明治三十七年三月十日	第三師團第一野戰病院付	看護手	勳八等白色桐葉章 賜金貳百圓	安岡敬太郎
不詳	野戰砲兵第三聯隊第六中隊	砲兵一等卒	勳八等白色桐葉章 賜金貳百圓	四尾重次郎
明治三十七年三月十日	第三師團輜重兵第三大隊	輜重輪卒	勳八等白色桐葉章 賜金八拾圓	内山慶太郎
仝　三十七年三月六日	騎兵第三聯隊第二中隊	騎兵一等卒	勳八等功七級 白色桐葉章	宮澤益太郎

明治三十七年三月六日	野戰砲兵第三大隊本部付	砲兵輜卒	賜金八拾圓 動八等白色桐葉章	野末喜十
仝　三十七年三月六日	野戰砲兵第三聯隊	砲兵一等卒	賜金百五拾圓 動八等白色桐葉章	大谷廣吉
不詳	第三師團野戰兵器支敵付	砲兵一等卒		内山末松
明治三十七年三月十一日	第三師團彈藥大隊	砲兵輜卒	賜金參拾五圓	前島喜作
仝　三十七年三月十一日	第三師團工兵第三大隊	工兵一等卒	賜金貳百圓 動八等白色桐葉章	大谷藤太郎
仝　三十七年三月十日	第三師團第二補助輸卒隊	輜重輸卒	賜金百五拾圓 動八等白色桐葉章	高井高作
現役	第三師團工兵第三大隊	工兵伍長	賜金貳百五拾圓 動七等青色桐葉章	中井耕造
不詳	歩兵第六聯隊兵站部付	看護卒	賜金百五拾圓 動八等白色桐葉章	中村享次郎
明治三十七年三月二十六日	仝	仝	賜金七拾圓 動八等瑞寶章	阿彤瓦彦
仝　三十七年四月二十八日	第三師團補助輜卒隊	輜重輸卒	賜金貳百圓 動八等白色桐葉章	野末宇平
仝　三十七年三月十日	歩兵第三十四聯隊第四中隊	歩兵一等卒	賜金百圓 動八等白色桐葉章	影山忠太郎
仝　三十七年三月十日	歩兵第三十四聯隊第五中隊	歩兵上等兵	賜金八十圓 動八等白色桐葉章	櫻井定次郎
仝　三十七年三月六日	歩兵第三十四聯隊第一中隊	砲兵軍曹	動七等功七級	增井市藏
仝　三十七年六月二十六日	后備歩兵第三十四聯隊第七中隊	歩兵一等卒	動八等白色桐葉章	野澤峰重
仝　三十七年六月二十三日	后備歩兵第三十四聯隊第四中隊	歩兵一等卒	藍八等瑞寶章	山下勇次郎
現役	歩兵第十八聯隊第三大隊本部	歩兵上等兵	賜金二百圓 動八等白色桐葉章	大谷駒吉
仝	歩兵第十八聯隊第三中隊	仝	賜金二百圓 動八等白色桐葉章	北山茂平
仝	歩兵第十八聯隊第二中隊	砲兵一等卒	賜金百五十圓 動八等白色桐葉章	野澤清一郎

明治三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第八中隊	歩兵一等卒	賜金貳百圓 動八等白色桐葉章	稲田岩太郎
仝　三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第二中隊	歩兵上等兵	賜金二百圓 動八等白色桐葉章	北山郡平
仝　三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第十二中隊	歩兵一等卒	賜金貳百圓 動八等白色桐葉章	内山太吉
仝　三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第五中隊	歩兵二等卒	動八等白色桐葉章	山下運衛
仝　三十七年三月十日	仝	歩兵一等卒	動八等白色桐葉章	大谷瀧十郎
不詳	歩兵第十八聯隊第六中隊	歩兵一等卒		影山喜代太郎
明治三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第三中隊	仝	賜金八拾圓 動八等白色桐葉章	牧井七太郎
不詳	歩兵第十八聯隊補充大隊第二中隊	歩兵一等卒	賜金八拾圓 動七等瑞寶章	影山宗作
明治三十七年六月二十三日	後備歩兵第十八聯隊第五中隊付	仝	賜金八拾圓 動八等白色桐葉章	田力庄吉
仝　三十七年六月二十三日	後備歩兵第十八聯隊第八中隊	歩兵二等卒	賜金百五拾圓 動八等白色桐葉章	鵜飼峯作
仝　三十七年六月二十三日	後備歩兵第十八聯隊第二大隊付	輜重輸卒	賜金百圓 動八等白色桐葉章	田力忠作
現役中	臺灣守備歩兵第三大隊第三中隊	歩兵一等卒	賜金八拾圓 動八等瑞寶章	奥平喜代作
明治三十七年九月十一日	歩兵第三十四聯隊補充大隊第三中隊	歩兵二等卒	動八等白色桐葉章	三谷嘉平
仝　三十七年九月十一日	歩兵第三十四聯隊補充大隊第二中隊付	仝	動八等白色桐葉章	倉田銀平
不詳	歩兵第三十四聯隊第二中隊	仝		野澤宇吉
仝	第三師團後備工兵第十中隊	工兵二等卒		大谷由太郎
明治三十七年三月七日	第三師團工兵第三大隊第二中隊	仝	動八等	野末恒治
不詳	歩兵三十四聯隊第六中隊	歩兵二等卒	賜金八十圓 動八等白色桐葉章	野末清八

明治三十七年九月十五日	第三國第一補助輜卒隊	輜重輸卒	勳八等	影山愛三郎
仝　三十七年八月一日	歩兵第十八聯隊第十中隊	歩兵一等卒	勳八等白色桐葉章 賜金百五拾圓	大石定五郎
仝　三十七年十月二十日	歩兵第十八聯隊補充大隊第二中隊	看護卒	勳八等瑞寶章	永田森雷
仝　三十七年十一月十一日	發備歩兵第五十二聯隊第八中隊	歩兵一等卒	勳八等	山下清三郎
明治三十七年十一月十二日應召				
明治三十七年十二月十九日病氣兵役免除				
明治三十七年十一月三日	歩兵第十八聯隊第一中隊	歩兵一等卒	勳八等白色桐葉章 賜金貳百圓	西尾茂八
明治三十八年三月二十八日應召	歩兵第十八聯隊補充大隊第四中隊	仝	賜金參拾五圓	倉田村治
明治三十八年七月十九日病氣召集解除				
明治三十七年十一月廿五日	仝	仝	勳八等白色桐葉章 賜金八拾圓	前島榮作
仝　三十七年十二月一日	歩兵第十八聯隊補充大隊臨時增設第二中隊	歩兵一等卒	勳八等瑞寶章 賜金七拾圓	安間惠治
仝　三十七年十二月一日	歩兵第十八聯隊補充大隊第五中隊	仝	勳八等白色桐葉章 賜金二百四拾圓	宮澤金七
仝　三十八年三月二十日	歩兵第十八聯隊補充大隊第六中隊	歩兵二等卒	勳八等瑞寶章 賜金八拾圓	影山鋼太郎
仝　三十七年十二月一日	歩兵第五十一聯隊第五中隊	仝	勳八等白色桐葉章 賜金貳百圓	影山源七
現役	仝	仝	勳八等瑞寶章 年賜金八拾圓	河田保
明治三十七年十二月一日	近衛騎兵第十七聯隊第二小隊	騎兵二等卒	勳八等瑞寶章 賜金八拾圓	小野正海
仝　三十八年四月五日	三師團輜重兵第三大隊	輜重輸卒	勳八等瑞寶章 賜金八拾圓	山本真作
仝　三十七年十二月十一日	歩兵第五十二聯隊第十二中隊	歩兵一等卒	勳七等青色桐葉章 賜金百圓	池田中七

明治三十七年十二月三十日	後備歩兵第十八聯隊第六中隊	補充歩兵	勳八等瑞寶章	內山嘉助
仝　三十八年三月三十一日	第十三師團衛生隊第二中隊	仝	賜金七拾圓	野澤雄藏
仝　三十七年十二月三十日	歩兵第十八聯隊第二中隊	仝	勳八等瑞寶章 賜金七拾圓	橋本福三郎
仝　三十八年二月一日	歩兵第十八聯隊補充大隊第七中隊	仝		野末新市
仝　三十八年二月十六日	第三師團第十八補助輸卒隊	輜重輸卒	勳八等瑞寶章 賜金七拾圓	大谷昌司
仝　三十八年二月十六日	仝	仝	勳八等瑞寶章 賜金八拾圓	影山嘉平
仝　三十八年三月一日	第三師團輜重兵第三大隊補充中隊	仝		大谷初太郎
仝　三十八年三月十日	仝	仝	賜金參拾五圓	大谷右一
仝　三十八年三月十三日	第三師團第一補助輜卒隊	仝	勳八等瑞寶章	西尾治作
仝　三十八年三月十九日	歩兵第十八聯隊補充大隊第五中隊	歩兵軍曹	勳八等	池田藤太郎
仝　三十八年三月廿七日	歩兵第十八聯隊補充大隊第七中隊	補充歩兵		田力國太郎
仝　三十八年四月一日	第三師團補充馬舍廠	輜重輸卒	賜金參拾五圓	野澤守治
仝　三十八年四月一日	砲兵第三聯隊第一中隊	補充砲兵	賜金五拾圓	加用長作
仝　二十八年四月七日	第三師團第廿二補助輸卒隊	輜重輸卒	賜金五拾圓	野末鐵治
仝　三十八年一月二十六日	第三師團國民歩兵第二大隊第三中隊	歩兵上等兵	勳八等瑞寶章 賜金八拾圓	山下源藏
仝　三十八年一月二十六日	第三師團國民歩兵第二大隊第一中隊	歩兵一等卒 從上等兵	勳七等青色桐葉章 賜金八拾圓	野澤丑太郎
仝　三十八年三月一日	遂東兵站部付	輜重輸卒	賜金五拾圓	永田福三郎
仝　三十八年五月二十日	近衛歩兵第　聯隊第二中隊	仝	賜金參拾五圓	永田滿次郎

明治三十八年六月一日	騎兵第三聯隊補充隊	補充騎兵二等卒		高井芳市
仝　三十八年七月一日	歩兵第十八聯隊補充大隊第三中隊	歩兵二等卒		大谷伊森治
仝　三十八年七月一日	歩兵第十八聯隊補充大隊第五中隊	仝		山下銀平
仝　三十八年七月一日	野戰砲兵第三聯隊補充大隊第二中隊	補充砲兵		西尾嘉市
仝　三十八年七月三十日	歩兵第十八聯隊補充大隊第四中隊	歩兵二等卒		夏目源七
仝　三十七年三月十日	第三師團輜重兵第三大隊補充中隊	輜重輸卒	勳八等瑞寶章 賜金七拾圓	前島定平
仝　三十七年三月十日	工兵第三大隊	工兵上等兵	勳八等白色桐葉章 賜金貳百圓	久保井京助

明治三十七、八年戰病死者一覽表

死亡年月日	死亡種別	死亡場所	兵種官等	勳功	氏名
明治三十七年八月三十一日	戰死	清國盛京省首山堡南方高地	歩兵軍曹	勳七等功七級	增井市藏
仝　三十八年九月二十三日	病死	清國盛京省遼陽兵站病院	騎兵上等兵	勳八等功七級	宮澤益太郎
仝　三十七年十月十三日	戰死	清國八家子東北方	歩兵上等兵	勳八等功七級	福田農太郎
仝　三十七年十一月十八日	戰死	清國盛京省前三道崗子	歩兵上等兵	勳八等	野澤峰重
仝　三十七年九月十九日	病死	清國奉天省遼陽兵站病院	歩兵一等卒	勳八等	大谷瀧十郎
仝　三十七年十月十四日	戰死	清國奉天省孤家子附近	歩兵一等卒	勳八等	三谷嘉平
仝　三十七年十月十四日	戰死	仝	歩兵一等卒	勳八等	倉田銀平
仝　三十七年十月十六日	戰死	清國盛京省鴨家子四北	歩兵一等卒	勳八等	山下運衛

仝　三十八年一月十日	病死	清國盛京省江湖屯	工兵二等卒	勳八等	野末恒治

大正三、四年戰役從軍者一覽表

應召年月日	所屬部隊	兵種官等	勳功	氏名
現役	軍艦金剛	三等機關兵	勳八等白色桐葉章 賜金貳百圓	大谷守次
仝	歩兵第六十七聯隊	歩兵伍長	勳七等 賜金貳百五拾圓	堀内滋
仝	仝	歩兵一等卒	勳八等白色桐葉章 賜金百貳拾圓	前島宗太郎
大正三年九月二十八日	仝	仝	勳八等瑞寶章 賜金九拾圓	野末清太郎
仝	仝	仝	勳八等功七級白色桐葉章 年金壹百圓	宮田彦二郎
仝	仝	仝	勳八等白色桐葉章 賜金百貳拾圓	西尾金平
仝	仝	仝	勳八等瑞寶章 賜金八拾圓	大谷隆一郎
仝	仝	仝	賜金貳拾五圓	山田勝太郎
現役	仝	仝	賜金貳拾五圓	三谷甚太郎
仝	仝	海軍一等水兵	賜金七十圓	影山安五郎
仝	仝	海軍二等筆記	勳七等瑞寶章 賜金百貳拾圓	阿形壹四郎

大正三、四年戰役戰病死者一覽表

戰病死者無之

引佐郡井伊谷村井伊谷

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級　増井市藏

明治十四年二月十二日生

明治三十三年十二月一日下士候補生として歩兵第三十四聯隊へ入營仝三十四年十二月一日歩兵一等卒申付られ仝日歩兵上等兵命ぜられ仝三十五年十二月一日歩兵伍長に任じ仝三十六年十一月二十八日歩兵軍曹に任ぜらる仝三十七年三月六日充員下令仝年四月二十日征露從軍として宇品港出帆清國上陸後各地の戰闘に參與し仝年八月三十一日清國盛京省遼陽附近の戰闘に於て前額砲彈創を受け戰死す仝戰後の功により功七級金鵄勳章年金百圓及勳七等青色桐葉章を授け賜はり併せて遺族へ特別賜金六百九十圓並に扶助料年額八十圓を賜與せられ仝年十月三十日村葬執行せらる

引佐郡井伊谷村井伊谷

陸軍歩兵一等卒勳八等　大谷瀧十郎

明治十一年八月三十一日生

明治三十一年十二月一日徴兵にて歩兵第十八聯隊へ入隊仝三十二年十二月一日歩兵一等卒申付られ仝三十七年六月十七日歩兵第十八聯隊補充大隊へ應召仝月二十六日征露從軍として宇品港出帆清國上陸後各地の戰闘に參加し仝年九月八日依病遼陽兵站病院へ入院仝月二十七日病死す仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はり併せて遺族へ特別賜金二百四十圓並に扶助料年額三十四圓を賜與せられ仝三十七年十月三十日仝村井伊谷に於て村葬儀執行せらる

引佐郡井伊谷村井伊谷

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　福田幾太郎

明治十五年二月五日生

明治三十五年十二月一日徴兵にて近衛歩兵第三聯隊へ入隊仝三十七年二月五日充員下令仝年三月十四日征露從軍として宇品港出帆戰地上陸後各地の戰闘に參與し仝年四月二十八日歩兵一等卒申付られ仝年十月十二日歩兵上等兵を命ぜられ仝日清國八家子東北方高地に於て戰死す仝、戰役の功に依り功七級金鵄勳章年金百圓及勳八等白色桐葉章を授け賜はり併せて遺族へ特別賜金五百二十圓並に扶助料年額五十五圓を賜與せられ仝三十八年二月十二日仝村龍潭寺に於て村葬儀執行せらる

引佐郡井伊谷村三嶽

陸軍歩兵一等卒勳八等　三谷嘉平

明治十五年十月十日生

明治三十五年十二月一日徴兵にて第一補充兵役に編入仝三十七年三月六日充員下令仝年九月十一日歩兵第三十四聯隊補充大隊へ應召仝月二十四日征露從軍として宇品港出帆清國上陸仝年十月十四日歩兵一等

卒申付られ沙河戰鬪に參與中仝日遂に沙河附近に於て戰死す仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はり併せて遺族へ特別賜金四百七十圓並に扶助料年額五十圓を賜與せられ仝三十八年二月十三日仝村龍潭寺に於て村葬儀執行せらる

引佐郡井伊谷村白岩
陸軍歩兵一等卒勳八等　倉田銀平
明治十六年二月十六日生

明治三十六年十二月一日徴兵にて第一補充兵役に編入仝三十七年九月十一日歩兵第卅四聯隊補充大隊へ應召仝月廿四日征露從軍として宇品港出帆清國上陸後仝年十月十四日歩兵一等卒申付られ仝日清國盛京省沙河附近の戰鬪に於て戰死す仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はり遺族へ特別賜金四百七十圓を賜與せられ併せて扶助料年額五十圓を給與せられ仝卅八年二月十三日仝村龍潭寺に於て村葬儀執行せらる

引佐郡井伊谷村井伊谷
陸軍歩兵一等卒勳八等　山下運術
明治十三年五月八日生

明治三十二年十二月一日徴兵にて第一補充兵役に編入仝卅七年三日六月充員下令仝月十日歩兵第十八聯隊へ應召仝年六月六日征露從軍として宇品港出帆清國上陸後各地の戰鬪に參與し仝年十月十六日歩兵一等卒申付られ仝日盛京省三道嶺子附近の戰鬪に參加中生死不明の處仝卅八年三月卅一日盛京省魏家樓子西北端に於て死体發見戰死と認定せられ仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はり遺族へ特別賜金四百七十圓を賜與せられ併せて扶助料年額五拾圓を給與せられ仝三十八年八月四日仝村小學校に於て村葬儀執行せらる

引佐郡井伊谷村井伊谷
陸軍工兵二等卒　野末恒治
明治十一年十二月十七日生

明治卅一年十二月一日徴兵にて第一補充兵役に編入仝卅七年三月六日充員下令仝年九月二十五日工兵第三大隊補充大隊へ應召仝年十一月廿四日征露從軍として宇品港出帆清國上陸翌卅八年一月十日清國盛京省江湖屯に於て脚氣兼胸膜炎に罹り療養中仝月卅日遼陽兵站病院に於て病死す仝戰役の功に依り遺族へ特別賜金二百廿圓並に扶助料年額三十圓を賜與せられ仝年四月仝村小學校に於て村葬儀執行せらる

引佐郡井伊谷村井伊谷
陸軍騎兵一等卒勳八等功七級　宮澤益太郎
明治十四年八月十八日生

明治卅四年十二月一日徴兵にて騎兵第三聯隊に入隊仝三十六年一月十三日騎兵一等卒申付られ仝年十一月卅日皈休除隊仝卅七年三月六日充員下令仝月十日騎兵第三聯隊へ應召仝年四月廿一日征露從軍として宇品港出帆清國上陸後各地の戰闘に參與し仝三十八年七月十七日盛京省七家子に於て膓窒扶斯兼脚氣に罹り仝年九月二十三日遼陽兵站病院に於て病死す仝戰役の功に依り功七級金鵄勳章年金百圓及勳八等白色桐葉章を授け賜はり併せて遺族へ特別賜金二百四十圓並に扶助料年額三十四圓を賜與せられ仝卅八年十二月九日仝村小學校に於て村葬儀執行せらる

引佐郡井伊谷村井伊谷

陸軍歩兵一等卒　宮澤金七

明治十七年三月二十八日生

明治卅七年十二月一日徴兵にて歩兵第十八聯隊へ入隊仝卅八年七月廿二日歩兵第六十聯隊へ轉入仝年八月卅日征露從軍の爲宇品港出帆戰地上陸仝年十月九日歩兵一等卒申付られ仝年十一月卅日疾病に罹り韓國駐劄病院釜山分院に入院仝年十二月廿五日内地後送廣島豫備療院に轉院仝卅九年一月九日仝院に於て病死す仝戰役の功に依り遺族へ特別賜金二百四十圓を賜與せられ仝年二月廿日仝村井伊谷明圓寺に於て村葬執行せらる

引佐郡井伊谷村白岩

陸軍歩兵一等卒勳八等　野澤峰重

明治九年二月十一日生

明治卅九年十二月一日徴兵にて歩兵第十八聯隊へ入隊仝卅一年十二月一日歩兵一等卒申付られ仝卅二年十二月一日豫備役編入仝卅七年六月十九日充員下令仝月廿二日後備歩兵第卅四聯隊へ編入仝年八月二十日征露從軍として宇品港出帆仝年十月十八日清國盛京省前三道崗子戰闘の際生死不明の處仝卅九年三月廿二日戰死と認定せらる仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はり尚遺族へ特別賜金四百七十圓を賜與せられ併せて扶助料年額五十圓を給與せられ仝卅九年七月廿四日仝村白岩正眼庵に於て村葬儀執行せらる

癈兵

井伊谷村井伊谷

陸軍歩兵一等卒勳八等　福田岩太郎

右明治參拾七八年戰役に從軍右腕銃創に依り

仝上　足部負傷

井伊谷村井伊谷

陸軍輜重兵輸卒　影山愛三郎

戰時に於ける後援事業

國庫債券應募額調

公債名	回數	應募額	募入額	摘要
國庫債券	一	四、五二五圓	一、六二五圓	
仝	二	二、八〇〇	九〇〇	
仝	三	四、五〇〇	一、五五〇	
仝	四	四、九五〇	一、六五〇	募入額に多少相違あるやも知れず
仝	五	五、一二五	四五〇	
臨時事件費公債	〇	三、二〇〇	一、二五〇	募入額に多少相違あるやも不知

軍資献納

一金拾圓也　井伊谷村井伊谷

軍人慰問　大石準

一慰問袋寄贈數　貳百九十五箇

一毛布　仝上　四十八枚

村内叙勲位者氏名如左

叙勲位年月日	勲位種別	叙勲位の理由	氏名
明治三十九年四月一日	勲八等	明治三十七八年戰役の功により	大谷藤太郎
仝	仝	仝	大谷廣吉
仝	仝	仝	内山太吉
仝	仝	仝	北山茂平
仝	仝	仝	福田岩太郎
仝	仝	仝	大谷定五郎
仝	仝	仝	前島榮作
仝	仝	仝	大谷由太郎
仝	仝	仝	鵜飼峯作
仝	仝	仝	田力忠作
仝	仝	仝	田力庄吉
仝	仝	仝	橋本福三郎
仝	勲七等	仝	影山宗作
仝	勲八等	仝	山下勇次郎
仝	仝	仝	内山喜助

明治三十九年四月一日	勳八等	明治三十七八年戰役の功により	櫻井定次郎
仝	仝	仝	山下清三郎
仝	仝	仝	池田半七
仝	仝	仝	影山忠太郎
仝	勳七等	仝	野澤丑太郎
仝	勳八等	仝	野澤德藏
仝	仝	仝	高井高作
仝	仝	仝	奥平喜代作
仝	仝	仝	野澤清一郎
仝	仝	仝	影山彌太郎
仝	仝	仝	河田保
仝	仝	仝	內山慶太郎
仝	仝	仝	前島定平
仝	仝	仝	久保井京助
仝	仝	仝	牧井七太郎
仝	仝	仝	永田藤重
仝	仝	仝	西尾治作
仝	仝	仝	影山嘉平
仝	仝	仝	大谷昌司
仝	仝	仝	野末宇平
仝	仝	明治二十七八年戰役の功により	池田藤太郎
仝	仝	仝	宮本優八
明治三十一年十二月二十八日	勳八等瑞寶章	文官奉職により	山本瑞枝
明治三十三年四月三十日	從七位	仝	山本瑞枝
明治四十三年十二月二十七日	正八位	井伊谷宮神職奉職により	安井邦雄
大正二年六月十日	從五位	判事退職特賜	竹田孝太郎
大正四年三月一日	正八位	任官により	山下吉太郎

一三、雜

本村の赤十字社事業の成績佳良なるに對して大正元年十一月參日本縣知事より其賞狀如左

忠愛旗授與證書

日本赤十字社靜岡支部引佐郡委員部井伊谷村分區の社業夙に著しく進歩し成績佳良なりと認む仍て茲に規程の忠愛旗を授與し其名譽を表彰す

大正元年十一月三日

日本赤十字社靜岡支部長
法學博士　松井茂

現今社員の總數壹百六十七人社員一人に對する人口二十一人强に當る其他
愛國婦人會員六十一人　海員掖濟會員三人　大日本蠶糸會員二十八人を有す
改元記念として殖林をなす大正二年三月迄に樹栽せる反別は七十三丁四段五畝其の樹種は松、杉、檜、
クヌギ及雜木等也

東濱名村誌

一、概　說

位置　本郡の西南に位し東は氣賀町西北は西濱名村北は大谷山を以て奥山村に境し西南は猪鼻湖東南は濱名湖に臨む村内五區に分る　都筑　駒場　大崎　佐久米　大谷之なり。村の南端なる大崎は西迫戸を隔てゝ知波田村横山の一角に相對す

地勢　字大崎は濱名湖中に突出し半島狀をなす地形南北に長く東西に短し。北部は赤石山脈の餘波大谷山をなし東に走りて引佐峠となり其の脈分岐して一は氣賀町寸座と佐久米との界をなし一は愛宕山藥山等となる北方字大谷は四境山を以て圍まる南部都筑方面は概ね平坦なり大崎には庚申山　字塚山及行者山と名つくる三丘陵あり。山本川は北部三縄山中より發し田園の間を流れ東引佐山より發する水と落合に於て合流し山本川となり字駒場の南を西方に流れ更に西南に向ひ西濱名村津々崎の東部を過ぎ猪鼻湖に注ぐ灌漑の便多し。

現今區數　都筑・佐久米・駒場・大崎・大谷の五區なり

面積　東西三十町南北二里餘總面積凡そ〇、七二方里にして細別すれば左の如し、

田　一、六六九七㌃〇三㌍

畑	一、七七一、〇〇
宅地	三七九四、一五七四
山林	一、九五〇六、一四
原野	一二二五、二七
雑	八、〇〇
池沼	一四、一三
御料地	四、八二八九、〇六
官有地	七四三、二四
墓地	一二〇、一七
免租地	九〇四、一五
道路　巾一間以上ノ道	九四五、〇八
合計	一〇、九九六〇、二二七四

戸數人口　國勢調査の結果によれば

世帯	人口 総数	男	女
九五五	四、八一四	二、四一六	二、三九八

經濟　靜岡縣農工銀行株券拾壹株を有し其他各區とも多少の所有財産あれども村有財産としては無し然れども農會に於て農蠶業柑橘品評會試作等に於て陰に陽に極力改良の道を講じ當業者も直接の利益なれば熱心に改善の方法を案じ兩者相待つて益發展し尚産業組合を設けて村經濟をして愈〻圓滿ならしむ。納税調左の如し

東濱名村納税一覽表

税目	大正八年度	大正九年度
國税	八九〇一圓	五七三三圓
縣税	九五〇二	一〇七六八
村税	一六九一三	二六一五
合計	三五三一六	四二六五一

生業　村民は農業を主とすれども疊表製造業多きが故に之を賣買する爲商業を營むもの他村に比して多し尚多少の漁業者あり

産物　本村に於ける大正九年度重要物産の種類價額等の概要次表の如し

種別	栽培反別又は戸數	産額	價額
米	一四五六反	四、一三三石	一八二、四一七円

麥	一二八四瓦	二、六九〇石	三一、〇六二円
疊表類	二八一瓦	（加工產額）	六二、六七五円
繭	二三八戶	一、二一六瓦	六二、四〇七円
柑橘	五、四七五本	一三、六八七貫	三、四二一円（大正八年度）
食用及特用農產物	一、一二六瓦		六五、二一七円
仝　果實	一、六二八本		一、五二一円
漁　業	一二一、七八二貫		二五、九〇七円
各種工產物			四、九三三
		（大正五年調査）	

交通

道路　三ヶ日より宇志駒場及大谷を經て引佐峠に通ずる舊姫街道は今は廢道となりて荒廢甚しく奥山及只木に通ずる道は僅か樵夫の通ふのみ。明治三十三年濱松より氣賀を經佐久米都筑を貫き三ヶ日に達する第一類道路（新姫街道）延長三十七町四十三間を作り四十三年對岸堀江より海上連絡姫街道迄延長九町十六間竣工してより車馬の交通容易なるに至れり舊姫街道駒場より大崎瀬戸に通ずる道路あり明治四十四年十二月一日東濱名尋常高等小學校前を基點とし瀬戸迄延長一里九町を第三類に編入せられしが其後氣賀入出線と稱し郡道に編入せられ大正十年完成す

航路　都筑　大崎　佐久米の三區は湖水に面するを以て船舶の往來頻りなり、和船は古よりありて主に貨物の運送をなし濱名湖巡航船株式會社の巡航船は明治四十年の頃鷲津氣賀間及び鷲津三ヶ日間を巡航して主として乘客の用に供す　寄港場は都筑に一ヶ所大崎に二ヶ所佐久米に一ヶ所あり

大正五年新設新居汽船會社の汽船は新居氣賀間を巡航し主として乘客に便す寄港場は都筑大崎及佐久米に各一ヶ所宛ありしが今は濱名湖巡航船株式會社と合同するに至れり

二、沿　革

本村往古の事情は漠として明かならざれ共貞和四年子歳より佐久の城主の管下に屬せしが城主德川家康公に歸服せし以來德川氏の御天領となり代官本田百助米倉平太夫佐藤治郎右衛門安形牢兵衛皆川左京其の他種々の變遷を經末世に至り御天井上河内守大澤右京太夫松平伊豆守内野近藤氏等の領する所となり人民中には庄屋百姓惣代組頭名主等を置き以て明治維新に及べり

明治維新後濱松に濱松郡政御役所を置き明治三年濱松郡方御役所と改め明治六年濱松縣を置かれ其の管下に入り同九年二月全村を踏査して地價を定め仝年二月十七日地券受取り仝年三月五日始めて金員を以て租稅を納附す仝年八月二十一日濱松縣は靜岡縣に併合せられ同時に濱松支廳を置かる仝十二年支廳を廢するに及び敷知長上濱名郡役所の管する所となれり

先に濱松縣を置くや本村は第一大區第十四小區となり更に明治八年八月より同十三小區と改め區長戸長等を置きて村政を處理せしが仝十一年七月二十二日都筑駒場を一ヶ村とし大崎村佐久米村大谷村とし各村に戸長を置き村行政事務を扱はしめしが仝十七年八月に至り官選戸長を置き都筑村大崎村佐久米村駒場村を以て一行政區劃となし敷知郡都筑村外三ヶ村役場と稱し村政を處理せしが仝二十二年四月一日市町村制の發布せらるゝや敷知郡東濱名村と改め引佐郡奥山村より大谷村を併せ自治體を形成す明治二十九年四月一日敷知郡より引佐郡に編入せられ以て今日に及べり

本村領主知行一覽

村名	領主名	石高
都筑村	大澤右京太夫（堀江領）	百八十二石九斗四升二合
	井上河内守（松濱領）	二百二十一石三升九合
	御天領（中泉領）	二百四十石
野地村	松平伊豆守（吉田領）	百八十五石六斗八升三合
佐久米村	井上河内守（濱松領）	二百三石八斗四升七合
大崎村	井上河内守（濱松領）	四百七十三石四斗九升一合
駒場村	井上河内守（濱松領）	三十二石二斗五升六合
大谷村	近藤（内野領）	五百十二石一斗三升二合

小區々域

三ヶ日村　宇志村　津々崎村　都筑村　駒場村　佐久米村
大谷村　大崎村　岡本村　平山村　福長村　摩訶耶村
只木村

備考　慶長九年野地村は都筑村より分離し更に明治九年一月合併して都筑村と稱す

三、名勝遺跡

愛宕山　都筑の東北に屹立し縣道其の南麓を過る、明治三十九年九月戰捷記念碑を建て其の周圍に庭園を作る、頂上に松林あり、愛宕神社を安置す故に愛宕山といふ、後春埜神社を併せ祭る、眼界廣く眼下濱名、猪鼻の二湖を瞰下し得べく遠く蜒々たる濱名の長橋を望むべく近く館山の奇勝礫島の奇巖共に一眸の中に入り西方には赤石の餘波屏風の如く相重疊して南走し眞に一勝地也

甘藷の傳播　都筑太幸寺の僧道榮は才學共に秀でよく子弟を導き且つ農業に趣味を有し天保八丁酉年西國に旅して甘藷を得齎し歸りて之を栽植し諸方に奬勵し遂に東西兩濱名に傳播するに至れり

迫門（瀬戸）の奇巖　詩仙小野湖山翁濱名八景を撰む之れ其の一也大崎の西端地角を迫門といふ、此の地

愈〻迫りて對岸僅かに一葦を隔てたり天然の山水恰も畫圖の如く老松參差風光絶佳なり。奇巖あり寂然として湖上に枕む其の狀猪鼻に似たり之れより北方一内海を猪鼻湖といふ蓋し奇巖猪鼻あるに據るなり

磯島　是亦濱名八景の一也大崎の南二丁許り隔りたる海中にある一孤島なり全島皆岩石より成り島上に一祠あり磯神社といふ辨財天を祭る滿山松樹を以て蔽ひ殆んど天日を遮る綠陰深き所松籟耳を洗ふ四方を眺むれば連山湖邊を繞り湖上白帆去來する所眞に仙境の想あり世人之を琵琶の竹生島に擬す避暑の好適地なり之れと相對して一小岬あり是亦奇巖多し鏡石とて面滑かにして鏡の如きあり其東に龜岩鳶岩等あり何れも其の形狀の類似せるより名づけたるなるべし

不動瀧　字大谷なる三繩山麓にあり高さ二丈餘、水清洌四隣幽翠自然の美と閑雅の勝と相待ちて夏季納涼の好適地なり

夫婦松　大谷の高栖寺にあり雄雌の巨大なる夫婦松一樹綠翠幾百年にを經けん亦一奇觀也

釜中の寺蹟　建武元年佛海禪師一峯明一大和尚の開基にかゝる虎洞山高栖寺の蹟あり山谷幽邃墓石の蘚苔昔を忍ぶ

表の原産地　永正十六己卯年高栖寺住職玉菴和尚生國備後國より蘭の苗を齎し釜中なる寺中に移植し是れより漸次繁殖し舊濱名地方に廣まり今日の重要物産の一を占むるに到る

佐久城　都筑西南隅にあり「遠江國濱名古城記抜萃」に詳なれば此には略す

大崎大屋金太夫光重屋敷跡

大崎南部小字寺倉と云ふ所に傳兵衛屋とて大屋傳兵衛と云ふもの住せし地なりと傳ふるところあり之れ昔大屋金太夫の住せし所なりと云ふ此地南方低地鞠の掛と云ふところあり之れ當時其の附近にて蹴鞠の遊をなし此所に掛けしを以て名とすと

城の谷　大崎北部小字城の谷と云ふ所に朝荒とて一の屋敷跡あり之れ佐久城主濱名三郎正國一類の住せし地なりと云ひ傳へ居れど或は濱名庄右衛門の住せしにはあらずやと云ふものあり數年前までは一の井ありき

城跡　大谷區北部の一小丘にあり古老の傳說によれば土井伊賀守の居城なりきと云ふ而して區の中央に若宮と名附くる塚あり伊賀守敵軍に攻められしとき城を出でゝ若宮の自刄せし所なりと傳ふ思ふに遠江國濱名湖城記に依れば濱名三郎正國弟大屋左馬允政景大谷に住とあれば土井伊賀守は誤傳ならんか

安形伊賀屋敷跡　駒塲の東北隅に在り伊賀堂と稱し現今方三尺許の石塚の上に墓あり縣氏の祖先なりと稱して祀る

遠江國風土記傳に左の如く在り

伊賀者天正中、奉佐久城於德川君而爲臣

（見聞錄及遠志說同）

野地城趾　都筑字野地にあり一に「宮崎城とも云ふ遠江濱名記」(文化九年壬申紀元二四七二都筑村石原家)に悉しければ拔萃して之れを掲ぐ

一、野地村の御殿御堀御普請被遊御奉行は本田百助殿上村庄右衛門殿御兩人被仰付御屋形は濱松御入の十六年目に天正十二未年御殿出來仕其の節佐久城御除き被遊候

一、三ヶ日村の御殿は關ヶ原御陣の後慶長十四寅之年御上落には三ヶ日村の御殿に御上下共に御泊り御晝休被遊候。秀忠公台德院樣絕えて濱名御通り不遊候、家光公大猷院樣御儀寛永十一甲戌の年御上落御下向の節は野地村の御殿に御晝休被遊候

陣屋の蹟　大谷の西南隅なる十郎鍛冶に大谷近藤氏の陣屋あしりが天保年間之れを廢し內野に移りしより荒廢に歸したり

火塚　愛宕山麓南部一帶を火塚平と稱し往昔數多の火塚を築き其の中八箇所は明治初年頃其の跡を止めしが遂に壞し現今存するは一箇所のみ其の形狀外部圓形の盛土にてなり高さ二間直徑八間周圍二十五間南方に入口ありて中に通ず

往昔天上より火の雨降りし時難を此地にさけたりと云ふ然れども之れ古墳墓なること明なり

參考

遠江國濱名古城記拔萃　(文化九年壬申紀元二四七二都筑村石原家)

人皇七拾六代近衛院の御宇仁平三年四月鵺といふ怪鳥內裏の上を鳴き渡る依之兵庫頭頼政公勅を蒙り是を射さす其の御褒美として勢州濃州之內は本領近江は數ヶ所遠江國數知郡堀之內不殘御拜領之地也堀の內と申すは平山本坂釣日比澤北脇南脇六ヶ村北脇壹村鵺代壹村と號す其の後年を經て頼政公四代之孫大矢頼氏の末葉治耶清政元弘亂世の上の盛衰を考へ濃州の內猿田の里に數居頼政代々の厚恩を蒙り候の末葉大野石原安形相生加藤の五氏は時節を考へ遠江濱名に數居す右五氏兼而相談仕り濃州の清政は才智他に越えたる士なれば遠江へ招き我々共近從いたし濱名は申すに及ばず其の外數郷を手に付け要害好所に城を築き主人となし相守るべき旨誓書を以て皆申合せ右之趣清政へ申渡し候へば清政喜悅無限候貞和元年(紀元二〇〇五年)鵺代村に來る鵺代次郎清政と號す

人皇九十七代光明院の御治世になり鵺代村に四年住濱名都筑村佐久城を築き貞和四年子入城濱名左近太夫清政と號す

人皇九十九代後光嚴院の文和二年(紀元二〇一三年)に三ヶ日金剛寺を開基して近江の三井寺より令僧請待住持武運長久國家安全の祈禱せしむる也清政の宗門も天台宗なり壹度大將軍足利源義詮公に供奉して參內詩歌の譽れ多し諸國數居の武士壹人宛濱名へ來る佐久の家士となり追日繁昌す子孫相續拾七代佐久之城主なり

七代目濱名牟人正政義禪法に歸依し尾州小川乾坤院下に享院和尙(或は享張和尙)道德際なかりし故請待せしめ住持となす和尙俗姓も源家平賀氏は濱名氏と俗緣相續す依之尊敬無限なり是より金剛寺禪宗となる

後藤佐渡守は代々結城に勤め候所如何致候哉佐久之城主拾貳代目濱名工門佐政遠の代佐久に來り家士となる日比澤に住居す前後七代佐渡守と云ふ

後藤角兵衛は駿河より御扶持被下遠州大原に住する所に駿河へ背き佐久之城主十三代目但馬の守の代に佐久に來り城主へ頼度段御詫申し候へ共一圓御引受無之本坂村に指置角兵衛も前後三代本坂に住居いたし佐久に勤め申し候永祿十年家康公駿て被思召候ば今川義元討死の後氏眞代ろ三ケ國の武士駿河出勤の心底薄く其の上氏眞薨々御遯世の御心懸有之駿河を退出被成掛川城主朝比奈備中守へ被成候故此上に

濱松へ御乗込被遊と被思召候得ば道筋今切は渉海濱名道より外無之候得共本坂引佐は難所佐久城主肥前守心限も無可取思召候に付御内分しめに岡崎より小山源三郎殿本坂へ被遊後藤角兵衛に佐久城主心底如何と御尋被成候へば角兵衛申すは我等義は外様にて御座候得ば敢ひ不申候後藤佐渡守は近從の者にて御座候得ば日比澤村へ御同道可申候間彼の地へ御越佐渡守に委細御尋ね被成候様にと申す則ち源三郎殿佐渡守宅へ御同道段々の趣被仰候得ば佐渡守申すは佐久之城主肥前守并に一門近習之者の心腹難計候得共家康公の御儀東海道壹番若手之御大將と世上にて申しならし駿河は有るに甲斐なく候へば大方合点可仕候我々共佐久へ參り御意之趣申し聞せ重而此方より御沙汰可申候間御待ち被成候様にと源三郎殿へ申候へば然らば岡崎にて御沙汰待人候と被仰御歸り被成候其の後本坂日比澤の兩後藤佐久へ參り源三郎殿仰せ置かれ候趣城主一門家臣へ申談じ候得ば城主并に一門近習の相談岡崎様へ相隨可申相談に極り其の後兩後藤方より岡崎様へ申遣せられ候様にと佐久にて被申付則後藤方より岡崎へ飛脚を以て申し遣し候得ば本坂後藤書狀を隱し岡崎へ不遣此儀佐渡守夢にも不知御返事をそしと待兼候間佐渡守角兵衛に申すは岡崎への御返事如何致候や待兼申候と申候得ば我等儀も御同前無心元存候と挨拶致候又其後源三郎殿本坂へ御越被成角兵衛に御尋候得ば角兵衛申候は城主を始め其他之者共相隨申候心底にて御座なく候故今以御沙汰不仕候兎角合点可仕氣込無之候間此上は兎も角も被遊候様にと源三郎殿へ申遣候得ば盍非に不及と被仰岡崎へ御歸り被成候角兵衛佐渡守にも佐久へも隱し沙汰不仕居り候源三郎殿岡崎へ御歸り被成候段々の趣被仰上候得ば家康公之仰候は彌以て濱名越成間敷候との仰三州山之吉田鈴木平兵衛野田村の今泉小重郎殿岡崎へ被召寄兎に角濱名越成間敷候東三州より遠州并之谷へ越候道筋如何可有之と被仰候へば鈴木今泉も申上候は成程東三州より并之谷へ越し申し候道筋御座候へども遠州の案内仕候者無御座候ては如何と申上候は兩人思ひ入次第に遠州侍輩頼み申様と被仰付候得ば則兩人伊井谷近藤勘助殿其外諸士へ申談候得ば成程案内可仕と御請申候得ば岡崎様御喜悦被遊御發駕日限御定め并伊谷衆御定日に三州富山村五本松と申す所へ御迎に被罷出候へば頓て五本松へ御越し被遊候并伊谷武士に被仰付候は濱名越は如何可有之との御意御座候得ば井伊谷衆中佐久之城心底難計あやうき御事に御座候間三州西口の山道御通り被遊東三州底野へ御越夫より井伊谷へ御越被遊候様にと申上候兎も角も面々の了簡次第に案内致候様にと被仰候に付本坂村の後藤角兵衛岡崎御發駕之日限聞屆け往還通を除け山道を符人の躰にて三州西口山（字利峠か）の麓に參り山道御案内のため是迄伺候仕候と申上候得ば家康公御悦び被遊候との御事に御座候得共角兵衛も實躰成者とは不思召候由後に知れ申候其の日に東三州を御通り并伊谷へ御越被遊候又西口より御越大福寺の門前先を只木村鞍骨峠より并伊谷へ御越被遊爲相圖摩訶耶寺を御燒拂被遊候と申説も御座候夫より鹿島の渡舟に御乗り天龍川東粟倉村へ御越被遊夫より川筋御通り池田の渡し御越被成夫より梢輪村妙恩寺（妙忍か）に御越被遊濱松の城主飯尾豐前守方に御知畧被仰遣候とぞ申候へども如何との御事に御座候哉豐前守掛川備中守所へ相談可仕候と申城を罷出候其の跡へ妙恩寺より永祿十一年十二月十五日御乗込被遊候佐久の城中には岡崎御發駕も濱松御入城も一圓不致やう〳〵と三日目に聞出し驚入候城主肥前守申すは家中に遠心の者有之と見えたり濱松より定而御攻め可被遊候此度は退き何方へなり共隱れ居り時節見へ可申と被致候との申候得ば伯父大矢安藝守申候は城主御了簡一圓不得其意兎に角止り候様にと達て諫言致候得ば肥前守申し候は濱松の城主飯尾豐前守には叔父掛川の朝比奈備中守は舅後藤佐渡守は妹聟皆家康公御憑の者共也其他遠州駿河にしみ〳〵と組すべき武士もなし左候得ば秀る事かたし兎角城を退き出可申と一門近習の諸々も不用主從三人にて城主を退き出し申候城中には安藝守を始め一門近習此上は城を枕に相果て可申といひ合する所に佐久城御請取之爲本田平八郎殿戸田三郎左衛門殿濱松より御越し被遊候て津々崎大明神に御扣へ佐久へ被仰遣御口上に言ふ今度兩人の者其城請取の爲仰を蒙り大明神山に扣居候城無相違可被相渡か否やの返事待入との御口上佐久者返答御口上の趣承屆き候乍去家の惣領城を立退候へば向後城を枕に致打死可仕心底に罷在候中々城を渡し申間敷候と返答申候へば又御兩使より被仰候は返答の趣得其意候へども併各々前方家康公へ附隨可申趣承り及候向後家康公へ隨ひ惡事は有る間敷候兎角相談致可然との御事に候佐久の者共相談いたし家康公へ隨ひ可申旨返答被致候御兩使亦被仰候は成程克き了簡に候此の段々我等共懇意に申遣候濱松の御心底相違有間敷候へ共濱松へ罷歸り各心底の趣可申上との御事に候濱松へ御歸り被成佐久の者共の心底委細申上候へば家康公殊の外に御悦喜被遊御滿足に被思召候との義大矢安藝守頂載仕り謹て拜見奉り候て無相違城を相

渡し申候御兩使被仰候は濱松へ御禮に〇〇候年内余日無之候年明けて御沙汰可仕候間左右次第に濱松へ參候樣にと被仰御兩使御歸り被成候永祿十二巳巳正月下旬御沙汰有之一門近習濱松へ罷出首尾克御目見仕候其節家康公被仰付候は各々事本田戸田兩嫌の旗本に申付候而々思入次第兩家に付申す樣にと被仰首尾克在所へ被歸申候佐久の城は本田戸田御預り後には本田百助殿御城代被仰付候て濱名仕置本田百助殿被爲候佐久の者共には御扶持被下右より在宅天正十六戊子年迄住居城な渡して以後二十年濱名に住居其後本田戸田御兩使へ參り段々結構に被遊御厚恩重く候へば御旗本を願申候望もなり不申後は御兩家の御家來となり今に末葉御兩家に罷在相勤申候

後藤佐渡守は濃州高天神御城御普請の御奉行被仰付少々の譏有之切腹被致候段に申說も有之又は鉄砲に中り死去と申す說も之有候後藤角兵衛義戸田三郎兵衛三州大津に御住所の節大津へ參り三郎右衛門殿の御尼介にて罷在候三郎右衛門殿御去の後御長子土佐守三州田原城を御拜領角兵衛も田原にて御介抱濱松樣へ土佐守殿折々角兵衛義御願ひ被成候へども何とも仰付されず紀州和歌の城へ御移徙の節漸く御供被仰付今に子供有之和歌山御家來に被成候　終り

甲陽軍艦云「永祿十一年家康二十七歳にして七千計の人數を將て遠州イノヤに菅沼、鈴木、近藤三人覺えある武士を指置自身はイヽ山瀨といふ所に馬を立つ」

三河物語云「菅沼次郎衛門鯱岩見今祿乃ゞヽ是の三人して案内者をして永祿十一年十一月遠江に出給ふ」

清政鶴代に四年夫れより都筑村に移り佐久の城を築き貞和四年子の年城成り移る濱名左近大夫清政と號す文和二年三ケ日金剛寺開基武藤長久を祈る天台宗なり清政子孫繁昌相續して十七代佐久の城主となる（七代目政義禪宗を崇拜し歸依深く尾州小川村の乾坤陵の享陰と云ふ出家を招き金剛寺に居らしむ陰享俗性平賀政義の家と俗緣あり金剛寺之より禪宗となる）右拾七代佐久の城主は濱名の庄司にて今川に屬し（義政公）濱名兵庫頭と號す永祿十二巳巳明年城を渡す

兵庫頭は濱名肥前守賴親の弟にして兵庫頭正信と云ふ弟に大谷安藝守政賴あり

濱名兵庫頭瀧政の子與兵衛

與兵衛弟鯊田新三郎信正

新三郎弟彌三郎正綱父と共に沒落慶長中其故里に來り剃髮して慶業と號し宇志村阿彌陀堂の別當となる女子ちそん纏と云ひ日比澤後藤佐渡守の室となり後流罪して慶業と共に住み慶業沒後三州大岩に死す

永祿拾年前後三遠地方に割據せる諸將

一濱名　濱名兵庫頭正信

一氣賀　新田友作入道喜齋

一三州吉田　小原肥前守

一濱松　井伊遠江守

一刑部　菅沼刑部

一掛川　朝比奈備中守

一二俣　中根平左衛門

一鷲津　大野宮内右衛門

一長篠　奥平美作守

一野田　菅沼新八郎

濱名氏系圖

- 濱名庄司
  - 濱名肥前守頼近
    - 兵庫頭正信（佐久城主永祿十二年沒落）
    - 濱名三郎正國（佐久城南曲輪住）
      - 濱名兵庫頭重政（一云肥前出奔）
        - 與兵衛（後號濱名肥前守頼廣父重政出奔之時相隨）
        - 猿田新三郎信正（十七才出奉元子孫）
        - 猿田彌三郎正綱（父出奔之時爲濱人慶長年中住濱名剏裝號慶樂宇志村阿彌陀堂別當）
    - 大屋安藝守政頼
      - 吉大夫（宇志住）
        - 小隼人
          - 小隼人
      - 久兵衛（下尾奈住）
        - 利右衛門
          - 九兵衛
            - 九右衛門
              - 金太夫
    - 大屋左馬允政景（大谷住）
    - 大屋金太夫光重（大崎住）
    - 七郎右衛門
    - 作左衛門重次（於大阪討死）（德川家臣）
      - 惣左衛門
        - 濱名庄右衛門（大崎住）
          - 朝日奈源五左衛門
          - 大屋小右衛門
        - 久右衛門（仕于戸田越前守殿）
      - 作左衛門（彌兄之跡水多能守登家也）

一說に濱名兵庫頭正信は頼政五世孫福原修理太夫十七世の孫にして今川義元に仕へ鵜代村に住み後佐久城に移り永祿十二年佐久城沒落とあり

近藤傳拔萃　（大谷村大野家）

三河國不殘權現樣御手屬し候得共遠州末敵方に而御座候時近藤石見守菅沼次郎右衛門鈴木三郎大夫此三人之者御身方に參忠孝於有之御褒美可被下旨御判被成下其寫云

敬白起請文之事

今度兩三人以馳走井伊谷筋遠州江可打出之旨本望也就夫所々出置知行之事永無相違爲不入扶助畢若從甲州彼知行分如何樣被申候共其身躰引懸見檢申間敷候其外之儀不及申右之旨若僞於有之者梵天帝釋四大天王別而富士惣而日本國中神祇可蒙御罰者也依如件

家康御在判

菅沼次郎右衛門殿
近藤石見守殿
鈴木三郎大夫殿

永祿十一年十二月十二日

今度就遠州入寇前兩三人以忠節井伊谷筋令案内可引出之肯感悅至也彼忠節に付出置知行事

一、井伊谷跡職新知　　一、圓　事

一、二俣左衛門跡驥　一、圓　事
一、高園曾子方之事　一、高　梨　一、氣　賀
一、カヅマ　〃　一、萬石橋詰共　一、山　田
一、川　合　一、萱　場　一、同　領
一、野　邊　一、カンサウ　一、アヅマ
一、人見幷新橋小澤渡

右彼書附之分何茂爲不入無相違永爲私領出置所也幷於此地田原三百貫文可出置者也井伊谷領之外以此書付內二千貫文任望之地可出置者也

三若彼甲州如何樣之儀被申候共此起請文申定故者身躰懸候而申理無相違可出置候也其上從者何方成共何樣之忠節以先判形出置共於此上者相違有間敷者也仍如件

十二月十二日　　家康御在判

右御判相添　菅沼新八郎方より參寫云　　菅沼次郎右衛門殿
近藤石見守殿
鈴木三郎大夫殿

今度井伊谷調儀走廻之段本望至極候然者吉田江之半分之納百姓共に無相違進之候彼半分之爲村當之等閑前々之意趣無之互に眞實に可申合候今度岡崎より被出候知行方之儀少茂僞有間敷候拙者證人に立候上者虛言有間違候者此肯僞時者

梵天帝釋四大天王別而富士白山愛宕之地藏阿彌陀佛御罰今生後生深可蒙者也仍如件

永祿十一年極月十三日　　菅沼新八郎定盈
近藤石見守殿　　新八郎家老
鈴木三郎大夫殿　　今泉四郎兵衛延傳

右之外石見守康用知行分書附

一、宇利村　一、黑田村　一、小畑村　一、下宇利村
一、庭野村　一、一鍬田村　一、吉川村　一、黃柳村
合二百二拾貫文

一權現樣岡崎に被爲成御座遠州御手に可被入由被仰付候其時分石見守康用三州宇利城に罷有幷平右衛門秀用を同國山ノ吉田へ指使遠州井伊谷筋山川道筋之案內念頃に見出させ菅沼次郎右衛門鈴木三郎大夫

と致相談權現樣へ樣子申上御案內者仕遠州井伊谷筋三年之內に御手屬從夫刑部城堀江之城濱松城何茂御手に屬申候其節右之三人御先手仕り候其以後石見守廉用三州字利居住仕候所甲州方より一族發取掛候處此少人數待堅敵數多討捕手負申候右之働權現樣御感に被思召御感狀被下置頂戴仕候此外度々働仕數ヶ所手負歩行叶不申事

表

江戸濱町鰯殼町
遠藤賴母內
佐藤忠右衛門

先觸

品川宿より濱松宿迄　問屋年寄中

本文（內）

覺

一、駕籠人足　三人
一、輕尻馬　一疋

右者近藤賴母內大野團助用向有之に付明後二十一日江戸濱町鰯殼町屋舗より致出立道中濱名大谷陣屋迄罷越候間書面之人馬無滯繼立可給候尤渡船川越等有之宿々者通達可給候以上

近藤賴母內
佐藤忠右衛門㊞

十一月十九日

品川宿より濱松宿迄
宿々門屋中

追而此先觸濱松宿より遠州內野村横田茂兵衛方迄被相屆可給以上

四、社寺

東濱名村神社

神社名	社格	祭神	所在地	祭日	氏子
熱田神宮	村社	日本武尊	都筑四平	九月十五日	一九八戸
神明宮	村社	天照皇大神	都筑城	九月十五日	八四戸
神明宮	村社	天照皇大神	大崎神田	十一月十一日	一八七戸
神明宮	村社	天照皇大神	大谷東山	三月九日 十月十四日	一四九戸
神明宮	村社	天照皇大神 佐久米大久保		四月二十五日	八九戸
白山神社	村社	白山比賣命	駒場向山	十月二十日	三九戸
愛宕神社	無格社	火產靈神	都筑東山	六月二十三日	信徒 三二〇戸

縣社	無格社	弊	財	天	大崎嶺島	七月十五日	仝	八九戸
市杵島神社	無格社	市杵島姫命	佐久米	四月二十四日	仝	三九戸		

(1) **熱田神社**

境内九十坪由緒明かならざるも寛治十六卯年社殿再建の棟札あり明治十二年村社に列せらる祭典は九月十五日に執行す境内に神明宮御鍬大神愛宕社八柱大神郷荒神熊野社日枝大神天満宮猿田彦大神嚴島神社八幡の十一社を合祀す

(2) **神明宮**

境内百六十坪由緒不詳なるも寛文五丙己年再建のこと棟札に記しあり明治十二年村社に列せらる祭典は九月十五日に執行す境内に御鍬大神稻荷大神水神貴船大神社營司の五社を合祀す

(3) **神明宮**

境内百九十坪由緒不明なるも慶長十乙己年社殿再建のこと見ゆ明治十二年村社に列せらる祭典は九月十一日執行す境内に八柱大神津島神社稻荷神社御鍬大神宮の四社を合祀す

(4) **神明宮**

境内二百八十四坪由緒不明なるも應永十八年十一月十三日再建明治十二年九月十日村社に列せらる祭典は三月九日十月十四日春秋兩度之を執行す境内に豐受大神山王大神天日神社津崎神社愛宕神社秋葉神社金比羅神社道祖神社山神神社村荒神社外六社（祭神不詳）を合祀す

(5) **神明宮**

境内三百七十四坪創立の年月詳かならざるも延德四年より明治十年迄に社殿修造の棟札十枚あり明治十二年村社に列せらる祭典は四月二十五日之を執行す境内に山神社七幡社の二社を合祀す

(6) **白山神社**

境内九十一坪あり由緒不明延寶八庚申年九月社殿再建のこと記しあり明治十二年村社に列せらる祭典は十二月二十日執行す境内に淺間神社伊雜皇大神宮の二社を合祀す

(7) **愛宕神社**

本社は天明八年再建の棟札ありしも其の勸請の年月は寛永元年なりと傳ふ先年村社へ合祀ありしも其後許可を得て舊位置へ奉祀す祭典は六月二十三日執行す

(8) **磯神社**

境内六百坪あり元和三年十月七日創立なり村内の富貴大漁安全のため江州竹生島より勸請す此の海岸漁業人不漁の節は此の神社へ參詣祈願するときは大漁あり祭典は七月十五日執行す

(9) **市杵島神社**

本社は元和間の創立なりと云ふも棟札等は無し社殿海岸に接するを以て怒濤の爲め宮殿を破損せられし

ことありて其際棟札流失したりと云ひ傳ふ祭典は四月二十四日執行す

東濱名村神社

熱田神社　村社　都筑西平

祭神　日本武尊

日本武尊は景行天皇の皇子に座し座して二十七年冬十月當時皇澤に浴せざる熊襲反して邊境を侵しければ之を擊たしめ給はむとして尊に勅命せらる尊時に御年十六歳にて座し座しゝが美濃國の弟彦公其他石占横立及尾張田子之稻置乳近之稻置を率ゐて十二月熊襲國に至りまして其魁帥川上梟帥の宴會を催すに際し尊髪を解き童女の姿に作り給ひ密に其席に連り給ひて梟帥の酒に醉ひける時衣中の劍を出して其胸を刺し給ふ時に梟帥叩頭して曰はく且し待ち給へ吾言はむ所ありと時に尊劍を留めて待ち給へば啓して曰はく汝尊は誰人也と對へて曰はく吾は是大足彦天皇之子なり名をば日本童男也と梟帥亦啓して曰はく吾是國中の强力者也是を以て當時諸人我の威力に勝へす而して從はざる者無し吾多く武力に遇ふも尊の如き人あらず是以て賤しき奴の陋しき口を以て尊號を奉らむ聽し給はむや曰はく之を聽きつ即ち啓して曰はく今より後尊を號して日本武皇子と稱へ可しと言訖りのち胸を通して殺し給ふ故に今に至りて日本武尊と稱するなり而して弟彦等を遣して悉く其餘黨を斬りて之を平げ給ひ其他吉備穴海及難波柏濟之惡神を殺し給ひて西國平定し百姓事無きを得せしめ給ふ天皇其功を褒美し給ひて異に愛し給へり而して西國は平定せりと雖も東夷强暴にして互に凌き犯して相盜み相爭ひ山に邪神郊に姦鬼ありて道を遮り人道の辨別なし穴居して毛を以て衣とし血を飲み肉身相疑ひ山野を行く飛禽走獸の如く黨類を集合して邊界を侵し良民苦しむもの甚多きを憂慮し給ひて皇子日本武尊に命じて之を擊たしめ給ふ茲に於て尊吉備武彦大伴武日連を率ゐて冬十月征途に就き給ひ伊勢神宮に參拜せられ倭姫命に御會見あらせられ天皇の命に依りて東夷征伐に向ふの由白し給ひしかば倭姫命草薙劍を取り出てゝ皇子に授け給ふ此所を立ち出で座して初めて駿河に至り給ひし時其處の賊徒欺きて是野に麋鹿多し狩り給へと白しゝかば皇子其言を信じて野中に入り給ふ時賊徒皇子を殺さむと謀り火を放ちて其野を燒く皇子欺れたることを知し食して則佩し給ふ所の御劍を執りて草を薙ぎ燧を以て火を出し向ひ燒きて免れ給ふことを得反て賊徒悉く焚れて滅びき故に其處を號して燒津と曰ふ亦相摸に進みまし上總に往むとして海を渡り給ひしに海中暴風忽ち起りて王船漂ひて渡り給ふことを得ず時に妃弟橘媛啓して曰さく今風起りて浪高く王船覆沒せむとす是必ず海神祟をなすならむ妾の身を以て皇子の御命に贖はむと言ひ訖つて海中に入りし給ひしかば暴風即ち止みぬ故に船岸に着することを得て上總に上陸して陸奥國に入り海陸より葦浦等の所々を經て蝦夷の諸賊を平定し其首帥を俘にして日高見國より西南常陸を歴て甲斐國に至り武藏上野を歴て碓日坂に登り弟橘媛を追想し給ひ東南を望みて三歎して吾嬬者耶と曰し給ひき故に東國を吾嬬國と言ふなり是より吉備武彦を越國に遣して其地方の人民の順否及地形を見せしめ尊は信濃國に進入し給ひ途中千辛萬苦して

美濃に出て茲に於て吉備武彦と御會合し尾張に還りまして尾張氏の女宮簀姫命を娶り月を踰えて留りましぬ時に膳吹山に惡神在りと聞きて之を亡さむとて出て座しき山神大蛇と化して道に當れり皇子惡神の大蛇と化るを知り給はす之を跨ぎて行きます時山神雲を起し雨を降らして峰谷霧に包まれ行く可きの道を失ひ給ふ漸く霧を凌ぎて僅に山を出て給ひしに御意を失ひ酔へるが如く成り給ひぬ山下の泉の側に居して其水を飲みて漸く醒めましぬ故に其泉を居醒泉と云ふ皇子是より御身を痛め給ひ尾張に還り妃宮簀姫命の家に入り給はゞして伊勢の尾津より能褒野に逮りましゝかば痛み甚しくなりき蝦夷の俘を神宮に獻じ吉備武彦を遣はして天皇に復奏せしめ遂に能褒野に崩し給ふ時に御歳三十歳にて座しましき此の如く西に熊襲を征し東に蝦夷を平げ給ひ天皇の大御心を安むし良民を慰め給ひ終に征途中に崩御座し座しゝは實に痛惜の極にして後世之を祭祀し奉るは誠に此偉大なる御功蹟に報賽するに外ならざるなり

神明宮　村社　城

祭神　天照皇大神

此大神の御事は都田村神宮風呂須倍神社に鎮り座す御祭神中に述べ置けり

神明宮　村社　大谷東山

祭神　天照皇大神

此大神の御事も前に同じ

神明宮　村社　大崎神田

祭神　天照皇大神

此大神の御事も前に同じ

神明宮　村社　佐久米大久保

祭神　天照皇大神

此大神の御事も前に同じ

白山神社　村社　駒塲向山

祭神　白山比賣命

此大神の御事は氣賀町伊目白山神社の御祭神の所に述べたり

愛宕神社　無格社　都筑東山

祭神　天照皇大神

此大神の御事も前神明宮に同じ

礫神社　無格社　大崎礫島

祭神

市杵島神社　無格社　佐久米

祭神　市杵島姫命

此大神の御事は井伊谷村井伊谷横尾八柱神社に鎮り座す大神の所にて述べ置けり

東濱名村寺院

寺院名	宗派	所在地	備考
廣福寺	曹洞宗	都筑	百八戸
太幸寺	曹洞宗	都筑	貳拾四戸
陽向院	曹洞宗	都筑	參拾七戸
法幢院	曹洞宗	大崎	百六拾戸
寶珠寺	曹洞宗	大崎	拾六戸
吉祥寺	曹洞宗	大谷	九拾六戸
高栖寺	臨濟宗	大谷	貳拾九九戸
石雲寺	曹洞宗	佐久米	七拾五戸
慈眼寺	曹洞宗	駒場	廢寺

(1) 廣福寺

境内坪數一千九十九坪濱名郡内山宿蘆寺末にして本尊は大日如來文明二庚寅年三月宿蘆寺二代養年受信の開く所なり檀徒八拾餘戸

建物　山門本堂庫裡藥師堂あり

(2) 大幸寺

境内六百五拾坪景雲山と號し宿蘆寺末なり本尊は十一面觀世音菩薩弘治二年三月王室金光公座元の開基にして開山は宿蘆寺八世用山慧應和尚なり檀家僅かに三戸のみ

(3) 陽向院

境内二百八拾五坪金剛寺末にして本尊は十一面觀世音菩薩開山は金剛寺五世吉山宗豚和尚にして慶長十二年丙午八月殿堂建立檀徒二拾戸餘

(4) 法幢院

境内千四百四拾二坪宿蘆寺末にして本尊釋伽如來寛正三壬午年七月佐田城主堀江下野守藤原久實公老妣妙智院心窓永秀大姉の開基にして開山は天慶受和尚なり檀徒百戸

(5) 寶珠寺

境内五百七十四坪宿蘆寺末にして本尊は聖觀世音菩薩永正二年丑二月の建立にして開山は宿蘆寺四世大輪なり檀徒三十餘

(6) 吉祥寺

曹洞宗金剛寺末にして境内三百十一坪本堂は聖觀世音菩薩元と大澤の山中にあり天文年中金剛寺收哲和尚閑居の地にして第一祖と稱す

(7) 高　楠　寺

境内七百三十九坪臨濟宗奥山方廣寺末にして本尊は延命地藏尊菩薩正慶三年佛海禪師創立にして元釜中にあり天文拾貳年此地に移る

舊御朱印五石壹斗

(8) 石　雲　寺

境内四十一坪宿蘆寺末本尊は觀世音菩薩天文九年僧堂王殿堂建立本寺五世知淵和尚を請じて開山となす

檀徒九十戸

(9) 慈　眼　寺

境内三千九百二十坪金剛寺末にして本尊は觀世音菩薩弘治二丙辰三月金剛寺四世明岩修誓の建立せる所

現今檀家なし

五、官公衙學校圖書館

東濱名村役場

戸長役場時代以來都筑西平二千五百三十三の二にありしが大正四年七月十八日同字北平二千四百五十七の一に新築落成し玆に村政を處理し居れり

歷代村長就職退職年月日

就職年月日	退職年月日	氏名
明治二十二年六月十三日		石原猪吉郎
明治二十三年六月二十五日		仝人
明治二十七年六月二十四日	明治三十一年七月二日	仝人
明治三十一年七月八日	明治三十二年八月一日	仝人
明治三十二年十月十八日	明治三十四年六月三十日	仝人
明治三十四年七月十二日	明治三十八年七月十一日	石原丑次郎
明治三十八年七月二十日	明治四十二年七月十九日	鈴木來作
明治四十二年七月二十一日	大正二年七月二十日	石原丑次郎
大正二年十二月十八日	大正五年四月八日	縣勇
大正五年七月四日		山田利一郎

東濱名尋常高等小學校

明治六年八月都筑村大崎村佐久米村駒場村の四ヶ村を設置區域となし濱松縣敷知郡第一大區第二十七小

區都筑學校を創立し都筑村廣福寺を本校假校舍に大崎村法輪院を大崎分教場假校舍に充て佐久米村を佐久米分教場となす

明治八年五月大崎分教場を分離獨立し仝年都筑村太幸寺を假校舍に充て移轉す

明治十一年七月大崎學校は字西平に校舍を新築移轉す

明治十六年三月都筑村字北平に地を相し校舍を新築し之れに移る

明治十九年學制改正により都筑尋常小學校と改稱し再び大崎學校と合併し分教場を置く

明治二十二年三月町村制施行の結果　都筑●大崎●佐久米●駒場の四ヶ村及引佐郡より大谷村を併せて新に東濱名村を組織し引佐郡奥山尋常小學校大谷分教場を合併し東濱名村を設置區域となし三分教場を置く

大谷學校創立は明治六年にして濱松縣第一大區第十四小區三ヶ日學校の分教場にして大谷村吉祥寺を假校舍に充つ仝八年九月分離獨立して大谷村高栖寺に移轉し仝十六年十一月仝東福寺を廢し其跡に校舍を新築し之れに移る仝十九年二月引佐郡奥山村外九ヶ村と組合ひ奥山尋常小學校大谷分教場となる

明治二十五年七月大崎、大谷兩分教場を分離獨立し各〻學區を設置す仝年九月佐久米分教場を廢して本校に合併し都筑、大崎、大谷の三學區を置くことなる

明治二十九年四月郡制改革により本村及西濱名村は引佐郡に編入せらる

明治三十四年九月高等四ヶ年を併置し東濱名尋常高等小學校と改稱す

明治四十一年四月小學校令改正により尋常科六學年高等科二學年を置く

明治四十二年九月二十八日校地を擴張し校舍新築を計畫し仝四十四年十月落成す

明治四十二年中大崎尋常小學校を字神田に移轉改築す

明治四十四年中大谷尋常小學校を字三角に移轉改築す

大正七年四月より都筑●大崎●大谷三學區を廢し學區の統一をなす仝七月山田三平寄附講堂建築を計劃し仝八年七月落成す

大正九年校舍建築を計劃し仝十月起工仝十年三月竣工す

大正十年四月大崎大谷兩尋常小學校を廢し東濱名尋常高等小學校分教場となる

村立東濱名實業補習學校

明治四十二年六月二十九日附を以て設置の件認可せられ仝年七月十九日開校式擧行大正元年十二月十二日佐久米分教場を設置す

高等科卒業者及び之に相當する學力を有する男子を甲科尋常科卒業者及び之に相當する學力を有する男子を乙科とし修業年限は兩科共貳ヶ年とせしが時世の進運に伴ひ大正六年六月十五日附を以て認可せられたる改正學則は尋常科卒業者及び之に相當の學力を有するものを豫科高等科卒業者及び之に相當の學力を有するものを本科、本科卒業者及び之と相當の學力を有するものを、研究科とし修業年限を豫科二

ヶ年本科四ヶ年研究科二ヶ年とせり

學科は修身國語算術農業の四教科目とす

大正七年七月校名を村立東濱名實業補習學校と稱し同時に學則を變更せり

村立大崎實業補習學校

明治三拾五年文部省令第一號實業補習學校規程の趣旨に基き明治三拾六年十一月十四日付を以て村立大崎尋常小學校に農業補習學校を附設するの儀其筋に稟申せし所仝年仝月二十六日付本縣指令三第九七一九號を以て認可せられ爾來引續き今日に至る

尋常小學科卒業者を丙組に高等小學科第一學年修了者を乙組に高等小學科卒業者を甲組に編入し單級組織とす而して丙組に入りたるものは三ヶ年を以て卒業とす

學科は修身國語算術農業の四教科目とす

大正七年七月校名を村立大崎實業補習學校と改め同時に學則を變更せり

村立大谷實業補習學校

明治參拾四年四月より大谷青年會の事業として夜學校を設置したりしが私設の爲時に消長あるを免れざるを以て村立の補習學校となし明治三十六年十一月二十六日附を以て設立の認可を得今日に至る

修業年限を四ヶ年とし第一學年第二學年を乙組とし第三學年第四學年を甲組となし單組に編成す

學科は修身國語（讀方綴方書方）算術農業の四教科目とす

大正七年九月校名を村立大谷實業補習學校と改め學則を變更す

表彰せられたる町村學校其他の團體

引佐郡村立大崎農業補習學校

職員生徒克〳〵勵精し其成績佳良なりと認む依て經費補助として金拾五圓交附す

明治四十三年三月三十一日

靜岡縣

引佐郡村立東濱名農業補習學校

職員生徒克〳〵勵精し其成績佳良なりと認む依て經費補助として金貳拾圓交附す

大正四年三月二十日

靜岡縣

引佐郡東濱名村

大谷農業補習學校

職員生徒克勵精し其成績佳良なりと認む依て經費補助として金拾五圓交附す

大正五年二月拾一日

金壹百圓

施設其の宜しきを得教授訓育の成績見るべきものあり仍て頭書の金員を交附し之を表彰す

大正十年二月十一日　　静岡縣　引佐郡東濱名尋常高等小學校

賞狀

理科實驗器械說明書　　静岡縣知事從四位勳三等　關屋貞三郎

參等賞

右研究物は教育上有効なる資料と認む仍て金五圓を交附して之を賞す

大正十年二月十一日　　静岡縣知事從四位勳三等　關屋貞三郎

都筑巡査駐在所

明治十五年四月創立し東濱名村を管理し居りしが大崎巡査駐在所設置以來都筑大谷を管理す

大崎巡査駐在所

明治四十三年十月一日大崎に大崎佐久米駒場を管理す

郵便局

明治三十六年十二月十日郵便受取所開設仝三十八年四月一日郵便局と改定し仝四十五年七月十六日電信事務を開始し今や電話の事務も取扱ふに至れり

都筑西平大正文庫

大正三年二月一日都筑西平青年設立し圖書を貸與し智識の增進を計れり

大谷圖書縱覽所

大正三年二月十七日大谷青年設立し圖書新聞等を備へ公衆の縱覽に供せり

記念圖書館（大崎西平）

青年の風紀改善と向上發展に資せんが爲め且つは大正四年御大典を記念として二橋三郎發起の下に大崎西部青年二十三名奮起して積立金の基本とし庚申連中共有金と有志數十名の寄附金を以て新に地を卜し小規模ながら建設して十月十七日開館したるものなり圖書新聞雜誌を備へ公衆の縱覽に供すると共に毎月二回青年を集め夜業を爲さしめ時に講話を爲しつゝあり

琢玉文庫（大崎南平）

青年會の目的を達する一端として大正五年一月二橋泰藏發起の下に大崎南部青年協同事に從ひ農業試作

地の利益金及道路修繕等の報酬金を基本として文庫を創設し名つけて琢玉文庫とす

六、會　社

山田合名會社

山田合名會社は明治四十年一月二十日の創立にして疊表の原料及び肥料を販賣し疊表を賣買す

株式會社　氣賀銀行支店

明治四十一年十月七日創立にして木村唯一の金融機關なり

大正六年上半期の決算左の如し

資本　本店より入る

貸付金　七萬四千四百拾六圓五拾七錢

内譯

証書貸付　壹萬九千〇七拾六圓〇八錢

手形貸付　壹千四百參拾參圓

當座預金貸越　五萬參千八百參拾參圓貳拾六錢

他店へ貸　七拾四圓貳拾參錢

預金　五萬五千百參拾五圓五拾五錢五厘

内譯

定期預金　貳萬八千參百九拾四圓五拾八錢五厘

當座預金　貳千百四拾圓

特別當座預金　壹萬五千百四拾五圓

普通貯金　六千七百八拾九圓貳拾八錢

定期積金　貳千六百六拾六圓〇九錢

有限責任　都筑信用販賣購買組合

有限責任　佐久米信用販賣購買組合

有限責任　大崎信用販賣購買組合

各地方の實狀に適ひ民利の增殖を圖るため組合を設立し重要物產たる疊表の販賣疊表の原料肥料及び日用品の購賣資金の融通等を計り孜々として其の經營に從事せり各創立年月及び大正五年度に於ける資金賣上高次の如し

都筑信用販賣購買組合

明治四拾參年拾壹月拾四日の創立

資金八百參拾圓

賣上金壹萬貳千四百參拾七圓貳拾貳錢

佐久米信用販賣購買組合

明治四拾年八月壹日の創立

資金參百七拾圓

賣上金壹萬五千九百五拾壹圓貳拾七錢五厘

大崎信用販賣購買組合

明治四拾四年貳月貳拾貳日の創立

資金壹千貳百參拾圓

購買金壹萬五千五百四拾參圓八拾錢貳厘

賣上金壹萬六千九百九拾六圓六拾貳錢壹厘

一 有限責任　都販賣組合

當地重要物產たる疊表は從來各個人にて賣買爲したるも其間に自然弊害を生せたりしを以て之を除かんとして販賣組合を創立し益〻其の販賣の業を盛大にしつゝあり創立年月及大正五年後に於ける成績左の如し

明治四拾參年拾壹月參拾日の創立

資金千貳百五拾圓

賣上金壹萬六千貳百貳拾六圓六拾參錢五厘

一 有限責任　大谷信用購買販賣組合

本組合も民利の增殖と便益を計るため明治四拾參年拾壹月拾九日に創立しあらゆる日用品の購賣販買をなし產業の資金の融通をなす大正五年度に於ける成績左の如し

購買高　四千七百四拾七圓參拾八錢五厘

貸付金　參百七拾七圓參拾六錢貳厘

預　金　貳百五拾參圓八拾錢

貯　金　七百〇九圓八拾四錢

一、大谷報德社

明治三拾七年八月十五日の創立にして報德敎の主意を奉ずる有志を以て組織し目下社員四十名積立金千六百四拾貳圓貳拾七錢四厘（大正五年十二月末日現在）あり事業の重なるものは精業善行者を表彰し廢道を修繕し罹災民を救恤し毎月常會を開き報德學を研究する等道德經濟の普及發達を計りつゝあり

七、團　體

東濱名村青年團

東濱名村青年團は其の始め左記の如く各字別々に創立し獨立して事をなし統一なかりしも明治四十五年四月二十一日東濱名村青年會を創立し各字の青年會を以て之が支部となす現今各支部に於ては講演會農事試作圖書新聞縱覽所神社墓地の掃除道路の修理夜業貯金其他各種の統一ある有益なる事業を爲し本部は春秋二回の總會にて名士の講演を開き精神修養の資とし益〻隆盛に赴きつゝあり

都筑青年支部會	明治四十一年五月一日
大崎青年支部會	明治四十三年四月
佐久米青年支部會	明治二十八年十月
駒場青年支部會	明治三十五年一月
大谷青年支部會	明治四十四年一月十四日

帝國在鄕軍人會東濱名村分會

明治四十四年八月二十七日東濱名尋常高等小學校に於て發會式を擧行し爾來每年一回總會を開き益〻軍隊の精神に基き帝國在鄕軍人會の主旨を貫徹しつゝあり大正三年陸海軍當局者に於て協議纏り陸海軍人合併するに至れり目下會員將校一名下士四名兵卒九十一名あり

基本金　壹千四百圓

八、消防衛生

本村は往來不完全ながらも各字消防組を組織し居りしが明治三十年一月二十八日東濱名村消防組を組織して組頭を置き同時に都筑駒場を合して都筑消防組大崎に大崎消防組佐久米に佐久米消防組大谷に大谷消防組の四部とし各部に部長副部長小頭等の役員を置き每年一回宛各部の小演習及び聯合大演習を施行し以て不時に備ふ

大正六年十一月八日金馬籠の使用を允許せらる

允　許　狀

引佐郡東濱名村消防組

靜　岡　縣

規律嚴肅にして訓練熟達す仍て金馬籠壹條の使用を允許す

大正六年十一月八日

水防なし

各區に衛生委員を置き春秋二回大清潔法を行ひ尙電塵埃棄場下水等每年二回づゝ檢閲をなす

トラホーム檢診は每月三月と十月の二回之を施行す

醫師一、　産婆一、　藥種局一、あり

九、海水浴場

海水浴場

海水浴場は南に開け後に山を負ふ山腹に旅館湖月亭あり湖面鏡の如く水清く最も水浴に適す遙かに南方に眼を轉ずれば晝は列車の長橋を走るを望むべく夜は漁火の明滅するを賞すべし若し夫れ扁舟湖上に棹し或は館山の月或は自ら糸を垂れて魚蝦を漁らば涼風膚を侵し興盡きざるべし宜なり盛夏の候暑を此に避くるもの跡を絶たず

佐久米區西南部に位し白砂青松の間に旅舍あり萬樂館といふ風涼しく波靜かにして入りて海水に浴し出でて樹間に憩はゞ風襟肅灑として三伏の暑熱も忽ちに去らんとす若し夫れ渚汀に立ちて眼を放てば湖面宛も磨けるが如く遠く近く見え隱れる眞帆片帆さゝやかなる漁舟の漁る樣など一眸に收め得て心身自ら爽かなるを覺えん夏の候杖を此の地に曳くもの踵を接す眞に屈指の避暑地たり

大崎半島長く突出して猪鼻湖口の關門をなす對岸と僅かに一葦水を距てたり稱して瀬戸といふ水色藍の如く奇礁狂巖亂立し老松其の間に影をうつして風光頗る佳なり東南に當りて一嶼あり礫島といふ翠松巖の上に叢生し奇勝眞に愛すべく彼の昭王の珠ならねども涼風自ら身邊に迫りて更に時季の夏なるを覺えず徒倚耽戀去る能はざらしむ海水旅舍揚汀館あり三ヶ日航路に當りて交通の便よく實に絶好の遊覽地なり

天然記念物

一、學校の櫻

東濱名尋常高等小學校々庭に一大老櫻あり年を閲すること四十餘年、幹は目通り丈餘、地を距る又丈餘にして數百の枝に別れ傘狀を呈し六十坪を蔽ふ、抑〻此の木は明治十六年三月當校開校式の記念として當時の職員上野優石原廣藏黒柳佐長治長谷川兵藏中田金次郎諸氏の植樹せしものなり

春爛熳たる花を飾る頃は道行く旅人も足を停めて賞し一陣の春風時ならぬ雪を降らす時は學兒は此の下に集ひて嬉々として戯れ、葉櫻の頃となれば夏盛りに涼しき蔭を與ふ、故に此の下に養はれし兒童は卒業後も春に遇ふ毎に母校と共に忘れんとして忘るゝこと能はざる程なり。

二、熱田神社の櫸

東濱名村都筑熱田神社に櫸の老樹あり、抑〻何れの時代よりか知らざれど年を經ること數百年其の幹一丈に餘るもの數本亭々として諸木の上に枝を交へて茂り太古の匂ひ迫り來るが如く一度此の社に詣づる者は此の老神木の自然の威に打たれ轉た敬神の情を起さしむる程なり。

一〇、人物

石原猪吉郎傳

君嘉永元年十二月十七日引佐郡東濱名村都筑に生れ元治元年十二月年十九歳にして仝村石原清十郎氏の

養子となり明治元年春家政を相續し仝年十二月堀江藩廳君を拔てゝ里正となす適々新制度實施に際し專ら力を一村の事に用ゐ殊に戸籍編成に意を注げり仝六年四月第一區第十四小區都筑村の戸長となる時に田園調査の事發布せらるゝや山川を跋涉して從來錯雜せる田園の區域及段別を精査せり仝年學制を發布せらるゝに際し幹事を兼ね教育の輕忽に附すべからざるを說き校堂を設置し教育の普及を計る仝七年三月十四日小區内各村戸長と該小區長との間に葛藤を生ずるに當り其區内各村戸長の推撰によりて戸長總代の任を負ひ法庭に出入すること數旬后遂に戸長の全勝に歸し區内平穩に歸せり仝八年四月濱松縣より該區副區長の命を拜するに方り地租改正の事起り紛議百出或は說諭し或は和解し遂に完了するを得たり是に於て縣廳は仝九年一月改租總代人となし郡下各町村地質の肥瘠により等級を細査せしむ仝年九月濱松縣靜岡縣に合併するに及んで第十二大區十三小區副區長兼（學務醫務）取締となり教育衞生改良の普及を謀る仝十年一月大小區及町村吏員改正に際し第十二大區副區長の公撰に當る時に敷地郡三ヶ日村に生せる一大紛議を措置し平和と歸せしむ后病を以て職を辭す仝十二年四月郡區制度改革に際し都筑駒場二ヶ村戸長に推撰せられ仝年五月本村外十三ヶ町村學區取締兼戸長總代となる仝年九月職務勉勵の賞として金若干圓を下賜せらる仝年に至り二期改正の趣旨を改め地價修正を出願し官民の間に周旋して終に願意を徹し大に地租を輕減し併せて地價を公平ならしめ仝十四年四月敷知長上濱名郡書記に任せらる職にあること四年仝十七年七月全國町村々政區改正に際し敷知郡新所宿組戸長に轉任す惡疫流行の際豫防と救助とに盡し或は細民の饑餓を救ひ其の他水利を通じ道路を改良し民素を節減し警察分署を設立する等其の功績枚擧にいとまあらず仝二十一年九月都筑村外三ヶ村戸長に轉任し后長上郡万斛村外五ヶ村戸長となり仝二十二年三月濱松宿外四十二ヶ町村聯合組合會議員に撰擧せられ仝年五月縣會議員に當撰し仝年六月町村制實施以來東濱名村々會議員同村々長同村消防組頭及び引佐郡會議員等を勤め大に地方の爲めに力を盡すこと四十年なり

君性豪邁爽快容姿端正議論正格然れども其の人に接するや畛域を設けず温和的改良家を以て自ら任じ大に官民間の調和を謀るを目的とし益々慈善にあらゆる方面に苟も道理の存する所事細大となく之を贊せざるなし其の經濟殖產及政治等の智識經驗に至ては維新以來四十年間地方行政劇職に在りて自ら千辛萬苦し着々地方を刷新せり惜哉會々病痾の犯す所となり明治三十九年四月十二日黃泉の客となる享年五十九歲後人其の智德を頌す

山田彌平傳

山田氏幼名彌平嘉永六年十二月二十三日を以て敷知郡都筑村に生る三十二歲其の家を嗣ぐに及びて家名を襲ひて喜平と改む

明治の新政行はれ學制を發布し邑に學を建つるや明治七年齡弱冠にして三ヶ日學校幹事となり自ら金品を寄附して教育の隆盛を謀り仝八年四月都筑副戸長となり次で翌九年戸長に進み會々稅法改正に際し山

林耕地を踏査して地價制定に力を用ひ同十一年第十二大區副區長を拜しよく村政を左右し未だ諸政整はざるの時に於てよくこれを處理し乘に先んじ躬を以て行ひ下を御し仁を施し一村其の治下に安んずることを得たり。同十五年村會議員に選定せられ越えて十七年再び選まれて議員となり村政に參與して劃策宜しきを得同年衛生委員に擧げられ村民の衛生思想を養ひ猪鼻教育聯合町村會議員となりてはよく教育の普及に力を用ひ同十八年庚午貯穀金に關する聯合町村會議員に選まれ其の任を盡せり。

前に皇居御造營の事あるや金員を献じ奉公の誠を盡せしを以て同年宮内省より奇特の趣を以て御沙汰書を下賜せらる、同二十年三度村會議員の職に就き村政に與り以て其の刷新を圖り所得税調査委員となりてはよく其の任に服し同二十一年都筑尋常小學校經濟委員に擧げられ教育に意を注ぎ同二十五年長上郡知濱名三郡工藝品共進會審査委員を囑托せられ同二十六年更に三郡生産物品評會審査委員を委ねられ品評審査に力を致し征清の役起るや軍資を献じ更に出征軍人家族賑恤會に金員を寄附したるの故を以て木杯及賞狀を下賜せられ又産業に意を用ひ疊表の改良に盡瘁したるを以て賞狀を下附せらる。同二十七年進んで日本赤十字社に入り社員に列し同三十年第二回全國五二品評會評議員及び本郡所得税調査委員に擧げられ其の任を果し同三十二年東海實業五縣聯合五二品評會審査員を托せられ特別功勞賞狀并に銀杯一個を贈られ同三十三年大日本武德會靜岡縣支部幹事となり翌年引佐郡會議員に選まれ郡政に參與して其の革新を圖り同三十六年第五回内國勸業博覽會審査補助を命ぜられ其の功により木杯一個下賜せられ同年同博覽會に疊表を出品し第三等賞牌を受け同三十八年帝國義勇艦隊建設せらるゝや引佐郡委員を囑托せらるゝ等常に力を公共の爲に盡すこと前後三十有餘年に及べり。

氏人と爲り溫厚謹直にしてよく人の推服する所となり村内の議事紛糾氏の一言を俟て乃ち決せりといふ少壯夙に公共の爲に盡して私利を謀らず東奔西走席溫まるに暇なく一身を挺して公事に力め孜々として倦まず大に盡す所ありしかど惜むべし會々二豎の犯す所となり明治四十年一月九日年齒未だ耳順に至らず尙前途爲すあるの材を抱き渺然として逝けり。鄕黨其の欽風を敬慕し今に至るまで其の德を頌して息まず亦宜なりと云ふべし。

二橋新左衛門包侶墓傳

二橋新左衛門包侶幼名は熊太郎雅號を醉月庵倚偃と云ふ文化二年六月六日を以て生る性天資穎敏神童の評あり書は特に秀で中年に至りて其妙域に達す天保十一年三州豐川妙嚴寺に於て龍の一字を八疊間一杯に書す其形龍の雲に乘ずるの概あり座するもの皆神筆となす今なほ同寺寶物として藏せらる

家にありては筆子の教育に其全力を注ぎ其數三十人に及ぶ薫陶を受けし才子續出す、生花は松月堂古流芙蓉坊門人となりて技進み先生の位に居り門人數人を出す、弓道は日置流雪濟派佐原義重の門人となり免許を得て十數人の門人を有す　茶道は三州岡崎住不藏庵龍溪門人となり入出村杉浦三七濱松連尺若森善右衛門母公お園女に指南を受け盆点迄免許を得

家は代々庄官を勤め文化中庄屋相勤め水野越前守の時御用達相勤め八百姓の一人たり天保六年七月父六十五歳にして庄屋退役隠居するに付家督を相續し新右衛門と改め庄屋幷に御用達相勤む天保十一年四月法幢院に於て江湖あり水引柱掛を寄進す代拾五両也天保十四年六月十日水野様日光御社參に付御供頭仰付られ其砌金千三十両献金し其功により元來苗字は御免の處上下一着建門一棟拜領帯刀御免三人扶持被下置勸農庄屋仰付られ爾後無忘相勤む弘化二年十二月二日水野越前守出羽山形に御所替となり爲めに文化の頃より此頃迄一千余金の御用達皆献金となれり嘉永三年庄屋退役に付倅新助四郎左衛門と改め庄屋被仰付慶應二年歳四十一歳にて病歿す

一一、兵　事

西南の役出征者氏名

明治二十七八年戰役從軍者一覽表

應召年月日	所屬部隊	兵種官等	勳功	氏名
明治二十七年八月二十三日	第三師團歩兵第十八聯隊第三中隊	歩兵一等卒	瑞八一時賜金二十五圓	石原喜十
仝　二十八年三月十八日	第三師團歩兵第十八聯隊補充第六中隊	歩兵一等卒	瑞八一時賜金二十五圓	大野吉平
仝　二十七年八月六日	第三師團歩兵第十八聯隊第一大隊第一中隊	歩兵上等兵	瑞八一時賜金五十圓	石原糸藏
仝　二十七年八月六日	第三師團歩兵第十八聯隊第十中隊	歩兵一等卒	瑞八一時賜金二十五圓	山田作治
		歩兵一等卒	賜二十五圓	高柳仲藏
		輜重輸卒	一時賜金二十五圓	黒柳冬治
仝　二十七年八月二十四日	第二師團野戰砲兵第三聯隊第六中隊	砲兵一等卒	瑞八一時賜金三十五圓	渥美縫次郎
	第三師團第十八聯隊第九中隊	歩兵一等卒	旭八一時賜金五十圓	鈴木榮吉
		歩兵一等卒	瑞八賜金五十圓	鈴木丑藏
	第三師團歩兵第十八聯隊第十中隊	歩兵一等卒	旭八賜金四百二十圓	名倉安太郎
		歩兵一等卒	賜金二十五圓	大野與平
仝　二十七年八月六日	第三師團歩兵第十八聯隊第三大隊	輜重輸卒	一時賜金二十五圓	縣　京平
仝　二十七年・	第一師團歩兵	歩兵軍曹	旭八賜四十五圓	若松一保次
仝　二十七年	第三師團砲兵	砲兵一等卒	賜金二十五圓	名倉幾次
仝　二十七年八月六日	第三師團歩兵第十八聯隊第七中隊	歩兵一等卒	瑞八一時賜金三十五圓	柴田宇平
仝　二十七年八月二十四日	第三師團歩兵第十八聯隊第十中隊	歩兵一等卒	瑞八一時賜金五十圓	坪井治八
仝　二十七年八月二十四日	第三師團歩兵第十八聯隊第六中隊	歩兵一等卒	瑞八一時賜金三十五圓	二橋菊三郎
仝　二十七年八月一日	第三師團輜重兵第三大隊第二中隊	輜重輸卒	瑞八一時賜金二十五圓	縣　作藏

藤田芳藏
藤田嘉作

應召年月日	所屬部隊	兵種	官等	勳功	氏名
明治三十七年六月二十三日	後備歩兵第十八聯隊第二中隊	歩兵	中尉	旭六等功五級	山田利一郎
仝 三十七年二月十日	近衛野戰砲兵聯隊第四中隊	砲兵	一等卒	旭八等 賜金百五十圓	二橋重平
仝 三十七年十二月三十日	第三師團工兵第三大隊第二中隊	工兵	一等卒	旭八等 賜金八十圓	石原咲造
仝 三十七年六月一日	第三師團工兵第三大隊第二中隊	輜重輸卒		瑞八等	津ケ谷利助
仝 三十七年二月十日	近衛歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	歩兵	軍曹	旭七等功七級	石原藤吉
仝 三十七年九月二十五日	第三師團歩兵第三十四聯隊補充大隊第一中隊	歩兵	一等卒	旭八等 賜金百圓	井口貞次郎
仝 三十八年二月十八日	近衛歩兵第二聯隊補充大隊第三中隊	歩兵	二等卒	賜金五十圓	山口要藏
仝 三十七年三月十日	第三師團野戰砲兵第三聯隊第四中隊大行李付	輜重輸卒		旭八等 賜金八十圓	黑柳正一郎
仝 三十七年九月二十五日	歩兵第三十四聯隊補充大隊第十二中隊	歩兵	一等卒	旭八等 賜金二百圓	大野熊太郎
仝 三十七年三月十日	歩兵第三十四聯隊第十中隊	歩兵	一等卒	旭八等 賜金百五十圓	堤繁三郎
仝 三十七年三月六日	歩兵第十八聯隊補充大隊第三中隊	歩兵	一等卒	旭八等功七級	和田安太郎
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第五中隊	歩兵	一等卒	旭八等功七級	黑柳幸太郎
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第六中隊	歩兵	一等卒	旭八等功七級	井口鎌太郎
仝 三十七年三月六日	歩兵第十八聯隊第二中隊	歩兵	一等卒	旭八等 賜金二百圓	黑柳喜八
仝 三十七年三月九日	歩兵第十八聯隊第十二中隊	歩兵	上等兵	旭八等 賜金二百圓	大野喜市
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第四中隊	歩兵	一等卒	旭八等 賜金二百圓	田中義忠
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第三中隊	歩兵	一等卒	旭八等 賜金二百圓	和田多作

仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第四中隊	歩兵	上等兵	旭八等 賜金二百圓	堤政次郎
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第二大隊本部付	歩兵	上等兵	旭八等 賜金百五十圓	渥美又次郎
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第十一中隊	歩兵	一等卒	旭八等 賜金百五十圓	若松宇平
仝 三十七年三月十日	第二軍兵站經理部付	輜重輸卒		旭八等 賜金百五十圓	田島爲作
仝 三十七年三月十日	第三師團輜重兵第三大隊第一補助輸卒隊	輜重輸卒		旭八等 賜金百圓	和田留次郎
仝 三十七年三月十日	第三師團輜重兵第三大隊第二補充輸卒隊	輜重輸卒		瑞八等 賜金七十圓	坪井峯三郎
仝 三十七年三月十日	第三師團輜重兵第三大隊第三補助輸卒隊	輜重輸卒		旭八等 賜金百五十圓	白井利作
仝 三十七年四月二十三日	第三師團第二野戰郵便局付	輜重輸卒		旭八等 賜金八十圓	渥美太十
仝 三十七年四月二十三日	第三師團輜重兵第三大隊第四補助輸卒隊	輜重輸卒		瑞八等	若松榮吉
仝 三十七年四月二十三日	第三師團輜重兵第三大隊第五補助輸卒隊	輜重輸卒		旭八等 賜金百五十圓	石原三四郎
仝 三十八年二月六日	第三師團第六補助輸卒隊第二小隊	輜重輸卒		旭八等 賜金百圓	伊東薩平
仝 三十八年二月六日	第三師團第六補助輸卒隊第二小隊	輜重輸卒		旭八等 賜金八十圓	石原清三郎
仝 三十八年九月七日	第十五師團第六聯隊補助輸卒隊	輜重輸卒		賜金三十五圓	鈴木留吉
仝 三十八年一月十九日	第三師團第十四補助輸卒隊第二小隊	輜重輸卒		瑞八等 賜金八十圓	相澤佐內
仝 三十八年二月十六日	第三師團第十八補助輸卒隊第一小隊	輜重輸卒		旭八等 賜金百圓	川崎幸太郎
仝 三十八年二月十六日	第三師團第二十三補助輸卒隊第二小隊	輜重輸卒		瑞八等 賜金七十圓	藤田樂之助
	第三師團第二十三補助輸卒隊	輜重輸卒		賜金五十圓	大野德次郎
	第三師團補助輸卒隊第二小隊	輜重輸卒		賜金五十圓	大野種次郎

明治三十七年三月十日	第三師團後備工兵野戰電信隊	工兵上等兵	旭八等功七級	大野太平次	
	第三師團第二十七補助輸卒大隊第二小隊	輜重輸卒	賜金三十五圓	石原與作	
仝 三十七年十二月一日	歩兵第六十聯隊第四中隊	歩兵上等兵	賜八等金八十圓	深川壽山	
仝 三十七年三月十日	第三師團第十八聯隊補充大隊第七中隊	歩兵一等卒	瑞八等賜金七十圓	縣清十	
仝 三十七年三月十日	北獨立第十三師團歩兵第六十一聯隊第六中隊	歩兵一等卒	瑞八等賜金八十圓	大野村次	
仝 三十八年三月二十九日	第三師團歩兵第十八聯隊補充大隊第三中隊	歩兵一等卒	瑞八等賜金八十圓	相澤悠八	
仝 三十七年三月六日	歩兵第十八聯隊第九中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金百圓	二橋彌平	
仝 三十七年十一月十五日	歩兵第十八聯隊補充大隊第六中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金八十圓	江間和吉	
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第三大隊大行李付	輜重輸卒	旭八等賜金八拾圓	縣一郎	
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊第一大隊大行李付	輜重輸卒	旭八等賜金八十圓	相澤榮吉	
仝 三十八年三月十九日	第三師團彈藥大隊第二歩兵彈藥縱列隊	砲兵一等卒	賜金八十圓	湯美繼次郎	
仝 三十七年十月十日	第三師團後備工兵第一中隊	工兵一等卒	瑞八等賜金八十圓	山田彌四郎	
仝 三十八年二月十日	近衛後備歩兵第一聯隊	歩兵軍曹	旭七等功七級	黑柳庄太郎	
仝 三十八年三月二十七日	歩兵第三十三聯隊補充大隊第八中隊	歩兵一等卒	瑞八等賜金七十圓	山本重作	
仝 三十七年六月二十三日	歩兵第十八聯隊第八中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金百圓	高柳留五郎	
仝 三十七年六月二十三日	後備歩兵第十八聯隊第八中隊	歩兵一等卒	旭七等賜金百圓	坪井治八	
仝 三十七年六月二十三日	後備歩兵第十八聯隊第五中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金百圓	大野吉平	

仝 三十七年六月二十三日	後備歩兵第十八聯隊第一大隊	輜重輸卒	旭八等賜金八十圓	縣作藏	
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊補充大隊第一中隊	歩兵上等兵	賜八等賜金八十圓	二橋柳藏	
仝 三十七年三月十日	歩兵第十八聯隊補充大隊第六中隊	歩兵一等卒	瑞八等賜金八十圓	黑柳國松	
仝 三十七年六月二十三日	後備歩兵第十八聯隊第二中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金二百圓	石原喜十	
仝 三十七年三月十日	後備歩兵第三十四聯隊第八中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金二百圓	大野惣平	
仝 三十七年六月二十三日	後備歩兵第三十四聯隊第八中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金二百圓	黑柳森太郎	
仝 三十七年十一月十二日	近衛歩兵第三聯隊補充大隊第一中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金百圓	二橋富平	
仝 三十七年十二月十一日	後備歩兵第五十二聯隊第九中隊	歩兵上等兵	旭七等賜金二百圓	石原糸藏	
仝 三十八年一月二十五日	後備歩兵第五十二聯隊第六中隊	歩兵一等卒	旭七等賜金百五十圓	柴田字平	
仝 三十七年八月六日	後備歩兵第五十二聯隊第六中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金百圓	山田作治	
仝 三十八年一月二十五日	後備歩兵第五十二聯隊第十二中隊	歩兵一等卒	瑞八等賜金七十圓	高柳仲藏	
仝 三十七年六月二十三日	北獨立第十三師團第二十六旅團司令部付	輜重輸卒	瑞八等賜金八十圓	黑柳冬治	
仝 三十七年十月三十日	後備歩兵第十八聯隊第四中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金八十圓	竹澤德太郎	
仝 三十七年三月十日	後備歩兵第三十四聯隊補充大隊第一中隊	陸軍看護長	旭八等賜金二百圓	大野三郎	
仝 三十七年三月八日	野戰兵器廠第一師團	工兵特務曹長	旭七等賜金二百五十圓	若松一保治	
仝 三十八年三月十日	北獨立第十三師團歩兵第五十一聯隊第五中隊	歩兵上等兵	旭八等賜金百五十圓	堤峰三郎	
仝 三十八年一月十七日	歩兵第十八聯隊國民第二大隊第一中隊	歩兵一等卒	旭七等賜金百五十圓	鈴木榮吉	
仝 三十七年十二月十一日	後備歩兵第三師團衛生隊擔架第二中隊	歩兵一等卒	旭八等賜金百圓	大野彦太郎	

明治三十七年十二月十一日	仝	歩兵一等卒	旭八等	賜金百五十圓	二橋儀平
仝　三十八年三月十日	北獨立第十三師團第五十一聯隊第五中隊	歩兵一等卒	瑞八等	賜金八十圓	鈴木留次郎
仝　三十七年十月三十日	北獨立第十三師團衛生隊本部付	醫師看護手	瑞八等	賜金八十圓	加藤千代吉
仝　三十七年三月十日	第十三師團衛生隊第二中隊	歩兵一等卒	瑞八等	賜金七十圓	縣國太郎
仝　三十八年二月十二日	砲兵第三聯隊補充隊第二中隊	砲兵一等卒		賜金三十五圓	黑柳政一
仝　三十七年三月七日	第十三師團第四野戰病院付	陸軍看護卒	瑞八等	賜金八十圓	井口惣次郎
仝　三十八年二月一日	第十五師團第六十聯隊第二中隊	歩兵一等卒		賜金三十五圓	石原增太郎
仝　三十八年二月一日	第三師團歩兵第十八聯隊第五中隊	歩兵一等卒		賜金三十五圓	高野國太郎
仝　三十八年三月二十八日	第三師團後備歩兵第十八聯隊第五中隊	歩兵二等卒		賜金三十五圓	藤原九平
仝　三十八年三月二十八日	第三師團歩兵第十八聯隊補充隊第五中隊	歩兵二等卒		賜金三十五圓	加藤八郎
仝　三十七年十二月一日	第三師團歩兵第十八聯隊補充隊第八中隊	歩兵一等卒		賜金三十五圓	縣浦次
仝　三十七年三月十日	第三師團後備騎兵第三聯隊彈藥大隊	騎兵軍曹	旭七等	賜金百五十圓	伊東廣十郎
仝　三十七年二月十一日	後備歩兵第十八聯隊第七中隊	歩兵一等卒	瑞七等	賜金八十圓	鈴木丑藏
仝　三十八二月一日	第十五師團第六十聯隊第二中隊	歩兵一等卒		賜金五十圓	坪井松平
仝　三十七年三月十日	第三師團第四糧食縱列第二小隊	輜重輜卒	旭八等	賜金八十圓	藤澤嘉重
仝　三十七年十二月一日	後備第三旅團歩兵第十八聯隊第三中隊	歩兵一等卒		賜金五十圓	渥美常吉
	第三師團歩兵第十八聯隊第八中隊	歩兵上等兵	旭八等	賜金百圓	二橋傳六
	第三師團歩兵第十八聯隊補充大隊第一中隊	歩兵二等卒			鈴木政一郎

明治三十七年七月十二日	第三師團第十八聯隊補充大隊第八中隊	歩兵二等卒			二橋農平
	第十三師團第十九聯隊第四中隊	砲兵二等卒			大野市太郎
	第三師團第六補充輸卒隊	輜重輜卒			山田與次郎
明治三十八年七月一日	第三師團野戰砲兵第三聯隊補充大隊第一中隊	砲兵二等卒			縣政吉
	近衛後備混成旅團衛生隊第一中隊	歩兵一等卒	旭八等	賜金二百圓	宗田福太郎
		歩兵上等兵	旭八等	賜金八十圓	細川宗圓
		歩兵一等卒			二橋幸平
明治三十七年三月十日	第三師團工兵大隊第二中隊	工兵一等卒		賜金二百五十圓	堤島次郎
明治三十七年二月十一日	軍艦梁橋丸乘込	一等水兵	旭八等	賜金八十圓	伊藤佐太郎
	軍艦濱速鼠水兵部	一等機關兵	旭八等	賜金百圓	加藤太平
	軍艦橋立信號部	一等信號兵	旭八等	賜金二百圓	加藤友藏
	軍艦橋立號	一等水兵	旭八等	賜金百五十圓	川崎芳太郎
	軍艦滿洲丸	一等機關兵	旭八等	賜金八十圓	鈴木繁十
	軍艦香港丸	機關兵	瑞八等		和田爲作

明治三十七八年戰役戰病死者一覽表

死歿年月日	死歿種別	死歿場所	兵種官等	勳功年金賜金	氏名
明治三十七年十月十七日	戰死	清國盛京省馬耳山	陸軍近衛歩兵曹長	勳七等 賜金七百五十圓	名倉仲治

明治三十七年十月十一日	戰死	清國盛京省英得牛泉村	陸軍歩兵軍曹	勳七等功七級	賜金六百九十圓年金壹百圓	井口一角	
仝　三十八年十一月十九日	病死	韓國會寧分院	陸軍近衛歩兵上等兵	勳七等	賜金二百五十圓	山口市太郎	
仝　三十八年九月四日	病死	名古屋豫備病院	陸軍輜重兵輪卒		賜金百拾圓	津ヶ谷春藏	

大正三四年戰役從軍者一覽表

應召年月日	所屬部隊	兵種官等	勳功賜金	氏名
大正三年十月五日	第十五師團輜重兵第十五大隊第二中隊	輜重兵軍曹	旭七等三百圓	石原林市
大正三年九月廿九日	第十五師團第六十七聯隊豫備第一大隊附	輜重輪卒	瑞八等九十圓	石原作平
大正三年九月廿九日	第十五師團第六十七聯隊豫備第二中隊	歩兵一等卒		藤原愛次郎
大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第二中隊	歩兵一等卒	旭八等二百圓	藤田喜作
大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第四中隊	歩兵一等卒	瑞八等九十圓	井口來作
大正三年九月廿九日	第十五師團第六十七聯隊豫備第五中隊	歩兵一等卒	旭八等百五十圓	加藤七郎
大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第五中隊	歩兵上等兵	旭八等百七十圓	加藤重三郎
大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第五中隊	歩兵一等卒	旭八等百五十圓	坪井平四郎
大正三年九月廿九日	第十五師團第六十七聯隊豫備六中隊	歩兵上等兵	旭八等二百二十圓	鈴木米太郎
大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第七中隊	歩兵一等卒	旭八等百二十圓	川崎吉十
大正三年九月廿九日	第十五師團第六十七聯隊豫備第八中隊	歩兵上等兵	旭八等百二十圓	石原猪助
大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第十一中隊	歩兵上等兵	瑞八等八十圓	堤豫藏

大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第十一中隊	歩兵一等卒	瑞八等八十圓	名倉勝三
大正三年九月廿九日	第十五師團第六十七聯隊豫備第十二中隊	歩兵一等卒	旭八等二百二十圓	柴田猪重
大正三年九月廿九日	第十五師團第六十七聯隊豫備第十二中隊	歩兵一等卒	瑞八等九十圓	鵜見佐平
大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第十二中隊	歩兵一等卒	旭八等百五十圓	大野哲太郎
大正三年十月五日	第十五師團第六十七聯隊第二中隊		二十五圓	井口清次郎
大正三年九月廿八日	第十五師團第六十七聯隊豫備第二中隊	歩兵上等兵	四十圓	小出雷治
大正三年九月廿八日	第十五師團第六十七聯隊豫備第二中隊	歩兵一等卒	二十五圓	大野幸太郎
大正三年九月廿八日	第十五師團第六十七聯隊豫備第三中隊			黑柳榮太郎
大正三年九月二十八日	第十五師團第六十七聯隊豫備第三中隊			藤原永吉
	軍艦香取		百圓	藤田松次郎
大正三年八月廿三日	軍艦筑波		旭八等	山本才次
	軍艦宗谷	一等機關兵曹	旭七等百五十圓	和田爲作
大正三年八月二十三日	軍艦神風	一等水兵	瑞八等百圓	川崎幾藏
	軍艦佐世保航空隊	二等兵曹		名倉猪吉郎
		一等水兵	六十圓	津ヶ谷善八
		二等主厨		加藤新次郎
		二等主厨		田島廣治

戰時に於ける後援事業

國債應募額

明治三十七八年日露戰役に於ける本村の國債應募は四回にして其の金額左の如し

明治三十七年二月十九日	第一回	金五千五百五十圓
仝　三十七年五月三十日	第二回	
仝　三十七年十月二十五日	第三回	金二千八百二十五圓
	第四回	

軍需品献納

明治三十七八年日露戰役に於ては出征軍人の寒氣のための苦戰を同情し本村の有志者より毛布を献納せり

軍人家遺族救護事業

明治三十七八年露國と戰端を開くや軍人家族保護會を組織し出征軍人家族の家庭の實況を調査しその等級を貳圓・壹圓五拾錢・壹圓の三等級に分ち毎月其の家族を救護せり尙同保護金中に金五圓鈴木繁重氏金拾圓東西濱名神道實行教會より寄進せられたり同戰役に於て戰死病死の軍人に墓石碑料を贈呈せり

軍人慰問

明治三十七八年日露戰役に召集せられたる軍人八十六名には出征の際一人に付金參圓宛贈呈し又軍人家族慰問委員を置き月二回宛出征軍人の留守宅を訪問し或は役場學校より慰問狀を送り或は慰問袋を募集しその袋は高等科の女兒に縫はしめ其の內に小學校兒童の書畫を入れて寄贈せり日露戰役に於て傷病者九人ありしを以て一人に付金壹圓宛見舞として贈呈せり

大正三四年戰役に於て召集せられたる出征軍人に對し慰問委員を設け出征の際は鷲津驛にて送りその留守宅を訪問し或は役場學校婦人會等より慰問袋及慰問狀を送り東濱名尋常高等小學校にては特に尋五以上の兒童に五名宛の組を編成して本村出征軍人全部に慰問狀と書畫とを寄贈せり

戰捷祈願及祝捷

明治二十七八年日清戰爭に於ては神職は鄕社に於て僧侶は本村一團となり大幸寺に於て戰捷祈願を爲し濱松に於て凱旋門を製して出征軍人を歡迎す本村に於ては歡迎會を催せり

明治三十七八年日露戰役に於ては神職は村社に於て僧侶は大幸寺に於て戰捷祈禱を爲せり凱旋の際は各字凱旋門を建て、祝意を表し凱旋軍人歡迎の際は都筑津々川戶海岸に於て村民一同歡迎せり學校兒童は晝間旗行列を以て高等科は特に夜間提灯行列を以て迎ふ後愛宕平に於て歡迎會を催せり

大正三年日獨戰役の起ると共に、神職は神社に僧侶は寺院に於て、戰捷祈禱を爲し村民は交代にて、神社佛閣に日參をなせり、青島の陷落するや學校兒童は旗行列を行ひて出征軍人留守宅を訪問して萬歲を

唱へ村民一同戰捷を祝ぎ凱旋の際は凱旋門を建て旗幟を立てゝ歡迎し、大正四年二月七日東濱名尋常高等小學校に於て凱旋祝を行ひ凱旋軍人に感謝狀及び記念品を贈呈し柔道銃槍投餅等の餘興を行ひ夕景より茶番狂言を爲し盛大なりき。

戰死者町村葬

歩兵曹長名倉仲治（大谷）

日露の役明治三十七年十月十六日馬耳山附近にて戰死す仝年十二月十八日郡役所に於て遺骨を受取り翌三十八年一月七日大谷吉祥寺於て佛式を以て村葬を行ふ會するもの神官親戚役場員在郷軍人會員學校職員生徒有志者無慮一千有餘名なりき

歩兵軍曹井口一角（大谷）

日露の役明治三十七年十月十一日沙河方面英得牛糸村に於て戰死す明治三十八年二月五日豊橋町僧行社に於て遺骨の受取をなす同年二月二十六日大谷尋常小學校に於て神式を以て村葬を行ふ會するもの神官僧侶親戚役場員在郷軍人會員學校職員生徒有志者無慮八百餘名なりき

歩兵上等兵山口市太郎（大谷）

日露の役明治三十八年十一月十九日韓國威興病院會寧分院に於て死亡す遺骨送附せられしを以て同三十九年四月八日大谷高栖寺に於て佛式を以て村葬を行ふ會するもの神官親戚役場員在郷軍人會員學校職員生徒有志者無慮五百名なりき

輜重兵補助輸卒　津ヶ谷春藏（大谷）

日露之役明治三十八年九月二日病により名古屋豫備病院へ入院せしが仝年九月四日死亡したり仝月十一日遺骨となり歸還せられ吉祥寺に安置し仝月二十五日仝寺に於て村葬を執行す村長以下學校職員生徒一同參列し會するもの三百名式了つて本村戰病死者四名の追弔會を執行せらる

戰役記念事業

一、都筑佐久米駒場記念碑

日清日露兩戰役を記念せんが爲都筑佐久米駒場三區聯合して建立す都筑愛宕山麓姫街道に南面して立つ碑石長さ一丈二尺巾六尺陸前產粘板岩なり表面戰捷紀念碑裏面日清日露兩役關係軍人の官等氏名を記す當時奥大將の揮毫にかゝる

一、大崎記念碑

日清日露兩戰役を記念せんが爲の建立にして大崎神明宮鳥居の傍に南面して立つ碑石長さ一丈巾五尺陸前產の粘板岩を以てす表面戰捷紀念碑裏面日清北清日露三戰役關係軍人の勳等官位氏名を記す當時奥大將の揮毫にかゝる

一、大谷記念碑

日清日露兩戰役を記念せんが爲めの建立にして大谷前山招魂碑と共に東面して立つ碑石長さ九尺圓筒形の御影石を以てす表面戰捷記念碑裏面日清日露兩戰役關係軍人の氏名を記す豐橋の書家伊東芳州氏の揮毫にかゝる

一、大谷招魂碑

日露戰役の戰死者名倉仲治井口一角病死者山口市太郎津ヶ谷春藏の靈を祀る記念碑と共に南面して立つ碑石長さ七尺巾四尺陸前產の粘板岩なり忠魂碑と記す山縣元帥の揮毫にかゝる

右の三記念碑一招魂碑は共に明治四十年の建立なり

引佐郡東濱名村大谷

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級　井口一角

明治十四年九月廿二日生

明治三十四年十二月一日下士候補生として歩兵第十八聯隊へ入隊仝卅五年十二月一日歩兵一等卒の階級に進み仝日歩兵上等兵の階級に進み仝卅六年十二月歩兵伍長に任ぜられ仝卅七年三月六日充員下命仝年四月廿日征露從軍として宇品港出帆清國上陸後各地の戰鬪に參與し仝年十月一日歩兵軍曹に任ぜられ仝日英得牛彔附近の戰鬪に於て左胸部貫通銃創を受け戰死す仝戰役の功に依り功七級金鵄勳章年金百圓及勳七等青色桐葉章を賜り併せて遺族へ特別賜金六百九十圓並に扶助料年額八十圓を賜與せらる明治卅八年二月二十六日仝村大谷小學校に於て村葬執行せらる

引佐郡東濱名村大谷

陸軍歩兵曹長勳七等　名倉仲治

明治十一年六月六日生

明治三十一年十二月一日徴兵にて歩兵第十八聯隊へ入隊仝卅二年十二月一日歩兵一等卒申付られ仝日更に上等兵を命ぜられ仝卅三年十二月一日歩兵伍長に任ぜらる仝卅四年十二月一日豫備役編入仝卅七年二月六日充員下令仝月九日近衛歩兵第一聯隊へ應召仝年三月十一日征露從軍として宇品港出帆戰地上陸後義州及九連城附近の戰鬪を初め各地に轉戰して仝年九月十一日歩兵軍曹に進み仝年十月十三日馬耳山附近の戰鬪に參加負傷し療養中仝月十七日歩兵曹長に任ぜられ仝日清國盛京省高力屯近衞師團第二野戰病院に於て傷死す仝戰役の功に依り勳七等青色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金七百五十圓並に扶助料年額九十圓を賜與せられ仝卅八年一月七日仝村大谷吉祥寺に於て村葬儀執行せられたり

引佐郡東濱名村大谷

陸軍歩兵上等兵勳八等　山口市太郎

明治十六年八月十三日生

明治三十六年十二月一日近衛歩兵第參聯隊に入營仝卅七年二月五日充員下令仝年十月廿四日歩兵一等卒申付られ仝月廿六日歩兵上等兵を命せらる仝卅八年四月六日歩兵第四十九聯隊へ編入仝年六月二十六日征露從軍の爲め横濱港出帆仝年九月二十六日宇品港歸着仝年十月十八日韓國守備の爲め宇品港出帆仝月廿一日韓國清津上陸仝年十一月十日疾病に依り感興病院會寧分院に入院仝月十九日仝院に於て病死す仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金二百六十圓並に扶助料年額三十八圓を賜與せらる仝卅九年四月八日仝村大谷小學校に於て村葬執行せらる

西濱名村誌

一、概　說

位置　西濱名村は引佐郡の西南端にあり東は東濱名村及び奥山村に接し北は愛知縣八名郡山吉田村及び八名村に接す西は仝縣仝郡石巻村にして南方の一部は濱名郡知波田村に連る而して東南の一部は猪鼻湖に臨み湖を隔てゝ東濱名村大崎と相對す

面積　大約三・五方里あり東西最長二里十町、南北最長二里十二町、東北より西南に亘れる域内の最長二里三十町に達す

區劃　村内を別ちて津々崎・宇志・三ケ日・只木・摩訶耶・岡本・福長・平山・釣・日比澤・本坂・鵜代・上尾奈・下尾奈の十四區とす　村役場は三ケ日區にあり靜岡縣廳を去ること二十六里三十四町、引佐郡役所を距ること三里十六町なり

地勢　一帶の連嶺東西北の三面を圍繞し殆ど盆地の形をなしたゞ東南の一部のみ猪鼻湖に臨んで豁けたり河流は悉く源をこの連山の溪谷に發し東又は南に流れて猪鼻湖に入るされど其の最も大なる宇利山川を以てするも流程四十町を出でず一も舟楫を通ずるに足るものなし平野は宇利山川釣橋川沿岸及び猪鼻湖岸に多し

山河の重なるもの左のごとし

本坂山は愛知静岡の兩縣に跨り海拔四四五米八あり

扇山は村の東北只木にあり高さ四二三米を超ゆ

日比澤川は源を本坂峠に發し東流して本坂日比澤の兩區を流れ猪鼻湖に入る長さ約一里一町山本川は釣橋川の上流をなし長さ二十八丁

釣橋川は長さ三十二町源を扇山に發し西南に流れて三ヶ日に出で宇利峠より發する宇利山川一里三丁を合し南流して猪鼻湖に入る

戸數　千六百九十戸　（大正十年八月調）

人口　九千八百三十八人　男　五千一百人　女　四千八百廿八人

土地

土地總面積　四八四七町四反九畝三歩

内

御料地　三〇五八町六反三畝歩

官有地　一八町二反八畝歩

民有地　一千七百五十一町七反一畝十四歩

田　四四五町三反五畝歩

畑　四四三町二反歩

宅地　二〇八八一四坪

山林　五三八町三反六畝三歩

原野　二七四町〇七畝歩

職業別戸數

農業	一二〇〇戸
國税營業者	一五八
行商	四三
旅宿屋	二
牛馬賣買	二
職工	六〇
小賣商	一一〇
其他	一三七戸

計　一七一二戸

財　政

國税額	三萬圓千三百九十四圓七十七錢	
縣税額	二萬三千八百四十五圓五十五錢	
村費歳入歳出豫算各六萬一千三百四十三圓		
經常費村税戸別割一戸平均八圓四拾五錢五厘		
村有財産土地及び建物價額一萬七千九百四十四圓		
部落有財産土地及び建物價額六千六百八十八圓		

重要物産

重要物産	石高	金高
米	八一七二石	二七八、四一六圓
麥	三一六一石	四一、〇九二圓
繭	五三四七石	二四九、一九九圓
生糸	五八〇貫	四九、一二五圓
柑橘	三一二、九七〇貫	八九、五九二圓

（大正九年度）

疊表	一五四、三四〇枚	一一四、九五〇圓
木材		七、五〇〇圓
薪炭		五六、七七三圓
其他		二、四〇〇圓

備考疊表は加工をせるものを合すれば三十萬圓餘に達す本年は五十萬圓に達する見込なり

交　通

交通の機關は水陸共に三ヶ日を中心として村内各地及び村外に通ず其の陸路村外に通ずるものは東南の一部を除くの外は何れも山岳蟠居するを以て行路尚ほ不便少なからず

道路

一類姫街道＝東濱名村都筑より來り津々崎●宇志●三ヶ日●釣●日比澤●本坂を經、本坂峠を越えて愛知縣八名郡石巻村に通ず里程延長二里十三町非常に便利となれり

二類三州街道＝三ヶ日を起点とし岡本●福長●平山を經、宇利峠を越えて仝縣仝郡富岡に通ず延長一里十七町

三類鷲津三ヶ日往還＝三ヶ日を起点とし鵜代●下尾奈を經、瀬戸を廻りて濱名郡に入り鷲津に達するもの延長一里二十七町

本坂峠の改良は多年の懸案なりしが大正四年七月十五日を以て其竣工式を擧ぐるに至る今當時静岡、愛知両縣技師の工事報告書を左に摘記すべし

（前略）抑も本工事は去る大正二年中國庫の補助を受け愛知縣と共に施行の計畫成りたるものにして大正三年三月廿七日起工本年六月十六日竣工す新道總長五千餘間にして中間縣界に隧道を開鑿する事一百十七間静岡縣に屬する總延長三千百九十七間一分六厘内

隧道六十二間

橋梁一ヶ所長五間木造

暗渠十二ヶ所長十四間七分煉瓦造石造又は土管

石垣一千十七坪六合

道巾十二尺乃至二十四尺

勾配最急十五分の一平均二十二、五分の一

最小半徑七間

隧道は高十五尺道巾十六尺にして煉瓦三枚乃至四枚卷とし背面に亞鉛板を張りたるものなるを以て漏水を防ぎ路面には混凝土を施し路側研取の所には凡て幅深各一尺の側溝を設けたる而して之に要せし工費總計金七萬三千九百六十圓五十九錢にして内國庫補助金三萬九千二百四十一圓を得たり之を舊道路の幅員六尺乃至九尺勾配最急四、二八分の一平均十二、五分の一最小半徑一間なりしに比すれば多大の改善を言はざるべからず國縣道築造の標準にも叶ひ砲車自働車の通過に支障なく先以て現下の要望に適應するを得む歟　以上

静岡縣技師從五位勳五等　土　屋　峰　吉

愛知縣の部

（前略）抑も本工事は大正二年十二月縣會の議決に基き大正三年一月設計を了り同三月國庫の補助を受け其の四月工を起し越て大正四年六月之が工程を竣る通路は愛知静岡両縣を通し延長約五千間とし其の愛知縣に屬する分は千九百十九間二分七厘内隧道五十五間とす幅員は最狹十二尺勾配最急十五分の一にして平均十八分の一とす隧道の高さ十五尺幅は側溝を合せ十八尺全部煉瓦造にして路面は一体に混凝土を舗く而して隧道及之に接續する道路延長六十二間七分八厘は施行上便宜の爲工事を静岡縣に委托し其他は本縣に於て之を施行す其の延長千八百一間四分九厘にして地形に循ひ曲線を設くること實に八十八箇所其の最少半徑を七間とす線路中構造物の主なるものは暗渠三ヶ所土橋板橋各一ヶ所土留石垣總面積四百坪其の最高きものは四十尺の上に出づ暗渠は煉瓦及鐵筋混凝土を用ゐ石垣の大半は人造石にして此總工費金六萬千百四十圓三十二錢工事施行に關しては本縣委托工事に對し静岡縣に於て能く其の衝に當られたる勞を多とす（以下畧す）

大正四年七月十五日　　愛知縣技師正五位勳五等　原　静　雄

三類奥山三ヶ日往還＝岡本より福長、只木を經風越峠を越えて奥山村に通ず延長一里余町

三類寅柳野往還＝大福寺より愛知縣へ通ず延長一里余町

里道＝里程延長五十七里三十町

船舶

耕作舟	一九〇	漁舟	一四	運送用舟	二四

車輛

客馬車	一	荷馬車	二五	荷車	三八四	自轉車	二八九	耕作車	二四一

客馬車は三ヶ日氣賀間を往復す

荷馬車は主に村内及び三州街道を往復す

運送用船舶は主に三ヶ日鷲津間を往復す

外に濱名湖巡航船株式會社及び新居汽船株式會社の客船あり前者は明治四十一年航海開始にして三ヶ日鷲津間を定期航海し一日七回往復す後者は大正四年より航海を開始し三ヶ日新居間を一日七回の定期航海をなす

二、沿　革

本村は現今三ヶ日・宇志・津々崎・岡本・摩訶耶・只木・大福寺・長根・平山・釣り・日比澤・本坂・鵜代・上尾奈・下尾奈の十五區より成れども、地方自治制度頒布前は區名は即ち村名にて、三ヶ日村・宇志村等と稱せり古は濱名郡に隷し、中頃敷知郡に屬し、明治二十九年以後引佐郡に編入せらる。

内山氏遠江風土記傳に波萬那、海西惣號濱名、割濱名郡隷敷智郡者、寛永十七年前也。

敷知郡内、河別西、古之濱名郡也、東入海南大海、西北並山三河國堺、限本坂岑。

濱名郡（神戸郷　村五　濱名郷　村十三　尾奈郷　村二　大知波郷　村五　岡崎郷　村五　吉美郷　村四　中之郷　村五　橋本郷　村三）

村四十二　驛家二　關一

高壹萬貳千七百九拾石壹斗八升貳合　依元祿三年高帳

吉田氏大日本地名辭書に、濱名郡は和名抄波萬奈と注し六鄕に分つ然れども後世郡堺錯亂し、其他皆濱松庄に入りし故にや、敷知郡の管内と爲る。明治二十九年敷知長上豐田等の諸郡廢せられ濱名の境域增大す、然れども古の濱名郡の地の引佐郡に併せらるゝものありて出入共に之を見る。

濱名の舊郡域は湖西の地參河の州堺に緣れるものなり、其の大湖をも濱名と呼ぶは橋梁の名に濱名と命じたるに因る、而も橋名は郡名に出でし如し。

和名抄波萬奈　六鄕

猪鼻鄕　宇智鄕　英多鄕　贄代鄕　坂本鄕　大神鄕

正倉院文書　天平十二年遠江國濱名郡輸租帳

合受田戸漆伯伍拾戸

壹伯貳拾伍戸　神戸　壹伯壹拾戸　封戸　伍伯壹拾伍戸　官戸

口伍仟參伯拾壹人　貳仟參伯捌拾伍人男　貳仟玖伯肆拾伍人女　壹拾漆人奴　貳拾人婢

津築鄕　官戸參拾捌、貳拾貳鄕戸、壹拾陸房戸、

口貳伯陸拾捌人　壹伯貳拾壹人男　壹伯肆拾漆人女　玖戸損五分以上　壹拾肆戸損四分以下

壹拾伍戸全得

見管田參拾捌町參殿貳伯玖拾玖歩　口分

和名抄に津築郷を缺きて六郷とせしは是恐らくは脱漏ならんとあり

皇紀千四百年の頃、今の大字鵜代尾奈の邊は貫代郷と稱し、釣ヶ・日比澤・本坂の方面は坂本郷と呼び、三ヶ日・岡本・摩訶耶・只木あたりを大神郷と唱へ、就中岡本邊を神戸と云ひしなるべく、風土記傳に見ゆる郷村の呼稱は後世のことたるべし。

神戸神鳳抄に所以號神戸者、昔時天照皇太神乃御戸代依奉互神服部等、三河乃赤引乃神調乃生糸母豆和妙乃神衣織作所也、故云神戸。

神祇令曰、孟夏神衣祭、義解云、謂伊勢神宮祭也、此神服部等齋戒潔清、以三河赤引神調糸織作、

續日本紀曰神護景雲三年（二月）奉神服於天下諸社

内宮延暦儀式帳九月例云、供奉太神宮所々神戸荷前物云云、神衣料云云、伊賀、尾張三河遠江四ヶ國神戸供進

風土記傳云、岡本村、神服部世住、稱宿禰、今云目代、織作神衣、有賜田、朱符高二拾九石八斗餘、有機殿、併建於齋宮

現に岡本區内三拾有餘戸の小字を神戸と稱す。神服部氏は今在らざれど機殿齋宮は今猶存し、毎年四月小祭を行ふ。

天明九年四月十四日奉納機殿歌

遠江濱名乃岡乎天照皇太神乃御戸代登定賜志、昔從、服部之登母賀織機乃、常例登三河奈留、新桑屑乃宇都由布乃、生糸乃神調乎此所爾持已志、神倉爾納置禮婆、畏幾也、神乃大物登清萬波里、忌機屋乎毎年爾、妻木伐與勢野萱苅、新良新良爾殿造、棚機都米乃已母良志豆、多多里加世毘乃糸業乎、奈志爾奈志乎閉、高機爾引波閉懸豆、其機乎織爾於里奈志、和多閉乃、美御衣乃神御衣登稱万都里、保岐麻都里、御櫃爾納、大宮爾、御調登奉留彌年乃波爾。

伊波比古志、神乃御衣乃、糸波閉豆、多那波多都米波、幾世經奴良牟、麻績服部、相併於禮留。神御衣乎、今母仕加安良多閉和布、

元祿三年高帳に依る各字の石高左の如し

岡本	昔時伊勢大神宮領	高六百貳拾參石八斗
大福寺	神戸郷中建寺、號大福寺村	高八百拾四石五斗四升一合
摩訶耶	仝上　號摩訶耶村	高百八拾八石貳斗八合
只木	舊名彌和村	高貳百五拾貳石壹升六合
平山		高百拾壹石五斗三升四合
本坂		高百三拾七石六斗八升七合
日比澤		高貳百四拾五石壹斗貳升四合

釣　高百貳拾壹石四斗六升七合
南脇、今鵜代區に合す　高四拾七石五斗六升三合
鵜代　高貳百五拾五石九斗九升四合
三ヶ日　高五百貳拾七石六升三合
宇志　高三百七拾三石三升三合
津々崎　高三百四拾三石三斗六升二合
上尾奈　高百三拾五石貳斗八升四合
下尾奈　高三百九拾石五斗八升壹合

上記神戸郷、村五とは岡本より平山に至る五ヶ村、濱名郷、村十三とは本坂より津々崎に至る八ヶ村と東濱名村に屬する駒場●野地●都筑●佐久米●大崎の五ヶ村とをいひ、尾奈郷二ヶ村とは上下尾奈をいひしなり。後世に至りては悉く之を濱名と總稱せり。現東西濱名村名蓋し之に原く。

天正元年正月、信玄刑部上油殿に於て、山家三方衆に案内させ、正月七日に上刑部を打立、氣賀通り引佐越を濱名平山へ掛り、三州に働き宇理の原へ出、同十一日、菅沼新八郎定盈が楯籠る野田城に取懸りて攻給ふ、(東遷基業)

永正の末より今川領に屬し、永祿の末より德川領となり、關ヶ原役後、親藩、松平、水野、井上、近藤大澤等の領に歸す。「廢藩に及んで濱松縣の治下に入り、數年にして靜岡縣に併合せらる。明治の初期、大區小區の制を布かるゝや、釣ヶ●日比澤●本坂●鵜代●下尾奈●上尾奈の六ヶ村は、大知波●太田●利木等の各村と、第一大區第十三小區に屬し、他の各村は現東濱名村と共に第一大區第十四小區に屬せり。明治十九年「頃」より鵜代村外五ヶ村役場、三ヶ日村外七ヶ村役場の下に各村政を扱はれしも亦之に準じたるなるべし

維新前本村内各領主

一、大福寺領　七十五石
一、摩訶耶寺領　七十五石
一、金剛寺領　五十石
一、神明領　四十二石
一、岡本神服部領　三十石六斗
一、宇志朱印　十五石
一、尾奈朱印　十石
一、江雲寺領　五石

右社寺領等を除くの外

一、井上河内守（濱松城主）領　日比澤　本坂　鵜代　上尾奈　下尾奈
三ヶ日　宇志　津々崎　釣
一、内野近藤領
岡本　大福寺　長根　平山　只木　摩訶耶

三、名勝遺跡

本坂峠の紅葉

本坂山は靜岡、愛知兩縣の境界に屹立し姫街道其間を過ぎ昔時旅客の箱根に亞ぐ天險と稱せらる山高からざるも坂路山麓本坂の里より十八町余頂上最も風景に富み東南濱名の湖は晶々一大鏡をなし白帆點々白鷗の飛ぶが如く湖口の鐵橋は蜒々として長蛇の横たはるが如く芙蓉の靈峯遙かに東天に望むを得西は三河の豊川帶の如く遠く伊勢の翠巒煙霞の如く勝絶言ふ可らず殊に秋霜の候に至りては滿山皆紅葉を呈し美觀言語に絶せり今や縣道隧道を穿ち兩縣の交通自働車を通ずるに至る

板築驛

本坂の里往時板築驛と稱し此處に橘逸勢の古墳あり承和八年逸勢故ありて伊豆に流さる配所に赴くの途病んで板築の驛に卒す其女妙冲墓側に庵して誓念解らず文德天皇の嘉祥三年五月正五位下を追贈し勅を遠江國板築の驛に下して本郷に葬らせ玉へり妙冲屍を負ふて京都に歸れり時人嘆賞して孝女と稱す此時妙冲逸勢埋骨の跡へ庵舍を作り卿の愛持せられし鏡一面を君の代りとして埋め去る其古鏡今尚本坂村に在り嗚呼古墳春秋幾千歳今唯松風と共に語るのみ

猪鼻湖

周圍五里三十四丁湖中亦勝景に富む其瀬戸口に至れば兩岸の距離僅かに五十間水深滄々水底を知らず東岸に快岩奇石重疊相寄り小島突出岩端野猪の鼻の如し湖名之より起ると云ふ

湖岸に尾奈、鵜代、胴崎（宇志）の各字あり俗説に曰く近衛天皇御病床に在らせられ夜毎に殿上屋外に怪しき鳴聲聞ゆるあり源三位頼政勅令を受け暗夜怪鳥を射殺す此の怪鳥を鵺といふ時に体遠く飛んで三体に分れ頭は鵺代に胴は胴崎に尾は尾奈に落つ名の起る所以なりと源三位頼政の後裔大矢安藝守の末孫大矢久平氏は今尾奈に在り時に頼政の射し弓を家寶として藏す

摩訶耶寺瀑

摩訶耶寺は三ヶ日の北十町眞言宗にして神龜三年行基菩薩の開基なり境内溪流あり飛瀑懸りて雷鼓の響かと疑はる碧潭の附近奇巖の跳るものあり舞ふものあり雅致言ふべからず近年栗唐の瀧と稱す夏季遠近の士女此地に杖を曳く者多し寺に國寶千手觀音あり

濱納豆の祖寺

摩訶耶の西北數丁福長區に大福寺あり千有余年の古刹なり初め幡教寺といふ土御門天皇特に大福寺なる三大文字の勅額を賜ふ依つて大福寺と改稱す爾來村名をも大福寺と云ふ

此寺古來納豆を製す摩訶耶と同じく今川、豐臣、德川諸公代々へ進獻せり遠江の名產濱名納豆と稱するは即ち是なり

此寺國寶三點を藏す

四、社寺附古文書寶物等

西濱名村神社

神社名	社格	祭神	所在地	祭日	氏子
神明神社	村社	大刀雄命 天照大御神 桙幡千々姫命	下尾奈宮中		一四五戸
濱名總社神明宮	郷社	天照大御神 天棚機姫神 天羽槌男命	三ヶ日大輪山		
八幡宮	村社	息長足媛命 譽田玉和氣命 佚姫	宇志矢内	八月十五日	八七戸
白山神社	村社	白山比賣命	津々崎中野	八月十五日	六二戸
八幡宮	村社	譽田別命	岡本大門戸	六月廿五日	一四六戸
神明宮	村社	天照大御神	只木宮平	十月一日	六八戸
神明宮	村社	天照大御神	福永東山		六一戸
伊雜皇神社	村社	志摩國王磯宮御日神	平山アサリ田		一〇〇戸
神明神社	村社	天照大御神 豐受大神宮	釣西山	九月十五日	七四戸
白山神社	無格社	白山媛命	釣西山		一七戸
白山神社	村社	白山比賣命	日比澤山脇	九月十五日	五三戸
八幡神社	村社	品陀和氣命	本坂北向	九月十九日	六二戸
八柱神社	村社	五男三女命	鳴代前畑	十一月十五日	八七戸
猪鼻明神社	村社	武麥槌命	下尾奈瀬戸	九月九日	一四五戸
白山神社	村社	白山比賣命	上尾奈イロ	八月十五日	五三戸
稻荷神社	村社	稻倉魂命	福長東京		六八戸
初生衣神社	無格社	天棚機姫命	岡本神戸		
神明宮	無格社	天照大御神	岡本アラヤ		三二戸
津島神社	無格社	素盞嗚尊	摩訶耶熊野		四戸
稻荷神社	村社		三ヶ日大輪山		

神明神社（式内）

神社の境内三百九十一坪創立年月は不詳なるも慶長八年十一月十日社殿修造の棟札あり明治十二年九月村社に列せらる祭典は毎年一月十六日に之を行ふ境内に白山神社荒魂宮愛宕社西の宮津島社嚴島社あり

濱名總社神明宮（式内）

三ヶ日大輪山に鎮坐濱名總社神明宮と稱し式内神社たり祭神は伊勢内宮と御同神配祀神に天棚機姫天羽槌男神太田命の三神あり祭典は毎年七月三十一日に執行す境内二段九畝二十八歩あり

由緒

創立年月不詳風土記傳の載する所に由れば

神明社は朱符之神田高四十二石神主縣氏（註神社部）所謂式内英多神社也又曰彌和神社とあり而して同書に

三ヶ日舊名英多（阿加多）後云中之郷慶長以後號三箇日とあれば舊英多郷にあり故に英多神社と稱せしものならんも尚吉田東伍氏地名辭書の載する所に由れば

英田郷＝和名抄濱名郡英多郷は今知波田村入出村新所村等とす引佐郡へ入れる贄代郷の南にして濱名湖の西岸參州界に當れる地とす内山眞龍氏風土記傳に三ヶ日を英多郷といひ其神明社を式内英多神なりと說く然れども三ヶ日は大神郷にあたり且つ英多神は新所に其舊祀を遺せば三箇日と混ずべからず大知波には式内濱名郡大知波神社ありとあり尚同書大神郷の部に

大神郷＝和名抄濱名郡大神郷今引佐郡西濱名村の東北偏及東濱名村なるべし式内濱名郡彌和山神社は西濱名村の只木にありて大神の位置を證明す彌和山神社の外に大神神社といふ社あり亦此地ならんとあるより考ふれば本社は式内英多神社にあらずして或は式内大神神社にはあらざるか暫く記して識者の辨を俟つ

神主縣氏所藏舊記

垂仁天皇之御宇倭媛内親王

御神体乎御奉戴被爲遊從大和國伊賀伊勢美濃尾張三河之國に御鎮坐之御地乎御見立被遊御船にて當濱名迄行幸被遊此社地に暫く行宮被爲座候處御神託にて更に伊勢被爲還度會之地に御鎮坐被爲定候御行宮之地故に御宮造奉仕今に至迄濱名總社神明宮登奉稱候右御由緒乎以當國造より濱名神戸乎五十鈴之大宮江奉献被致候六七百年以前迄者御神領之處兵亂中追々及退轉候然る處天正之度神領御判物に茂公文禰宜之職號相殘り土人申傳に茂此社は皇太神の御鎮座になる所登申候今に至迄御宮造古躰に候事共御拜覽被遊被下候得者相分可申候事

伊勢皇太神宮御初衣當社中棚機姫社に納置勢州江相送候に付當社者御初生衣清所與唱候中頃より違例御初生衣預り當社に納置候事も止に相成候得共他社登違籠造の宮に御座候事

遠江國濱名庄惣社神明領之事

一、貳拾貳石　諸祭修理免

一、五　石　神主領
一、五　石　小禰宜
一、拾　石　役人五人
合四拾貳石

右社領中郷津々崎在之惣之屋敷五間合四十二石事令寄附之仡以檢地上高以任員數全可守約之山林竹木諸役等如有來之免除候者也

天正十八年十二月二十六日　豐臣朱印

神明領

遠州濱名神戸總社神明之事
合四拾貳石餘

右任甚深之秘符に寄附之然者禰宜三人並役人二人諸役不入領掌畢依之竹木見伐等堅令停止之許村社前可抽懇祈者也仍而如件

天正元癸酉年十二月廿一日　家康花押
宮奉行神戸

惣公文禰三人

總社神明領之事

一、貳拾貳石　諸祭並修理免
一、五　石　神主領
一、五　石　小禰宜
一、拾　石　役人五人
合四拾貳石

御朱印　家康公花押

右遠江國濱名庄中郷津々崎村の内任先規所寄附也並に山林竹木諸役全免許訖神供祭禮不可有懈怠之狀如件

慶長八年九月十九日

元和三年三月十七日合德院公より先規により高四十二石朱印を賜はる
以後天保十年九月に至る迄將軍更代毎に朱印を賜はる前に仝じ

八　幡　宮（字志矢内）

境内僅かに八十八坪に過ぎず創立年月は不詳なるも舊幕府朱印高十五石明治元年十月十七日還納仝五年村社に列せらる祭典は八月十五日執行境内末社に赤雨鶴神社山神社淺間神社八柱神社津島神社二座の六

社あり

白山神社

境内坪數二百三十坪あり創立の年月詳かならざるも天文二十一壬子の年再建の棟札あり明治十二年九月村社に列せらる祭典は毎年八月十五日に執行す境内に貴船大神天滿宮山神社荒神社稲荷社障の社市杵社の七社あり

八幡神社

境内三百九十四坪創立年月不詳元和四年戊午十一月再建明治十二年九月村社に列せらる祭典は六月二十五日に執行す境内に乳宮稲荷神社大名物少名彦名神社進雄神社八柱神社白山神社英多神社山神社齋宮岩長神社伊勢外宮の十一社あり

神明宮（式内）

彌和山神社といひ境内四百八十坪創立年月不詳貞治四年乙巳再建明治十二年九月十日村社に列せらる式内神社なり祭典は毎年十月一日に執行す境内末社に八幡宮愛宕社諏訪神社下諏訪神社御鍬大明神八柱神社淺間神社金比羅神社稲荷神社津島神社天滿宮西ノ宮山神社二ノ宮の十四社あり

彌和山神社＝只木村神明社地號彌和山俗田彌也山檜山也（明和中伐盡）

文和風土記彌和山神社崇峻天皇元年所祭事代主命也（以上風土記）

神明宮

境内六十坪創立年月不詳寛文十一年癸戌再建の棟札あり明治十二年九月村社に列せらる境内に若宮社稲荷社愛宕社山神社の四末社あり

伊雑皇神社

境内僅かに三十坪天和元年九月造立慶應元年丑九月迄に十二回修造す境内に白壁神社八柱神社金山神社の三末社あり

神明神社

境内八十四坪創立年月不詳なるも寛永廿一年修造（或は創立か）の棟札あり元除地高五斗明治六年上地となる境内に八幡神社あり毎年祭日は九月十五日なり

白山神社（日比澤）

境内百三十五坪創立不詳寛永元戊辰年十月二十四日再建の棟札あり明治十二年村社に列せらる祭典は毎年九月十五日なり

八幡神社

境内二百三坪創立年月不詳寛永十一年甲戌極月再建の棟札あり以後明治十四年迄に十五回修造す元除地高一石二斗八升明治十二年九月村社に列せらる祭典は毎年九月十九日境内に八幡神社八柱神社橘神社愛

宕神社山神社の末社あり

八柱神社

境内三百九十坪創立年月不詳寛正六年の棟札に鎮守御寶殿大日本東海道遠江國濱名郡贄代とあり尙明應七年寛永二年の二回に修造の棟札各一枚あり明治十二年九月村社に列せらる祭典は十一月十五日に執行す境内に神明社稻荷社八幡社八柱神社山神社河合神社と社名不詳の一社とを合祀す

猪鼻湖神社

境内百坪あり古老の傳ふる所によれば本社は其位置海濱にあるが故に大風雨に際し流失せしこと數多度從つて其創立及再建の年月等詳からず只文化元年七月七日修造の棟札のみは現存せり明治五年村社に列せらる祭典は九月九日

猪鼻湖神社（風土記傳）

下尾奈村神明社也稱迫戸明神朱符神田高拾壹石社地猪鼻岩之湖邊なり又稱大和波八幡社謂式社未詳文和風土記曰濱名郡猪鼻湖神社二座景行天皇十九年八月所祭猿田彦也按濱名肥前守頼親之末有猿田氏者此社邊所生乎

神鳳抄太神宮領尾奈御厨園云云故有神明社猿田彦別社也尙古老の言に由れば本社は所謂延喜式猪鼻湖神社なるが如くなるも吉田東伍氏著大日本地名辭書所載に由れば左の如し今暫く記して疑を存す

猪鼻郷（地名辭書）

和名抄濱名郡驛家郷延喜式遠江國猪鼻驛今の白須賀町並に新居町の中なるべし此驛は中世橋本と稱したりしが明應年中洪浪によりて江岸一變し橋本の驛家を廢し近世は新居を以て關津となしたり風土記傳に應永十二年文明七年明應八年永正七年等有急浪湖水變爲湖海蓋當此時猪鼻驛水沒古道廢而新以三箇日爲驛家乎俗以新居宿曰猪鼻者非也と論せるは採り難し橋本の名（湖南新居の傍に）の存する上は猪鼻驛濱名橋も此所なること疑なし三箇日大崎など湖北に猪鼻驛を求むべからず然れども古より湖南の猪鼻を大路とし湖北の本坂引佐を支路としたること自然の形勢とすされば續後紀に

天長十年遠江國濱名郡猪鼻驛家廢來稍久今依國司言遣使檢其利害更今興復

と載せ當時湖南の路の中廢したることも見え本坂を以て一時東海道とせる狀も推知せらる宗祇の名所方角抄に濱名橋も湖南にありと錄したるは如是の事情に因りて謬說を生じたるならん更科日記に

入江海（中略）いみじく面白しそれより猪の鼻といふ坂の得もいばずわびしきを上りぬれば三河國高師の濱といふ

と述べたるは橋のありし當時の經歷にして海濱なる高師の山の續きに猪鼻坂のありけるを證す

延喜式濱名郡猪鼻湖神社東海道圖會云此神は湖の岸の上に鎭座ど見えたり後世の八王子社か此八王子も

と濱邊の岡にありしを寶永四年橋本轉村の時諏訪明神の社中へ移すと風土記傳云「猪鼻湖神社は或は大

知波八幡宮とも又尾奈村の瀬戸明神ともいべり」按に猪鼻の湖は湊とよみ萬葉集仙覺抄に引ける阿波國風土記逸文に其例あり　文德實錄に「湖有一口」とある湖口の神とす後世濱名の水海の支灣（大崎湖）を猪鼻湖といふものと其義相異なり此神は橋本の諏訪明神一名湊明神といふもの即ち是なり

白山神社（上尾奈）

境内百九十坪あり由緒は之を詳かにする能はざるも貞享元年十一月社殿修造のこと棟札に記しあり明治十二年村社に列せらる毎歳八月十五日を以て祭典を執行す境内に津島神社山神社愛宕社天神社の四社を合祀す

稲荷神社

境内九十四坪由緒不明なるも萬延元庚申年再建明治十二年村社に列せらる祭典九月二十二日境内に秋葉神社あり

西濱名村寺院

寺院名	宗派	所在地	檀家数
大福寺	眞言宗	大福寺	一五〇戸
摩訶耶寺	眞言宗	神戸郷	五〇戸
金剛寺	禪宗曹洞派	三ケ日上ノ山	三五〇戸
津梁院	曹洞派	津々崎中野	五六戸
延命寺	曹洞派	平山赤サヽ	七二戸
夢寂寺	曹洞派	只木中場	五〇戸
華藏寺	曹洞派	日比澤眞香畑	六〇戸
大月寺	曹洞派	本坂向	五〇戸
鵬海院	曹洞派	鵜代寺中	六〇戸
圓通寺	曹洞派	下尾奈三崎	六五戸
龍谷寺	曹洞派	下尾奈三崎	八〇戸
玉洞寺	曹洞派	上尾奈中島	五〇戸

(1) 摩訶耶寺

摩訶耶區にあり聖武天皇の刺願にして行基菩薩の開基なり紀州高野山平等院の末寺にして維新前までは山林竹木を除き七十石の田錄あり下寺數坊を有し境内甚だ廣く（六千二百七十坪）出龜の池あり飛瀑あり堂宇數個ありて亦見るべきものあり殊に山門は古色己に古刹を示す神佛の別を明かに離さるる迄は郷戸の郷廿一ヶ村の神佛遷宮の導師は本寺の權にして頗る盛なりき本尊は厄除正觀世音にして行基の作と傳ふ　國寶千手觀音あり寺傳に弘法大師の作なりと言へども明かならす別に子育觀音あり何れも日日四

五十人の登山者あり殊に夏季は參詣の序瀑に遊ふもの多し

寶物

佛像佛肖等の寶物二三十点を藏す中にも千手觀音は大正四年國寶の指定となる國寶千手觀音は寺傳に弘法大師の作と言へとも明かならす然れとも千有余年を經たる事は明かにして近代の佛像と大に趣を異にす

由緒

在神戸郷封田七拾石献納豆（如大福寺說）寺記曰聖武天皇天平十八年孟夏仁基菩薩之草創始在止牟麻久山觀眞葭堂後移于神戸郷用摩訶耶定字額嘉暦元年建山門置棟簡仁王像運慶作之毎年正月七日有神事能舞貞享五年以后停止焉今於神事時軍人群參有採物歌曰伊邪也殿原末都婆也志爾伊奈不與佐用賀美母佐用賀美母（風土記傳）

(2) 金剛寺

境内三千九百廿二坪禪宗曹洞派にして末寺拾五ヶ寺を有す本尊は地藏尊にして檀徒三百數十戸を有す

舊朱印五拾石白書院獨禮格たり

由緒

在三ヶ日曹洞宗享隠派三河國寶飯郡伊奈村東漸寺末朱符之寺田高五十石文和二年左近大夫清政之所造也近江國三井寺法師來住今住曹洞宗僧侶（風土記傳）

（註清政之事佐久城の所に見ゆ）

(3) 津梁院

三ヶ日金剛寺末にして境内三百九十六坪本尊は十一面觀世音菩薩檀家五十六戸あり月心法印の開基

舊朱印高七石五斗

(4) 延命寺

金剛寺末にして境内二千百七拾八坪本尊は地藏菩薩文錄四年乙未本寺金剛寺五世觀世吉山宗胚和尚の創立に係る檀家七十二戸あり

(5) 夢寂寺

境内貳百二十一坪曹洞宗金剛寺末にして本尊は聖觀世音菩薩檀徒は拾餘戸

由緒

寛文三卯年洞嚴の開基にして仝四年辰二月十日本寺金剛寺は世大心宅舘入りて住寺となりてより現在迄十四世

(6) 華藏寺

清淨山と號し日比澤區の西端にあり境内千四百四拾六坪本尊は聖觀世音菩薩金剛寺の末寺なり檀徒六十

餘戸

由緒

創立年月不詳なるも戰國亂世の時伽藍燒失寺號漸く廢滅に歸せんとするを憂ひ金剛寺四世明岩修哲若干の金を投じて仮に本堂を建立し弘治二丙辰年三月十五日本尊聖觀音菩薩を迎請し点眼安座す爾來曹洞宗の僧侶住す

(7) 大月寺

日輪山と號す境内二百四拾七坪本尊は阿彌陀如來金剛寺末にして延享二年八月の建立現今住なく本山金剛寺の住僧之を兼ぬ

(8) 隣海院

境内三百三十五坪本尊藥師如來金剛寺末にして創立年月不詳

(9) 圓通寺

境内千參百八拾壹坪本尊は聖觀世音菩薩濱名郡内山宿蘆寺末たり長錄元年三月三日宿蘆寺二世養年受信を請して開山とす檀徒六拾餘戸

(10) 龍谷寺

境内九百三十六坪本尊藥師如來圓通寺と仝じく宿蘆寺末たり開山は天臺宗龍存法印なりと云ひ傳ふ檀徒五十餘戸

(11) 玉洞寺

境内七百五十坪本尊聖觀世音菩薩天正元年十月石雲泉公の開基にして宿蘆寺末たり檀徒三十餘戸

(12) 瑠璃山大福寺

本村副長にあり境内八千百廿九坪紀伊伊都郡高野山平等院の末寺にして本尊は藥師如來なり（本藥師如來は木造にして理趣仙人作三州鳳來寺藥師如來と同木同作なりと）檀徒百六十餘戸

由緒＝大福寺在神戸鄕封田七拾石献納豆號唐納豆賜田五石三升五合寺記曰清和天皇貞觀十七年草創在扇山（一書鳳來山）號幡敎寺所以號幡敎寺者昔神幡長三尺計懸梢翻至夜時放光釋敎得歛幡立寺故曰幡敎寺也

土御門天皇承元元年奉勅移干神戸鄕號大福寺住僧明性阿闍利同三年正六位上大中臣時定寄附朱爾仝四年定額迨今表山門

元享釋書（十五）曰釋敎侍久居園城寺天安二年歿而不見（畧）檀越大友氏曰不知何人居此寺己百余歳平居不赴堂齋有特性往湖濱取魚鼈乾串當饌率爲常今聞己隱年一百六十二歳

文和風土記、書顧行寺推古天皇四年依釋惠慈之宿願建之有官使辨事用

扇山高五十町幡教寺跡有礎石墳墓古池移寺於神戸郷以來稱瑠璃山幡教寺清和天皇之勅願所也正月八日有神事能舞元祿八年停止焉（內山氏風土記）

以上所載の如く仝寺は實に今を去る一千三十八年前清和天皇貞觀十七年釋教待の開基にして初めは扇山（只木）の頂上にあり降りて三百三十三年の後土御門天皇の承元元年住僧明僧阿闍梨、扇山の遠且嶮なるを不便とし奏請して伽藍を現今の地に移す仝三年神戸の莊司大中臣朝臣時定所領神戸の內北原御園數十町を喜捨す承元四年土御門天皇特に大福寺なる三大字の勅額を賜ふ依て大福寺と改稱す爾來土地開拓せるを以て大福寺といふ時に武門攻畧の世に當り大に領地の縮少せられんとするを以て後小松天皇の御下文によりて押收を防ぎ天正元年德川家康公御判物を賜ひ天正十八年豐臣秀吉公御朱印を賜ひ慶長八年家康公更に御朱印を賜ひ仝十七年正月特に納豆料除地を賜ふ當寺は古來納豆を傳製す今川豐臣德川諸公の代々に進獻せり文祿年中征韓の役起るや家康公從軍の際鎧櫃中に當所献の納豆を藏し征韓事平ぐの日祝盃を擧げ唐納豆を下物に充てらる唐納豆の字邦訓佳慶の語に通ずるを激賞せられ爾後年々將軍家に進獻するを例とせり元和年中後水尾天皇の御宇以來幕府閣老連署の証收を以て驛傳に付し禁闕に献上せり誠に當時の光榮と云ふべし古來諸書に遠江名產濱名納豆と稱するは即ち當寺の創製せるものを云ふ當時は寺格は中本寺にして坊末三十坊を有し舊幕府登城には白書院獨禮格として遇せられ天正十六年京都大佛殿落成供養の節は特に住職を召され豐臣秀吉公より七條袈裟を拜領せし事あり

寶物としては古昔源頼朝の愛妾より寄附せられたる藤原信實の筆なる普賢十羅刹女像圖並に卜部六郎季武が大江山酒呑童子退治の際負ひたりと稱す笈延慶年間（六百年前）に於る記錄瑠璃山年錄殘編貳卷其他古書畫數十点あり就中前記の三品は共に天下の珍として內務省より古社寺保存法に依り國寶の資格あるものと認定せられ特殊の保護を受く

附神戸莊司大中臣朝臣時定傳並神郷の記

神戸莊司大中臣時定は神服部彌安則（神服部家の始祖）の孫にして父を神服部宿彌安光といひ世々天照皇大神の御衣を織造するを以て職とし神鳳抄に所謂濱名神戸の莊今の岡本の里に住したり承元三己巳年十月蒙勅宣正六位上大中臣朝臣號後再度蒙勅宣正四位上を賜はる初代より現今に至る迄四十一代今尙同家に神機織殿及齋宮存す神機織殿及神戸郷の由緒左に抄錄す

神戸郷

村五…關正北五里（關は荒井か）神戸莊（藏俗庄准目號目代）孝德紀曰田莊是也凡保元平治以後有庄司又所以號神戸者昔時天照皇大神乃御戸代依奉亙神服部等三河乃赤引乃神調乃生糸母豆和妙乃神衣織作所也故云神戸（神戸神鳳抄）

岡本＝昔時伊勢大神宮領號御園村高六百二十三石二斗八升從五位下神服部（稱宿稱今世育代）世住織作神衣有賜田朱符云高廿九石八斗貳升者伊勢神明の初生衣領也有織殿併建齋宮

織殿＝在神戸鄕岡本村神服部世織造天照皇大神之御衣朱符高廿九石八斗貳升者初生衣領也織造神衣者岡本村神氏世々服部也神衣料赤引系三河國麻生田村出納六月神衣出納十一月一日也機殿每年新造機巧神妙而成焉（織月四月十四日也於三河國吉田宿四月十四日有御衣躍）

續日本記…神護慶雲三年奉神服部於天下諸社（如岡本說）

齋宮…除地高三石（以上風土記傳拔萃）

新神戸（濱名新神戸四十四石八斗百九十一丁六段）と神鳳抄にあり近世に至る迄岡本村に三十石の神領を存したり云々神雜例に（遠江岡本神戸三十戸號本神戸）とあれば本新共に此地歟（吉田氏地名辭書）

（天明九年四月十四日奉納機殿歌）

遠江濱名の岡乎天照皇大神の御戸代登定賜志昔從服部之登母賀織機乃常例登三河奈留新桑眉乃宇都由布乃生糸乃神調乎此神新爾持己志神倉爾納置札婆畏幾也神乃大物登清萬波里忌機屋乎每年爾妻木代與勢野萱苅新良新良爾殿造棚機都米己母良豆多々里加世田比乃系業乎奈志乎閉高機爾引波閉縣豆其機乎織爾於里奈志知多閉乃美御衣乃神御衣登禰万都里保岐麻都里御櫃爾納大宮爾御調登奉留彌年乃波爾伊波比古志神乃御衣乃糸波閉豆多那波多都米波幾世經奴良牟

麻績服部相併於禮留神御衣乎今母仕加安良多閉和布

御初生衣領の由來

抑當座神事前齊墓目傳來濫觴往古天照太神御兒天忍穗耳尊娶高皇產靈尊御娘八千々姬生瓊々杵尊外祖高皇產靈尊立皇孫欲爲葦原中國主然其國有妖化不穩爰以勅建拜槌命令揆彼天化蓋建羽槌命天照太神入天窟天下常闇時高皇產靈尊兒思兼命仰石礎姥命作天照大神御像神鏡仰建羽槌命令織縑奉供焉仰天兒屋根命令祈焉其時御鏡今猶伊勢奉崇太神是也傳曰鎌是云斯圖利蓋鎌々絲二筋合一織絹云嫌令世稱初生衣每年奉供是也四月神御衣之勅祭御代々帝王無闕除神代以來例而從神武天皇御宇天下泰平御神事也彼建羽槌命妖化退治蒙於勅之時天照大神神政之一卷逮授於妖化体顯神祝亦月弓尊天鹿兒弓取添於廿四本八ッ目鏑箭建與於放箭神祝依焉輙射落於妖化以機杼竹抵焉至今世置寢伏死体上禦妖化爲備是此因緣也見彼妖化形尾蛇体狸頭白狐後世始取逼非非取多奴幾幾取登宇女女號非幾女爲弓術名至干末世秘傳而轉假字作眞字名墓目喪根元非全墓眼非示鏑名至干今遠於毫釐彼鹿背男其形鹿兒班背有九曜七曜故謂星神示謂鹿背男而後國穩瓊々杵尊天降干日向國座干伊勢國吾田良屋郡地神三代大神奉崇爾來建羽槌命子孫統々人皇第一從神武天皇御宇五十五代文德天皇御宇稱縑宮造神代以來無斷絕掌神御衣調進職然所仁壽元年甲子四月叙位仕官有勅宣從五位下神服部稱宿稱毛人女奉仕皇朝示服訓波登利名羽槌建羽槌命依爲衣服祖神取於其名名服矣其後人皇七十六代帝奉近衛院稱如何事歟此御世久安二年乙丑年慧星出國有妖孽同五年己巳年內裏燒失仁平三年癸酉年鵺出夜每飛行斗于分野鳴音恰如白狐帝厭鬼干其音嬰賜依焉關白宇治大臣奉勅妖化退治有勅宣石川左衛門依干不忠勅答追却重賴政蒙於勅速馳向彼分野雖瞪於虛空不見正体音目當雖箭放無箭答理哉賴

政百前百當極於殼王城守護之名臣妖化体顯神法天照大神與建羽槌命唯授一人統多秘呪也(此所蝕不分明)
見於鵺形猿毛蛇体虎髣髴似干神代鹿背男斯而帝御腦有御平愈爲御褒美賜濱名郡今猶名鵺代村有村是其古
跡也然久壽二年甲戌稔白狐妖化入干內裏成后惑惑於主上依焉御腦再發伏于寢床卜者占焉妖障礎奏聞諸郷
驚焉召安倍清明令修大山符君法令撲於白狐妖化雖然御腦日日增甚終久壽三年乙亥七月御年御十七而崩御
神服宿稱毛人女神代以來雖爲妖化守護之職居其職不具職預北面南坐眉目慷慨忘食辭官降民間掌於神御衣
職而已然所賴政於濱名郡內天照大神初衣領賜五町八反証牒其又曰

遠江濱名郡岡本村之內伊勢神明爲初生領五町八段黃金壹枚錢拾八貫以焉永代買取令寄
附畢

賴政

久壽二年乙亥十一月

賜於此証牒久壽二年乙亥去於山城國乙訓郡住遠江取於神服部一字稱神何某每年奉捧神御衣然所人皇百七
代正親町院御宇永祿元年戊午稔尊氏十三代後胤征夷大將軍源朝臣義輝公賜御寄附牒其文曰

遠州濱名郡岡本村之內五町八反神服之古牒久壽二年賴政以於黃金壹枚錢十八貫永代買
取令寄付之條不及截斷全可領地者也

義輝

永祿元年戊午八月

同御宇大閤秀吉公賜御附牒其文曰

伊勢神明初生衣領事

遠江國敷知郡濱名岡本村之內五町八反任久壽永祿之例永令寄附畢

秀吉

天正十二年甲申八月

人皇百八代後陽成院御宇征夷大將軍源朝臣家康公於伏見賜御寄附狀其文曰

伊勢神明初生衣領事

遠江國敷知郡濱名岡本村之內貳拾九石八斗貳升任先規例宮中竹木諸役免許永令寄附畢
者神供祭禮不可怠慢條而如件

慶長八年癸八月

瑠璃山沿革補

弘安十一年戊子三月六日夜御堂燒失…今按に本宮のみ燒失の樣に見ゆれども諸堂諸社多く災に罹りしと
覺ゆ

正應元年十月御堂柱之應長元年辛本堂造畢永正年中北原と稱する所如先代可爲寺領旨從公儀之御沙汰有

之備中守殿（按實名政明）より証狀を贈らる

大福寺之事以前田原にて當神戸中知行の時毎事恐成敗之條時家之儀諸寺迷惑に付而先規今川殿守護之御時支証有之間號幡敎寺如望當寺江被成下知候左候間今度神戸之事如先々守護不入言惣別安堵之儀之處は田原知行時上助目候旨近頃不及覺悟次第に候乍去寺家之儀しかと其意得に候上衆徒中一筆於門訟候以其可申談候此趣答へ可被申屆候恐々謹言

三月廿六日　備中守花押

今按に北原は昔承元年中時定朝臣の寄附し給ふ地にして當寺の所務たる事勿論なり然るに此頃三州田原の城主戸田氏威を振ひ此邊迄押領し萬の事恣なる事共あるにより當寺より其事を今川家（世々駿河府中に在城此邊も支配なり）に愁訴し今川家より如先規とありしも戸田聞かず終に公儀へ聽へ上げ公家御判なし給ひしより戸田も詮方なく仰に從ひまた其事を備中守（此備中守は濱名兵庫頭正信の嫡孫にして濱名兵庫介忠正の嫡子なり濱名の城主にして政明と云ひ後入道して濱名備中入道と云ふ）殿より傳へられしと覺ゆ（田原より恣なる行のありし事當時の文書にも見ゆ）又此時彈正憲光（田原城主）より福島左衛門尉殿への書に見へたり（福島氏は高天神の城主）

天正元年癸酉十二月東照宮より御判物を賜ひ五拾貫の地を御寄附あり

天正拾八年十二月廿六日豐臣秀吉公より寺領の御朱印七拾石を賜はる（今按に天正十八年東照宮御領國改まり江戸の御城へ移らせ給ふ是迄は駿府に在城其れ迄は東照公の御領なれば其程は東照宮より天正元年に賜はりし五拾貫の地にてありしを今天下の御領となりたれば五十貫の地を石高に直し改めて關白家より賜はりしなるべし）

元和六年十二月更鑄鐘

天和四年本堂諸堂大破修復

貞享元年本堂諸堂修復

寶永三年本堂茸替

寶永八年本堂再建成就

寶曆四年始めて本尊會式修行自十月八日至十七日

仝五年觀音堂建立

仝十一年護摩堂再建（施主牧野越中守殿娘）

明和五年戊子十二日夜長屋より失火諸堂は災を免れ其餘悉燒失圓入坊及服部友清宅罹災土藏一宇免災（當時現住法印秀尊委再造）

寛政三年仁王門再建媛始令拾二年庚申成就

文化四年西國三十三所觀音石佛三十三躰並堂舍再建

仝五年鎭守熊野三社並御影堂再建

仝六年鐘樓再建

仝七年更鑄鐘

前表に依れば當山は淸和帝の昔貞觀十七年扇山上に草創以來現今迄僅かに二拾五代の法統を繼嗣せるに過ぎざるも開祖敎待和尙より明性阿闍梨を經て中興の名僧敎海上人に至る迄には數百年を經過せしもの の如く其間に於ける數多の記錄に徵するも明らかに其間の年數及代數を知り難きを以て暫く記錄に明記せられたる人々のみを揭げ代數を計へたり

右の中中興の名僧敎海上人の事蹟に就ては今之を詳にするを得ざるも廿三代快雅上人に至つては其事蹟に徵するに之を後の中興の名僧と稱すべく上人は學德兼備の高僧にして遠近の歸依厚く當山開闢以來當時法運最も隆盛を極めたり上人餘暇を以て開祖以來傳來の古文書古器物の整理保存に勉む現在同寺に保存せし幾多の寶物は全く上人整理の賜にして殊に國寶中瑠璃山年錄殘編の如きは心なきものの到底貴重文書として保存し置く能はざる所のものなり

當山歷代和尙如左

開山敎待和尙　明性阿闍梨　中興敎海上人　堯觀上人　堯空上人

三位上人　式部上人　貞圓上人　慶尊上人　朝印上人

明應上人　秀快上人　秀仙上人　圓慶上人　秀慶上人

秀享上人　高慶上人　龍光上人　秀尊上人　淨幢上人

淨賢上人　天麗上人　快雅上人　敬雅上人　眞空上人

奉施入大福寺敷地荒野臺處の事

在遠江國濱名神戸北原御園內者

四―至

東限直木山路以西小路

南限石拂松本

西限電谷澤

北限經峰

右之件神戸內北原御園者先祖相傳之領地也而荒野雖レ廣土貢如レ空徒雖レ爲二猪鹿之棲一更有二何益一唯成二佛法之地一欲レ傳二末來弟子豫雖レ專二敬神之誠一猶無レ忘二歸佛之理一丹之所レ役素懷是已成去ぬ元年天ノ三月之候遂建二一宇之寺門一安數躰之佛像一草庵結砌竹戸開レ傍所則天照大神降靈之靈地矣豈非二日域無双之勝境一哉佛又東方醫王薄伽之敎主焉殊仰像法轉時之上願也方今爲レ資二累祖四恩之菩提一爲祈二弟子二世之求願一施入件領地一永惠二彼佛僧一抑々割二分ヲ神領一建二立佛堂一者是非二新儀一多訪二舊跡一許ッ也所ノ以云レ佛二神無異無

別垂跡影向上德風送韻於一天上求下化之覺月浮光於萬水上論其神慮與佛意同彼風韻將月光之故也願三寶照一心仍以施入如件

承元三年十月日　　正六位上大中納言中臣　朝　臣　時　定

（裏に書判あり）

文政八年寺領地藏の圖を作り田畑の經界を正し賦稅の多寡反歩の數を記す同九年經ヶ峰兩社の傍に石を建記來由正經界

碑　文

我瑠璃山東北之界曰經峯古昔大福密寺之移自大木山此方正當丑寅爲鬼門於是埋秘經于絶頂祠祀金毘羅秋葉兩權現以鎭我山名其日經峰蓋當時四方竟界大變與不同而唯此地依舊云或恐後世沒其說無傳謹記所聞刻干石且以正竟界云

文政九年歳次丙戌春三月

瑠璃山大福寺現住法印快雅建

同年大木山へ碑を建舊趾を明にし開墓の歳月を記

碑　文

此山曰大木我瑠璃山幡敎寺舊趾　淸和天皇貞觀十七年乙未敎待和尙所開基也在三百三十三年土御門天皇承元元年丁卯阿闍梨明性奉勅移前山乃今之瑠璃山而改號曰大福寺醫王院自承元丁卯至今玆文政丙戌六百二十年先世墓碑存者十餘如基石小池尙可觀之則舊跡顯然雖不待誌而可知也惑恐千歳之後基廢池埋無由於其所謹以今所見開刻于石以徵于後云

文政九年歳次丙戌春三月

瑠璃山大福寺現住法師快雅識

寶物

一、國寶絹本着色普賢十羅刹女圖　壹幀

右は右京權太夫藤原信實公の筆にして源頼朝公愛妾當國橋本長者の娘妙相尼頼朝公薨去の後公の菩提を弔はん爲め當山に寄附すと傳ふ時代七百餘年

一、國寶美術工藝鍍金裝桐木地笈　壹個

右は正曆三年勘解由次官ト部六郎季武公が源頼光公に從て丹波國大江山鬼賊退治の節負ひたる笈なり後季武公眼病に罹り當山藥師如來に全癒を祈り全治せし故寄附すと傳ふ時代壹千餘年

一、國寶紙本墨書瑠璃山年錄殘編　貳卷

右は延慶年間の當山記錄にして歷史上徵證すべき記事多く文部省の編纂大日本史料には多く此の記錄より引用せられし貴重なる記錄なり　時代六百餘年

右參点古社寺保存法第四條に依り之務大臣より國寶の資格有るものと認定せらる
此他佛像佛畫雜寶古文等の貴重なる寶物數多あり。

寶物

一、引佐郡西濱名村大福寺所藏絹本着色普賢十羅刹女像一幅、鍍金裝桐木地笈及瑠璃山年錄殘編の三點は國寶の資格あるものと認定せらる

內務省告示第三十二號

古社寺保存法第四條により左記の物件を以て國寶の資格あるものと定む

明治三十三年四月七日　內務大臣侯爵　西　鄕　從　道

甲種三等　繪畫　絹本着色普賢十羅女像　壹幅　靜岡縣引佐郡西濱名村大福寺
甲種四等　美術工藝　鍍金裝桐地笈　壹箇　仝
以　上
一第一五四四號ノ二

其寺所有左記の物品は古社寺保存法第四條に依り國寶の資格あるものと定むる旨本月七日內務省告示第三十二號を以て告示相成候條監守方厚く注意す可し

明治三十三年四月十一日　靜岡縣知事　小野田元熙

記

一絹本着色普賢十羅刹女像　壹幅　引佐郡西濱名村福長
一鍍金裝桐木地笈　壹個　眞言宗　大　福　寺
以　上
二第一〇二八號ノ一

其寺所有左記の物件は古社寺保存法第四條に依り國法の資格あるものと定むる旨內務省告示第五十八號を以て告示相成候條監守方厚く注意す可し

明治三十八年五月十二日　靜岡縣知事　龜井英三郎

記

一紙本墨書瑠璃山年錄殘編　二卷

以上

五、官公衙學校圖書館等

一、西濱名村役場

大字三ヶ日字番剛寺七百七十六番地の一、にあり敷地坪數八十一坪、木造瓦葺二階建にして、間口六間奥行五間附屬建物を合して總建坪四十四坪、明治三十九年の建築なり。

是より前、明治の初年より組合時代官選戸長時代を經て自治制實施以後明治三十八年に至るまでは縣道の北側郵便局の西に在りしが、明治三十八年十一月二十八日火災に類燒し、一時小學校の一室或は鄉社神明宮社務所を假用したりしが翌年十一月十八日新築の建物に移り以て現今に至る

歴代村長

就職年月日	退職年月日	氏名
明治二十二年七月一日	明治二十四年四月八日	縣勇
明治二十四年四月九日	明治二十八年四月八日（滿期）	北脇太郎作
明治二十八年四月九日	明治三十三年六月二十日	北脇太郎作
明治三十三年六月二十一日	明治三十七年六月二十三日（滿期）	縣勇
明治三十七年六月二十四日	明治三十九年六月五日	縣勇
明治三十九年六月二十日	明治四十年八月二十一日	石田秀作
明治四十年十月二十日	明治四十年十一月二日	村長職務管掌 引佐郡書記 深谷立太郎
明治四十年十一月二日	明治四十一年十月十七日	藤原富五郎
明治四十一年十月二十三日	大正元年十月二十二日（滿期）	縣勇
大正元年十月二十三日	大正二年五月三日	縣勇
大正二年五月二十四日	大正三年三月三十一日	田中儀平
大正三年九月二十三日	大正三年十月十四日	石川喜平
大正三年十一月十四日	大正七年十一月十三日	金子喜平
大正七年十一月三十日	大正九年十月三十一日	藤原富五郎
大正十年二月一日		石川澤太郎

二、西濱名尋常高等小學校

位置

本校　西濱名村三ヶ日上ノ山

分教場

平山分教場　西濱名村平山字森田
尾奈分教場　仝　村下尾奈字宮中
日比澤分教場　仝　村日比澤字眞香

現況　（大正十年四月現在）

	本校	平山分教場	日比澤分教場	尾奈分教場
校地坪數	三五四〇、〇坪	三四、五坪	二四六、六坪	六二一坪
校舍坪數	一〇〇〇、五	二九、二五	二九、二五	一二三、五
運動場坪數	一八九五、〇	一四五、〇	二〇〇、〇〇	四六七、五
兒童一人に付仝上	一、三二	一、〇三	五、四	三、一
學級數	二五	二	一	三
教員數	二六	二	一	三
兒童數	一四四二	一四二	三七	一五一
修業年限	高等科男　三ヶ年	女　二ヶ年		
就學歩合	九九、二五			
教育費歳出豫算	二三一三七圓			

沿革概要

明治五年學制頒布以來明治六年七月より仝八年四月に至る間に三ヶ日●岡本●只木●日比澤●下尾奈●平山の六校を設立す仝十九年小學校令改正の結果前記六校を廢し三ヶ日に本校を尾奈●福長に分校を平山●本坂に分教場を置き第十四十六學區三ヶ日學校と改稱す仝二十二年濱松高等小學校分教室を本校内に置く仝二十五年七月西濱名尋常小學校と改名仝年十月高等小學校分教室を閉ぢ尾奈●平山を獨立せしめて西濱名尋常高等小學校と改稱仝三十年尾奈●平山を再び分教場とし福長●本坂の二分教場を鎖し日比澤に分教場を置く仝三十七年農業補習學校を同四十年女子技藝學校を附設す仝四十二年補習學校畫間部を廢し高等科第三學年を置く

校舍沿革

本校

明治六年七月創立の時より仝二十年までは現敷地内に在りし寺院（江雲寺）を以て校舍に充て仝廿一年二階造一棟と平屋二棟とを新築せしも漸次狹隘を告げ仝三十二年に四個教室仝三十六年に猶又四個教室を仝四十二年に更に又六個教室（二階建）を副築す大正八年校地を上ノ山に變更し校舍移轉改築を企て仝七月十一日起工秋季暴風の爲め倒壞工事進捗上一頓挫を來せしが仝十二月工事に着手し九年七月落成せり

平山分教場

明治八年四月創立當時は延命寺を以て校舍を假用せしも明治十八年現校舍（平屋）一棟を購ひ之に移轉せり仝三十三年階上に一個教室を副築して現今に至る

尾奈分教場

明治七年二月創立當時は圓通寺の一部を校舍に假用したりしも其後龍谷寺に移轉し仝十四年五月校舍一棟を新築して之に移る仝三十八年七月更に之を改築す大正五年四月一學級增設の爲め村社假用仝六年五月二箇教室を副築せり

日比澤分教場

明治六年十一月創立當時より明治四十二年まで華藏寺の一部を校舍に假用せしが仝年新築して之に移る本坂に開設中は仝地太月寺を假用せり

奬學會

本校に西濱名奬學會なるもの丶設けあり若干名の委員と會員（兒童の保護者）とを以て組織し毎年豫算を作り各學年により一定の會費を據出せしめ當該兒童所要の學用品を購入又は配布し以て其學習に便ならしむ其規約左の如し

西濱名奬學會規約

（一）、本會ハ西濱名尋常高等小學校兒童ノ教育ニ便益ヲ與ヘ兼テ學校ト家庭トノ聯絡ヲ圖ルヲ以テ目的トス

（二）、本會ハ西濱名奬學會ト稱ス

（三）、本會ハ本村内ニ於ケル左記ノ人々ヲ以テ組織ス

1 學校兒童保護者　2 校長及教員

3 村長及助役　4 學務委員

（四）、本會ハ學校兒童ニ學用品ノ給與及貸與ヲナシ且學校ト家庭トノ聯絡ノ爲メ時々父兄會又ハ母姉會ヲ開キ猶就學督勵ノ爲メ特ニ貧困兒童ニ補助ヲ與フ

（五）、本會ノ費用ハ保護者ヨリノ出金ト外ニ村費ノ補助及寄附金トヲ以テ支辨ス

但出金ハ四月、六月、九月、十一月ノ四期ニ分ツ

（六）、本會ハ左記ノ人々ヲ以テ委員トシ會務ヲ處理セシム

村長、校長、助役、學務委員、教員中ヨリ若干名、保護者中ヨリ十五名教員及保護者中ヨリ出ヅル委員ハ他ノ委員ノ協議ノ上之ヲ囑託シ任期ヲ二ケ年トス但再任スルモ妨ナシ

（七）、本會ニ會計係及物品係ヲ置キ學務委員ヲ會計係トシ教員中ヨリ出ヅル委員ヲ物品係トシ金錢物品ノ出納ヲ掌ラシム

村長ハ會計監督ノ責ニ任ジ校長ハ物品保管ノ責ニ任ズ

(八)、本會ハ毎年一回以上委員會ヲ開キテ會務ニ關スル協議及報告ヲナス
但必要アル時ハ臨時開會シ又總會ヲ開クコトアルベシ

三、西濱名實業補習學校　(大正四年現在)　(大正十年學則ノ變更中)

本校は村内各區に教場を分置し一教員一區の授業を担任す設置區左の如し

三ヶ日　宇志　津々崎　摩訶耶　岡本　大福寺　只木
長根　平山　日比澤　本坂　鵜代　尾奈

(1) 修業年限
丙部　一ヶ年　乙部　二ヶ年　甲部　二ヶ年
但希望によりては卒業後猶在學して學習することを得

(2) 教科目
甲部　農業、修身、國語、算術
乙部　仝上
丙部　仝上

(3) 教員數　十五人　小學校訓導より兼務す

(4) 生徒數　二百三人

(5) 經費豫算　百六拾八圓拾錢(大正四年度)

(6) 授業料　徴收せず

(7) 大正三年三月三十日本縣より表彰せらる

四、西濱名女子技藝學校

本校は西濱名尋常高等小學校の附設にして其校長及職員の多くは小學校教員の兼任なり
本科と別科とを置き本科には高等小學校卒業生を別科には尋常小學校卒業生を入學せしむ

(1) 修業年限
本科　二ヶ年　別科　三ヶ年

(2) 教科目
本科　裁縫、修身、國語、算術、家事
別科　裁縫、修身、家事

(3) 教員數　六人　專任　兼任　二人　四人

(4) 生徒數　四十九人

(5) 經費豫算　四百四十一圓(大正七年度)

(6) 授業料　本科　一人一ヶ月金四拾錢　別科　一人一ヶ月金參拾錢

五、圖書閲覧所

三ヶ日、鵜代の二ヶ所に新聞雜誌縱覽所岡本に青年圖書館の設あり共に青年會の施設に係る

六、巡査駐在所及派出所沿革

1 氣賀警察署三ヶ日巡査部長派出所

明治十五年八月敷知郡三ヶ日村三十九番地へ濱松警察署氣賀分署三ヶ日交番所を設置す

仝十九年十月氣賀警察署三ヶ日巡査交番所と改正

仝廿年十一月氣賀警察署三ヶ日巡査派出所と改正

仝廿一年四月氣賀警察署三ヶ日巡査駐在所と改稱

仝四十三年四月一日更に氣賀警察署三ヶ日巡査部長派出所と改稱部長一人巡査二人駐在し以て東西濱名兩村を所管區域とす

2 氣賀警察署鵜代巡査駐在所

明治廿一年四月敷知郡鵜代村五十五番地へ巡査駐在所を設け鵜代巡査駐在所と稱す

仝年仝月氣賀警察署部内鵜代外五ヶ村受持巡査駐在所と改稱

仝三十四年四月西濱名村鵜代巡査駐在所と改稱

3 岡本巡査駐在所

大正六年八月二十五日氣賀警察署部内引佐郡西濱名村岡本九十八番地に西濱名村岡本巡査駐在所を設置す

七、分担區員駐在所

三ヶ日に帝室林野管理局名古屋支局濱松出張所濱名分担區員駐在所あり尙該吏員一名駐在す其分担區域左の如し

引佐郡	東濱名村	西濱名村	
濱名郡	知波田村	入出村	新所村
	吉津村	新居町	白須賀町

八、三ヶ日郵便局

本局は三等郵便局にして、明治七年八月一日の創立なり。初め正木八十郎氏局長として三ヶ日三十六番地に於て、事務を執る。後二百三十番地に移轉し石川喜平氏局長として、明治三十一年に至る。明治三十二年石川貞次氏局長となり現今に至る。

其の間明治十八年十月十六日より郵便貯金を、仝二十三年四月一日より内國爲替を仝二十五年七月十日より外國爲替を、仝三十三年より小包郵便を、仝四十一年三月二十六日より和文電信を、仝四十三年十二月二十六日より電話を開始せり。

六、會　社

株式會社氣賀銀行三ケ日支店

三ケ日にあり明治三十年一月の創立にして當地に金融機關の設けられし始なり本店は氣賀町にありて資本金壹百萬圓を有す

株式會社遠江銀行三ケ日支店

三ケ日にあり明治三十七年九月の創立にして本店は濱松市に在り資本金四十萬圓を有す

株式三ケ日委托會社

三ケ日にあり明治四十五年二月の設けにして資本金三萬五千圓を有す

永續合名會社

日比澤區にあり明治三十二年一月の設けにして資本金四千圓を有し一般人の金融機關たり

早川電力株式會社三ケ日派出所

三ケ日にあり大正三年七月の設けにして今點燈第一期の事業完結す

製材工場　二工場あり何れも三ケ日にありて個人の經營する處なり故に規模大ならず

有限責任西濱名購買販賣組合

鵜代區にあり明治四十二年の創設にして本村に此の種の組合の設けられし始なり現今組合員百三十六名を有し一口拂込金十圓なり肥料購買の外に農表販賣をなす

有限責任岡本信用購買販賣組合

岡本區にあり明治四十三年十二月の創設にして組合員百八十七人を有し一口拂込金十圓なり事業は前者の外に金融をはかる

有限責任下尾奈信用購買販賣組合

下尾奈區にあり明治四十四年七月の創設にして組合員二百三十四を有し一口拂込金十圓なり肥料購買の外に農表販賣をなす

有限責任宇志信用購買販賣組合

宇志區にあり大正元年二月の創設にして組合員四十七を有し一口拂込金十圓なり肥料購買農表販賣をなす事前者に仝じ

病　院

有木病院

鵜代區にあり有木氏個人の經營する處にして患者數十人を收容し得

七、團　体

農　會

西濱名村農會と稱し農會令發布の時設けしものなり左の事業を行ふ

農事に關する講習會

農事有識者の講話

耕地整理

害蟲驅除

農産品評會

作物品種改良試作

引佐郡柑橘同業組合事務所

大正二年九月三ヶ日に事務所を置く

青年團

西濱名青年團と稱し明治四十四年四月の創設にして會員六百人を超ゆ風俗矯正知德增進をはかるために毎歲春秋二回總集會をなし又團体視察旅行等をなす全体を區により十五支部に分つ各支部は夜學、道路修繕、共同貯金試作植樹等の事業をなす

在鄕軍人會

帝國在鄕軍人會濱松支部西濱名分會と稱し明治四十三年十二月の創立に係る

西濱名婦人會

西濱名愛國婦人會役員發起となり明治三十八年十二月創立せし處なり愛國婦人會の一部及本村學校尋常科卒業の女子の一部とを以て組織し會員壹百八拾五名を有す

婦德增進常識養成を以て目的となし常に愛國婦人會と共同して事業を營む外會員の善行者表彰を行ふ

八、消防衛生等

明治十八年三ヶ日部消防の設けられしを始めとし其後各區により一部づゝを設け現今十部に達す十部を統一して西濱名消防組と稱し公設消防にして消防手七百人を有す

消防の外水防冬季夜警等をなす

大正五年一月九日本縣より金馬簾を授與せらる

衛生

避病舍は三ヶ日の東部に在り同時に十數名を收容し得

清潔法は春秋二回各日を定めて行ふ

醫師　二

産婆　一

賣藥製造　三

藥種商　四

九、娯樂機關

娯樂の機關としては劇場共榮座を有するのみ明治四十四年の設立にして三ヶ日にあり見物人六七百人を容るゝ事を得

一〇、人　物

清水善慶翁

身を寒凛より起し眼に一丁字なくして奇蹟を後昆に垂るゝ者を清水善慶となす翁字は源平三河國寶飯郡下地村夏目平次の三男なり性放膽にして率直豪語克く言ふ壯年の比逸氣奔放家業を事とせざりしが後翻然志を改め嘉永元年八月靜岡縣敷知郡福長村清水傳二郎の婿となり其の二女のよと配し別家して木履を製するを業とするも常に家計の困難を免るゝ能はざりき而も翁慈善の心深くして人の困阨を見れば財を裂きて救恤惜むなく業を失ひ救を需むるの徒は皆己が徒弟として養ふ明治の初年大に志す所ありて引佐郡富幕村山林數百町歩を官に拂下を請ひ傍ら開拓に從事し又多く木材を搬出し漸くにして貨殖するを得翁篤く公益に志し橋梁架設には喜んでその用材を寄附し社寺衙署等の建築にも亦其の材を寄進す殊に道路の開鑿修繕には大に力を盡しゝ所なり彼の字利峠は三遠の通路にして西遠地方より東三南信地方に荷物運搬最も繁かりしもその道路崎嶇羊腸僅に馬背を籍るあるのみ茲に於てか翁はその開鑿を企畫し率先金一千圓を投じ且つ有志の義捐を募りしに皆其の義舉を賛し日ならずして一萬七千圓の資を得明治十四年二月を以て功を起し土を掘り岩を碎き峰を切下ぐること數丈道を開鑿すること約一里翁朝に星を戴きて出で夕に月を踏みて歸り具に櫛風沐雨の苦難を嘗めて工を督し仝年十二月竣成す爾後車馬の往來容易となり大に交通運搬の便を得るに至る於是乎賞勳局辱くも銀盃を賜ひ以て之を賞せらる明治十八年四月風越峠開鑿にも金圓を寄附せり而して此の兩峠間直通の道路なし愛に於て翁字利峠麓才ノ神より福長を横斷し只木村字祝坂に出づる新道路里余を開き大に旅客に便を與ふ又明治十九年七月奥山村戸長役場新築の際には用材を寄附し及其他によりて木杯を賞賜せらるゝこと前後三度に及べり

翁又殖産に志し今より六十年前大に柑橘園を作る蓋し本村柑橘今日の隆盛あるは翁之れが基をなせしといふも敢て誣言に非らざるなり

翁義俠の心に富み人の互に爭ふあれば其理を糺して詢々說諭和解せしめ未だ嘗て顯門に嬌ひず權勢に懼れず直言能く言ふ故に如何に紛糾せし爭ひも翁は片言數語を以て治めざるはなし其他婚姻の媒酌人事の斡旋等擧げて數ふべからず翁四男三女あり長女茂登家を承ぎ市之次を配して婿とす長男源吉、五男行三他家に養はれ餘は才ノ神に別家し木下氏を稱するもの男二女一、福長に屬するもの女一男一あり善慶明治廿六年三月十二日病を得て歿す行年七十齡世あり

親先祖こゝろにかけて問供よりなす其うるは子孫長久
我しにはせぬ心をこゝに留おくて頼る來てもものは言ぬそ
（われ死にはせぬ心をこゝに留おくでと讀むべし）

嗚呼維新後百美旗興すと雖も人心の靡爛言ふに忍びざるものあり而して善慶この世潮に汚れず俗流を追はず克く公益美擧實に後昆の範となる感すべきかな歿後有志相謀り仝年九月頌德碑を才ノ神老松の下に樹つ蓋し翁の德この石と共に萬世に朽ちざるべし

石川佐平翁

老子曰く上德は德とせず是を以て德有りと佐平翁父母に至孝にして且つ厚く德を施して德とせず宜なる哉人の皆其德を欽慕して忘れざることを

翁字は佐平遠江國敷知郡岡崎村大森鈴木與十の次男なり人と爲り溫厚循篤衆に接して諧和一度その謦咳に接せば翁の至德に感化せられざるものなし壯年の比他家に備はれ日夜孜々にして農事に勤勞し夜は人靜まりて後ち孤燈の下に書を繙き刻苦獨學途に學識を有するに至れり殊に頭腦明晰思慮周密にして識見衆に卓絶す仝郡大福寺村石川喜代作の婿となりきそ女を娶る翁養父母に事へて至孝朝は雞鳴に起きて灑掃し父母起き出づれば寢具の片付洗面の湯水に至るまでその妻女共に心を配り毎朝必ず禮を正しくして父母の機嫌に伺ふを常とす夕は兩親の脊を採み足を摩りつゝ世間の奇事異聞或は面白きお伽噺等をなし

て兩親を慰め父母寢に就けば能く寢具の周圍を撿し父母恙あれば衣帶を解かずして日夜看護し其他夏涼冬溫力の及ばん限りを盡せしかば世にも稀なる善き婿よと悅び人は感其の行を感賞せぬはなかりき後老父母別屋に隱居して後も奉養益勉め己れ寢に就く前必ず隱宅の周圍を一周して異變なきことを檢せざれば決して枕に就かず又寢ぬるに皇室及父母の方に足を向けずといへり深夜犬の吠ゆるを聞けば如何に嚴寒積雪の夜と雖も直ちに起き出でゝ隱宅に赴き先づ兩親の恙なきや否やを尋ね然る後家の周圍を再三按檢し事なければ安堵して再び寢に就くを常とす斯の如きこと或は一夜數回に及ぶことあり歲晩各所に盜害の聞ある時などは殊に警戒夜を徹すること數多度なりしといふ一鄕其の至孝に感せぬはなかりき事上に聞え明治十四年十二月廿八日靜岡縣その篤行とその孝仕とを表彰し賜ふに目錄若干を以てせらる翁夙に勸業に心を注ぎ當時學理未だ開けず老農と稱するものすら徒に手加減と目分量との經驗を賴みとするのみなりしかば翁は痛くこれを斥け實驗に加ふるに學理を以てし大に農事の改良を圖れり蠶業の如き極めて微々たるものにして桑園の如きは絶て有る無かりしも翁の烱眼速くもこゝに着するにあり大に桑園を作る里人皆その良圖に桑を植ふるを笑ふ後斯業漸次發達の氣運に向ふや曩に笑ひし者顏色なく來りて翁の指南を仰ぎ爭ふて桑園を作り競ふて蠶業を營むに至り遂に今日あるに至りしなり後三遠農學社起るに及び翁はその創立委員となり大に仝社の爲に盡瘁し仝社員と共に各地に或は遊說し或は講話をなし只管農事の進步改善を謀れり爰に於てか農事改良の効績多大なるの故を以て明治廿八年三月三十日木杯壹

個を賜はる

翁明治六年五月第一大區第十四小區大福寺戸長に任せられ仝十一年六月仝村小學校幹事に仝十三年九月福長村只木村學務委員に又仝村衛生委員に仝十八年一月三ヶ日村組勸業委員に任せられ仝廿一年八月蜜業組合三ヶ日村外七ヶ村委員に仝廿二年三月西濱名村々會議員に仝廿六年六月仝村學務委員に當撰仝廿七年七月濱名鄕社神明宮世話係となり前後數十年間常に身に數職を帶ひ大に村政のため公共のために盡せし効蓋し偉大なりと謂ふべし

明治廿七八年戰役起るや翁は一般の勵精をなし業餘軍用草鞋數百足を親ら製作し之を恤兵部に獻納せしかば仝卅年六月一日靜岡縣知事男爵千家尊福より賞狀を下賜せらる

翁又報本反始の道を重んじ明治十三年濱松神社事務所より敎導世話係に補せられ仝十五年敎會分社成田講世話係に仝十九年十二月六日實行敎會に於て敎導職試補に翌廿年四月權訓導に補せられ仝廿五年行名を領し仝廿七年實行有効賞を受けらるゝに至れり

翁二男一女あり長男喜平家を繼き二男喜三次別家し一女ナヲ他に適す何れも令名あり翁明治四十四年六月十一日病て溘焉瞑す時に歳七十二その一生を要約するに翁は勤儉篤行善く人を善導感化し又產業の發達を謀りし効績蓋偉大なりと謂べし

山田彌右衛門翁

山田彌右衛門翁その名を彌太夫といひ引佐郡西濱名村平山山田政治の高祖たり其の人となり詳ならずと雖ども蓋し殖產に力を盡しゝこと二三の遺蹟によりて推測することを得翁嘗て西國巡遊の砌紀州那智地方に於て蜜柑の苗木を携へ歸り之を庭園に栽植すこれ今を去る百六十年前にして西濱名柑橘の鼻祖と謂ふべし後同好の士枳穀樹に接種して次第に廣まり今より百年前に全く同村平山一圓幷に長根大福寺區の一部に增植するに至り五六十年前その全盛を極めたり翁又平山の地に田六段歩余を開墾し數町の遠きより灌漑水を引くその水路甚た困難したる跡今に歷然たり而してその井堰も其當時として規模大に工事亦困難を極めたり人呼て彌太夫井堰（又單に彌太夫）といふ數年前洪水の際這井堰の大部破壞するに至りしは惜むべし以上の事跡より考ふるも翁か產業に大に力を盡しゝことを知るべし翁享保十五年十一月六日沒す

加藤權兵衛翁

山田彌右衛門翁か西濱名に於ける紀州蜜柑の鼻祖として忘るへからさると共に加藤權兵衛翁か亦濱名蜜柑の元祖たることを傳へさるべからす翁は平山區加藤良藏の祖たり天保年間三河國吉良地方より苗木を購ひ來り之を庭園に栽培すその樹根元の周圍三尺余高亦之にかなふ大樹となりしが明治十七年間家火災の砌り樹も共に燒損せしは惜むべし今日西濱名に於ける濱名蜜柑の產額實に大なるものあるは蓋翁の創業によると謂ふべし

山本新六翁

弘化二年生
明治廿五年死

翁は弘化二年東濱名村大崎に生る壯年の頃出て丶西濱名村只木山本氏を嗣ぐ性豪放夙に意を公共事業に用ふ明治初年の頃盛に養蠶の業を村民に勸め官に請ふて扇山山林の開拓を企劃し十數年を出づるや忽ち仝村をして本郡に於ける養蠶地たらしむ仝村養蠶業の今日ある全く氏の賜と云ふべし明治四十三年十一月廿日本縣知事より追賞せられ翌年里人之を德とし氏の邸内に頌德碑を建つるに至れり

賞　狀

引佐郡西濱名村
故　山本新六

夙ニ蠶業ニ志シ卒先シテ桑園ノ增殖並ニ之レカ改良ニ盡瘁シ蠶業ノ基礎ヲ確立シタルハ其功勞尠シトセス仍テ本會ノ規則ニ依リ文匣壹個ヲ贈リ其功績ヲ表彰ス

明治四十三年十一月二十日

静岡縣桑園品評會總裁從四位勳三等　石原健三

久田擇中翁

翁字は仙藏六太夫と云ひ蝸牛庵と號す舊姓を宮瀨といふ父安右衛門三河國寶飯郡松平主水に仕ふ其祖平氏に出で壽永の亂浪して紀伊に入り後三河國に移り牧山村を開く族次第に繁殖し一村悉く宮瀨を冐す足利將軍の頃世亂れて貢を納むべき正主なし祖某自ら玄米六斗を負ひ京都に至り之を禁闕に奉る時の帝大い嘉賞せられ六太夫の名を賜はる爾來世々六太夫を稱す翁の六太夫を稱する蓋し之が爲なり翁初め間部下總守儒者大郷等に就き漢籍を修め麾下小出伊織の後荻野彦太に就きて算數を學ぶ弘化二年三月十二日幕府の臣となり江戸城南讀書樓教師を命せらる

維新後明治四年三月長上郡橋羽村小學校教員となり仝七年五月仝郡安間小學校に轉じ仝八年十一月愛知縣只木小學校教員に任せられ十年六月十一日只木小學校改福長小學校訓導拜命二十七年三月三十一日依願退職仝三十九年十月廿五日病歿す

久田先生之碑文寫

先生諱擇中宮瀨氏後曰久田氏號蝸牛庵江都人考安右衛門君諱泰量母小田氏名紋子初仕松平主水善清後仕幕府維新後棲遲于遠江猪鼻湖上福長邑以育英爲樂三十餘年如一日云先生性愛酒恬澹自如而其敎子弟也諄諄不倦善誘之名傳鄕鄰配中川氏名米子有淑德精裁縫之技一鄕子女集其門先生老而益壯善飲善談而不廢讀者一日憑几繙帙溘焉逝實明治三十九年十月二十五日也距生文政七年五月十二日享年八十有三葬于邑之大福寺有四男一女長祐吉承家季矯出繼中川氏奉職鄕學亦有良師之稱頃者門生相謀將樹石其墓以表之請余文以記年月乃按狀叙其略云

明治三十九年除月十二日

静岡　深谷盛興　撰

辭世

朝顏も實を結ひけり敎草

一一、口碑傳說

イ、平氏の落武者

西濱名尋常高等小學校平山分敎場敷地內に近年まで椋の大木の切株ありたり傳へ云ふ其昔平氏の落武者此の所に來り大木の朽洞に隱る追者來りて之れを索むれども知れず住人森田某あり其隱れ所を密告す追者討つて之れを殺す森田家代々不幸あり其家終に絕滅す蓋し落武者の祟なりと

ロ、松下嘉平次の城趾

西濱名村岡本區にあり松下嘉平次の居城なりしと殘壕及城趾今猶歷然たり其中央高地今は區內の共同墓地となる

ハ、橘逸勢の墓地

西濱名村本坂區竹平彌平氏所有地に竹籔あり承和の昔橘逸勢罪ありて伊豆に流さる配處に赴くや一女あり從つて歩す監送する者之を叱して去らしむ女晝止り夜行く逸勢遠江國板築驛に到り病んで逆旅に終る女悲み驛下に葬り傍らに廬を造り屍を守りて去らず落髮して尼となり自ら妙冲と名づく竹籔は即ち當時妙冲の廬を造りし趾なりと

今所愛宕山の中腹に巨石數個あり蓋の如し其下深く神鏡を藏す是れ逸勢の屍に代へたるものなり何時の頃にか之を掘り出し八幡神社內に納む賊あり一夜之を盜みて賣却す買ふもの悉く發狂せりと轉賣されて三州岡崎にあり本坂に竹平氣吹なる者あり熱心に搜索の結果岡崎より買ひ來り石の唐戸に入れて八幡宮に納む遭難より六十年目なりしと云ふ然るに明治四十一年再び盜難に遭ひ今に探索の手掛りなきを憾とす

ニ、火塚

本村釣區の西北高原中に塚あり里人呼んで火塚と云ふ側に穴あり昔時火の雨大に降る里人此の穴に火を避けたりと傳ふこれ古墳なり

ホ、三日池

本村三ヶ日區より岡本區に通ずる縣道の右田圃の中にあり昔時三日間此池を干したれども水の盡くるを見ず三ヶ日の稱是れより起ると云ふ

ヘ、中郷樣

三ヶ日區縣倍郎氏の家を中郷樣と云ふ昔時此地中の郷と云へりしときよりの舊家なるが故なりと云ふ

ト、樟の大木

本村日比澤區鈴木七平氏の裏竹林中に樟の大木あり高さ拾參丈八尺周圍七丈千五百年以前よりの生

木なりしが明治二十三年十月賣却せりと

公家塚と板築驛

公家塚は只木村の路傍になり橘逸勢の墓なりと云傳ふ遠江風土記傳著者内山眞龍氏また此說を採る吉田東伍氏地名辭書には左の如く言へり

只木

今西濱名村の大字とす三ヶ日の北にして奥山方廣寺の南麓にあたり此坂築驛の橘逸勢の古趾を傳ふ因て疑ふ板築はいたづきなれども后其頭の母音脱落してタヅキとなれるか此地は山間なれども古の本坂路なれば往來の便宜なしと言ふべからず但其板築里と云はずして板築驛とあるは史家修字の誤乎

以上の諸說を總合するときは只木は古の板築驛にして公家塚は橘逸勢の墓なるが如きも古の本坂の道筋にあらず且つ本坂方面古老の云傳へに徵するも逸勢の沒せしは今の本坂區の東端の邊なるべく且つ遠江國風土記所載神因幡氏所說も採るべき說なれば或は逸勢は只木に於て沒せしかにあらずして本坂邊にて沒せんものには非らざるか今暫くこの兩說を掲げて疑を存す。

神因幡氏說（遠江風土記の中にあり）

假用保々都支訓於板築字音也保々都支山有日比澤村當板築驛家

橘逸勢事蹟

贈從四位下但馬權守橘逸勢朝臣は敏達天皇第四子難波皇子の曾子孫井手左大臣諸兄公の曾孫なり諸兄公始橘姓を賜はりて是に橘姓を賜はりて是を橘氏の祖とす其子贈大政大臣奈良麿公其子從四位下右中弁入居朝臣其逸勢なり爲性放誕にして細節に拘はらず最隸書を善くせり皇城宮門の榜題多く其手に成れり（文德實際卷一）

大同九年七月嵯峨上皇御病重らせ給ふに就て東宮帶刀伴健岑以爲崩御遠を非國家之亂待つべきに在りと皇太子恒良親王を奉じて東國に入り謀叛を企てんとす發覺して逸勢も同意の罪に於て共に捕へられ掠拷せらるれども服せず依之廿五日死を減じて姓を除き非人と改め伊豆國に配流せらる（讀日本后記）

逸勢配所に赴く時一女あり悲しみ泣て徒歩して從ひ行く監送の官人之を叱して去らしむ然れども晝は隱れて止まり夜は跡を追ふて行き遂に相從ふことを得たり（文德實錄）然るに逸勢八月十三日（續日本后記）遠江國板築驛に到り逆旅にて死せり悲しみ嘆きて哀を盡せり即驛下に埋葬して其側に廬して去らず自ら落髮して尼となり妙沖と名づく爲に誓念して曉昏解らず見るもの是が爲めに涙を流せり（文德實錄大日本史本朝孝子傳）

文德天皇の嘉祥三年五月壬辰正五位下を追贈し玉ひ詔を遠江國に下して本鄕に葬らしめ給へり其時に妙沖尼屍を背負ひて京都に還れり時人皆感れみて孝女となす

諸蔽根元記に姉小路猪熊橘逸勢神平治元年九月に此祭上皇榮其給世人以謠祀焉とありいま京都の土御靈

社ともに中御殿八其御旅所ナリは所御霊を祀れるにて其中橘太夫と云へるは即ち逸勢王也拾芥抄五ノ八丁神社考六ノ十五丁同詳節廿町神社啓蒙七ノ八町諸社一覽等に云へるが如し偖右兩社側祭八月十八日にして神輿は二基百棟抄なるは例祭九月二日逝去されしは八月十三日にて其身まからし承和九年より茲年慶應丙寅二年迄年暦一千二十五年を經たり

逸勢を世語にハヤナリと訓めど朝野群載にアサナリと訓み神社啓蒙にも神鏡抄に引きて間佐名利と讀むと見ゆ貝原氏の眞列にも然かいはれだり神社考詳にはトシナリと訓めり拾芥抄なる人名錄にも逸(トシ)と訓み姓名錄抄にも逸勢(止志)と見マサトモ、ハヤトモと訓めることなし

（慶應二丙寅歳　羽田野敬雄）

一二、變災

イ、明治四十五年三月九日岡本區御内園に大火あり全燒二十戸

ロ、大正三年二月五日津々崎區に出火あり八戸十五棟を燒失す

一三、兵事

明治二十七八年戰役戰病死者

死役年月日	死役種別	死役場所	兵種官等	勳功	氏名
明治二十八年六月六日	病死	宇品新島	歩兵軍曹	年金四百圓余	小池專次郎

明治三十七八年戰役戰病死者

死役年月日	死役種別	死役場所	兵種官等	勳功	氏名
明治三十七年十月十一日	戰死	英得牛泉	歩一	勳八四百七拾圓	清水權四郎
仝　三十七年十月十二日	仝	仝	歩上	勳八功七五百二拾圓	外山幸三郎
仝　三十七年十月十六日	仝	魏家樓子	歩一	勳八四百七拾圓	中村蔵治
仝　三十八年三月二十七日	病死	遼陽	歩二	一時金二百二拾圓	夏目秀次
仝　三十七年九月二十八日	仝	宇治	輜輸	一時金二百二拾圓	梅藤音蔵
仝　三十九年一月五日	仝	關東病院	仝	旭八	田中保之助
仝　三十八年九月十日	仝	再千塞病院	歩一	一時金二百四拾圓	竹腰喜三郎
仝　三十七年十月十一日	戰死	本溪湖	歩上	勳八四百七拾圓	外山甚蔵
仝　三十七年五月二十六日	仝	南山	歩一	勳八四百七拾圓	鈴木万次郎
仝　三十七年十月二十七日	病死	板橋堡病院	歩二	勳八二百二拾圓	片山菊十
仝　三十八年三月五日	戰死	孤字子北方	歩一	勳八四百七拾圓	山田好蔵
仝　三十八年三月十日	仝	揚害屯	歩一	勳七五百二拾圓	夏目卯吉
仝　三十八年十二月三日	病死	東京	歩二		淺野市蔵
仝　三十九年十月七日	仝	北京	歩一		外山豐太郎

大正三四年の役には死歿者無し

明治二十七八年戰役

一、應召者不明

明治三十七八年戰役

應召年月日	所屬部隊	兵種官等	勳功	氏名
明治三十七年三月二十六日	三師	騎一等踏鐵伍長	勳七三百五拾圓	前原久治郎
仝　三十七年三月六日	近衛	砲一等踏鐵伍長	仝	内山嘉市
仝　三十八年三月二十日	歩十八	歩上	勳八二百圓	内山乙吉
仝　三十七年五月五日	仝	歩一	仝	石原松太郎
仝　三十七年十二月一日	仝	歩少尉	勳六	小池清三郎
仝　三十八年四月三十日	仝	歩伍	勳七百五拾圓	石川澤太郎
仝　三十七年三月十日	仝	歩軍	勳七功六年二百圓	藤井治吉
仝	三師	輜伍	勳八八十圓	小池菊平
仝	歩十八	歩一	勳八二百圓	國原松太郎
明治三十七年六月四日	三師	看護卒	勳八百五十圓	鮮　瓦一郎
仝　三十七年四月二十三日	仝	輜輪	勳八八十圓	中村芳太郎
仝　三十七年六月二十四日	歩十八	歩一	仝	吉野宇平

仝　三十七年十月二十日	仝	仝	勳八百圓	田中貞次郎
仝　三十七年八月二十六日	三師	一等看護長	勳七四百圓	鮮　等
仝　三十七年五月五日	歩十八	歩一	勳八	清水權四郎
仝　三十七年六月十二日	仝	仝	勳八百五十圓	辻村正二
仝　三十七年十一月六日	近衛	仝	勳八百圓	内山房吉
仝　三十七年十一月十六日	三師	輜輪		澤村十七吉
仝　三十七年十一月二十日	歩十八	歩二	三十五圓	鮮　詮太郎
仝	仝	仝	仝	中村小作
明治三十八年三月二十一日	仝	歩上	勳八八十圓	夏目周太郎
仝　三十七年十二月五日	仝	歩一		鈴木牛藏
仝　三十八年一月十五日	三師	輜一	三十五圓	中村爲太郎
仝　三十八年一月二十七日	歩十八	歩一	五十圓	夏目幸平
仝　三十八年二月四日	仝	看卒	勳八七十圓	大野善藏
明治三十八年二月二十八日	仝	仝	勳八	吉野常太郎
仝　三十八年四月一日	近歩四	歩二	三十五圓	織田秋太郎
仝	三師司	輜輪	五十圓	中村秀吉
仝	仝	仝	勳八百五十圓	吉野德十
仝	仝	仝	勳八七十圓	石原龜吉

仝	仝	仝	仝	動八百四	田中寅吉
明治三十八年六月十一日	仝	仝	仝	三十五四	内山小一郎
仝 三十八年三月二十日	歩十八	歩一	仝	動八百五十四	中村芳太郎
仝 三十七年八月十日	仝		仝	動八百五十四	中村源十
仝 三十七年十月七日	仝	歩二	歩二	動八	片山菊十
仝 三十七年三月十日	三師	輜輸	輜輸	動八八十四	久米小平
仝 三十七年六月二十四日	歩一八	歩一	歩一	動七二百四	中村龜治
仝 三十七年十一月二十日	仝	仝	仝	動八百四	縣文作
仝 三十七年十二月廿七日	仝	歩上	歩上	動八八十四	黒柳三作
仝 三十八年一月十五日	三師	輜輸	輜輸	動八八十四	片山守次
仝 三十八年二月十一日	仝	仝	仝	五十四	久米太作
仝 三十八年二月二十八日	近歩四	歩二	歩二	三十五四	伊藤善吉
仝 三十八年七月二十五日	三師	砲輜	砲輜	動八八十四	中村重作
仝 三十八年八月四日	三師	輜輸	輜輸	五十四	久米藤一郎
仝	仝	仝	仝	三十五四	片山三代吉
明治三十八年六月二十九日	仝	仝	仝	五十四	片山松太郎
仝 三十七年三月十日	歩一八	歩一	輜輸	功七級八年金百四	安形源藏
仝	三師	輜輸	輜輸	動八百四	河西留吉

仝 三十七年十一月六日	仝	仝	仝	動八八十四	安形定吉
仝 三十七年十一月二十日	歩十八	歩一	歩一	仝	河西泰次
仝 三十七年十二月廿七日	仝	仝	仝	動七八十四	河西谷平
仝 三十七年十二月一日	三師	工一	工一		河西浦太郎
仝 三十八年一月十五日	三師	輜輸	輜輸	動八八十四	安形嘉市
仝 三十八年二月二十五日	仝	仝	仝	仝	安形菊次郎
仝 三十八年二月二十五日	三師	輜輸	輜輸	五十四	井口龜太郎
仝 三十七年二月六日	横海兵團	一等機關兵			大谷卯一
仝 三十七年五月五日	歩十八	歩二	歩二	動八百五十四	竹上孫作
仝 三十八年五月四日	砲三聯	砲一	砲一		鈴木銀一郎
仝 三十七年三月十日	歩十八	歩一	歩一	動八二百四	井口清太郎
仝	仝	仝	仝	仝	佐藤松吉
仝	三師	輜輸	輜輸	動八百五十四	井口茂作
仝 三十七年五月五日	仝	仝	仝	動八	井口芳太郎
仝 三十七年四月二十三日	仝	仝	仝	動八七十四	夏目玉次
仝	仝	仝	仝	動八八十四	佐藤保平
仝 三十七年八月一日	歩十八	歩二	歩二	動八百五十四	佐藤喜三郎
仝 三十七年九月二十日	三師	輜輸	輜輸	動八八十四	渡邊善吉

仝	三十七年十二月五日	歩三十三	歩一	仝	夏目太次郎
仝	三十七年十二月廿七日	歩十八	仝	仝	大谷惣七
仝	三十七年十二月廿五日	仝	歩二	動八七十圓	竹上平人
仝	三十八年一月十五日	三師	輜輪	動八八十圓	鈴木頼次
仝	三十八年二月四日	歩十八	看護	三十五圓	夏目木繁
仝	三十八年二月十八日	三師	輜輪	動八八十圓	森田玉吉
仝	三十八年二月二十八日	近四	歩二	三十五圓	井口新太郎
仝	三十八年三月二十三日	歩十八	仝	仝	森田伊作
仝	三十八年一月二十七日	仝	歩一		大谷玉吉
仝	三十七年三月十日	騎三	騎上	功七年百圓	梅原幸太郎
仝	三十七年四月十九日	三師	輜輪	動八百圓	小川米太郎
仝	三十七年十二月一日	歩十八	歩一	動八二百圓	松井安吉
仝	三十七年九月八日	三師	輜輪	動八八十圓	夏目桝吉
仝	三十七年九月十五日	仝	仝		田中保之助
仝	三十八年一月二十八日	歩十八	歩二	五十圓	松井與太郎
仝	三十七年三月二十六日	仝	歩一	功七年百圓 動八	高橋幾平
仝	三十七年	近三	歩二	動八百五十圓	山本千代藏
仝	三十七年五月五日	歩十八	歩上	動八二百圓	高橋峰彌

仝	三十七年三月十日	仝	仝	動八二百圓	高橋市平
仝		仝	仝	動八二百圓	山本惣作
仝	三十七年六月十七日	歩十八	歩一	動八	高橋彝次
仝	三十七年十一月二十日	三師砲	砲一	仝	藤原爲作
仝	三十七年十二月廿七日	歩十八	歩上	動八八十圓	高橋庄作
仝	三十八年一月二十七日	仝	歩二	仝	高橋吉平
仝	三十八年四月二十八日	三師	輜輪	五十圓	山本藤藏
仝	三十七年八月七日	歩十八	歩二	動八八十圓	石橋米作
仝	三十七年三月十日	仝	仝	動八二百圓	清水清十郎
仝	三十七年五月一日	仝	仝	動八百圓	清水市三郎
仝	三十七年十月三十日	仝	歩一	仝	石橋伊十
仝	三十七年十二月四日	仝	仝	動八七十圓	高平由平
仝	三十七年十二月五日	仝	仝	動八百五十圓	清水林藏
仝	三十七年十二月廿五日	仝	歩一	動八七十圓	清水小三郎
仝	三十八年一月五日	三師	輜輪	動八八十圓	尾藤立三
仝		仝	仝	仝	高平新太郎
仝	三十八年一月二十日	歩十八	歩上	動七百圓	清水新平
仝	三十八年一月二十七日	仝	歩二	五十圓	尾藤俊藏

仝	仝	仝	仝	仝	清水峯作
仝	三十八年二月七日	近二	仝	三十五圓	石橋庄次郎
仝	三十七年五月五日	歩十八	歩中尉		山田政一
仝	仝	仝	歩上	勳八功七年百圓	河部喜三郎
仝	三十七年三月十日	騎三	騎一等蹄鐵工長	勳七三百圓	金子佐内
仝	仝	歩十八	歩上	勳八八十圓	河部良次郎
仝	仝	仝	歩一	勳八百五十圓	金子芳作
仝	砲三	砲三	砲輪	勳八二百圓	加藤定平
仝	仝	歩十八	歩一	勳八功七年百圓	加藤宇一
仝	三十七年六月二十四日	仝	仝	勳八百圓	森田庄吉
仝	三十七年九月八日	三師	輜輪	勳八功七年百圓	加藤熊作
仝	三十七年十月三十日	歩十八	歩一	勳八八拾圓	森田秀藏
仝	三十七年十一月六日	三師	砲一	勳八	山田好藏
仝	三十七年十月九日	三師	砲輪	勳八八十圓	山口京吉
仝	三十七年十二月一日	歩十八	歩一	勳八八十圓	加藤直一平
仝	仝	仝	仝	死	外山豐太郎
仝	三十八年一月二十七日	仝	歩一	五拾圓	山口善八

仝	三十八年二月七日	近二	歩二	死	浦野市藏
仝	三十八年三月二十三日	歩十八	仝	參拾五圓	磯田玉平
仝		歩十八	仝	參拾五圓	森田榮太郎
仝	三十八年四月二十五日	三師	輜輪	五拾圓	加藤猶平
仝	三十八年七日二十三日	三師	仝	五拾圓	森田清次郎
仝	三十八年八月六日	三師	仝	參拾五圓	尾藤鎌十
仝	三十七年五月五日	三師	騎曹長	勳七功七年百圓	井口彌平
仝	三十七年三月十日	砲三	砲輪	勳八八拾圓	松井喜傳次
仝	三十七年四月九日	三師	輜輪	勳八百圓	竹腰利八
仝	三十七年六月二十四日	歩十八	歩一	勳八百圓	竹腰喜作
仝	三十七年十月三十日	歩十八	歩二	勳八八拾圓	井口又平
仝	三十七年十二月五日	歩十八	仝	勳八七拾圓	井口源作
仝		歩十八	歩一	死	竹腰喜三郎
仝	三十八年一月二十日	歩十八	仝	勳七百圓	井口源吉
仝	三十七年十二月一日	三師	砲輪		井口又七
仝	三十八年一月十五日	三師	輜輪	勳八七拾圓	竹腰政吉
仝	三十八年一月二十七日	歩十八	歩二	五拾圓	加藤新太郎
仝	三十八年一月十八日	歩三十四	歩上	勳八百五拾圓	鈴木鍵一郎

明治三十七年五月五日	歩十八	歩一	勳八百圓	桐生金作	
仝　三十七年三月十日	歩十八	仝	勳八百五拾圓	河合作平	
仝	砲三	砲輸	勳八八拾圓	石田興平	
仝　三十七年十二月廿五日	歩十八	歩二	勳八	鈴木源六	
仝　三十七年五月五日	歩十八	歩一	勳八百五拾圓	梅藤卯平	
仝　三十七年三月十日	三師	砲輸	勳八百五拾圓	後藤保太郎	
仝　三十七年四月二十三日	三師	輜輸	病死	梅藤音藏	
仝　三十七年四月一日	三師	仝	勳八七拾圓	梅藤惣一郎	
仝　三十八年二月七日	近二	歩二	勳八七拾圓	相津信次	
仝　三十八年四月一日	三師	輜輸	五拾圓	藤原藤作	
仝　三十七年三月十日	歩十八	歩一	勳八二百圓	夏目彌平	
仝	三師	輜輸	勳八百五拾圓	夏目利八	
仝　三十七年十一月六日	三師	砲一	參拾五圓	曾我光太郎	
仝　三十七年十二月廿七日	歩十八	歩一	勳七　戰死	夏目卯吉	
仝　三十七年十二月廿五日	歩十八	歩二		夏目秀次	
仝　三十八年一月二十八日	歩十八	歩一	勳八七拾圓	竹平森次	
仝　三十八年一月三十日	三師	輜輸	五拾圓	夏目馨次	
仝　三十八年四月二十五日	三師	輜輸		河西悦司	

仝　三十七年五月五日	歩十八	歩上	勳八功七死	外山幸三郎	
仝　三十七年三月十日	歩十八	仝	勳八二百圓	石田瓦作	
仝	砲三	砲一		外山常藏	
仝	工三	工上	勳八功七年百圓	大矢鑄次	
仝	歩十八	歩一	勳八八拾圓	石田村次	
仝　三十七年二月六日	近一	歩上	勳八	外山甚藏	
仝　三十七年五月五日	三師	輜輸	勳八	外山猪吉	
仝　三十七年四月二十三日	三師	輜輸	勳八百圓	宮崎保平	
仝　三十七年十二月一日	歩十八	歩一	勳八	杉田利平	
仝　三十七年四月一日	三師	輜輸	勳八八拾圓	外山啓三郎	
仝	三師	輜輸	勳八八拾圓	外山桂作	
仝　三十七年九月二十五日	歩十八	歩二	勳八百圓	宮崎新三	
仝	歩十八	歩二	勳八百圓	大矢爲次	
仝　三十七年十一月六日	近一	歩一	勳八八拾圓	外山平八	
仝　三十七年十一月二十日	歩十八	歩一	勳八八拾圓	外山小市	
仝　三十七年十二月五日	歩十八	歩二	勳八七拾圓	内藤善作	
仝　三十七年十二月廿五日	歩十八	歩二	參拾五圓	外山林藏	
仝　三十七年十二月廿七日	歩十八	歩一	勳七百圓	杉田忠七	

明治三十七年十二月廿七日	歩十八	歩一	勲八 八拾圓	外山淵三次	
仝　三十八年一月十五日	三師	輜輸	勲八 八拾圓	安形源吉	
仝　三十八年一月二十七日	歩十八	歩二	勲八 七拾圓	井口京次郎	
仝　三十八年五月六日	近四	歩二	三十五圓	外山金次郎	
仝　三十七年三月二十六日	歩十八	歩一	勲八 戦死	鈴木万次郎	
仝　三十七年五月五日	歩十八	歩一	勲八 死	中村蔵次	
仝　三十七年九月十日	歩十八	歩二	勲八 百圓	小野留次郎	
仝　三十七年三月十日	砲三	砲一	勲八功七 年百圓	小野末松	
仝	砲三	砲一	勲八 百圓	中村民平	
仝	三師	輜輸	勲八 二百圓	石川市平	
仝	歩十八	歩上	勲八功七 年百圓	森田作平	
仝	歩十八	歩一	勲八 八拾圓	小野文蔵	
仝　三十七年五月五日	三師	輜輸	勲八 八拾圓	石川儀七	
仝　三十七年三月十日	三師	輜輸	勲八 百五拾圓	石川真一郎	
仝　三十八年一月五日	三師	輜輸	勲八 八拾圓	堀川惣太郎	
仝　三十八年二月九日	三師	輜輸	勲八 七拾圓	中村源太郎	
仝　三十八年一月三十日	三師	輜輸	勲八 八拾圓	石川儀太郎	
仝　三十八年三月二十三日	歩十八	歩二	三十五圓	小野梅太郎	

大正三四年戦役

應召年月日	所屬部隊	兵種官等	勲功	氏名
仝　三十八年六月二十六日	三師	砲輸	三十五圓	小野仙太郎
仝　三十八年八月四日	三師	輜輸	五拾圓	鈴木彌次郎
仝　三十八年八月六日	三師	輜輸	三十五圓	小野清重
大正三年九月二十七日	濱松六十七聯隊	歩兵軍曹	旭七 年金百圓	小野重五郎
仝	仝	歩兵伍長	旭七 三百圓	井口英郎
仝	仝	歩兵軍曹	旭七 三百圓	永田登一
仝	仝	歩兵軍曹	旭七 二百五十圓	高橋盛太郎
仝	仝	歩兵軍曹	旭七 二百五十圓	石原喜平
仝	仝	歩兵曹長	旭七 二百七十圓	高橋源平
仝	仝	歩兵伍長	旭七 二百二十圓	鈴木悦平
仝	仝	歩兵伍長	瑞七 二百圓	夏目時次郎
仝	仝	歩兵伍長	瑞七 二百圓	森田幸蔵
仝	仝	歩兵上等兵	旭八 二百二十圓	中根由太郎
仝	仝	歩兵一等卒	旭八 二百圓	森田孫吉

仝	仝	歩兵一等卒	旭八二百圓	鈴木末太郎
仝	仝	歩兵一等卒	旭八二百圓	夏目勇太郎
仝	仝	輜重輸卒	旭八二百圓	加藤輝寅
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百五十圓	佐藤丑太郎
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百五十圓	安形蔦吉
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百二十圓	中根七太郎
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百二十圓	山本邛十
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百二十圓	金子保一
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百二十圓	外山重太郎
仝	仝	歩兵上等兵	旭八二百圓	鈴木七太郎
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百五十圓	山崎吉太郎
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百五十圓	藤原市六
仝	仝	歩兵上等兵	旭八百七十圓	鈴木来吉
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百二十圓	尾崎重雄
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百二十圓	清水力三郎
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百二十圓	安形權助
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百二十圓	小川輝

仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	石川新藏
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	外山竹次郎
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	河西太平
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	田中市太郎
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	外山芳平
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	安彦幾藏
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	中野卯平
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	夏目鬼太郎
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八八拾圓	桐生平十
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八八拾圓	夏目幸一
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八七拾圓	鈴木八平
仝	仝	歩兵一等卒	旭八百三拾圓	夏目八郎
仝	仝	歩兵一等卒	旭八二百圓	竹平定平
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	大谷小平
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	久米新十郎
仝	仝	歩兵一等卒	瑞八九拾圓	久米來作
仝	仝	歩兵上等兵	旭八百五拾圓	尾藤澤治
仝	仝	輜重輸卒	瑞八九拾圓	藤田友吉

仝	豐橋十五大隊	工兵一等卒	瑞八九拾四	大野梅吉	仝	仝
仝	濱松六十七聯隊	歩兵軍曹	八拾四	竹上鉄二郎	仝	仝
仝	豐橋十五大隊	輜重輸卒	二拾四	鈴木吉平	仝	仝
仝	濱松六十七聯隊	歩兵上等兵	四拾四	梅藤要太郎	仝	仝
仝	仝	歩兵上等兵	四拾四	山本儀一郎	仝	仝
仝	仝	歩兵一等卒	二十五四	高橋源右衛門	仝	仝
仝	仝	歩兵二等卒	二十五四	縣兼一郎	仝	仝
仝	仝	歩兵一等卒	二十五四	竹腰幸太郎	仝	仝
仝	仝	歩兵一等卒	二十五四	後藤太郎平	仝	仝
仝	仝	歩兵一等卒	二十五四	山本菊太郎	仝	仝

明治廿七、八年戰役に關し行賞者

勳等何々章	年時賜金	官等兵種	住所	族籍	氏名
	一時金貳拾五四	歩兵一等卒	西濱名村富本	平民	夏目太次郎
	一時金貳拾五四	輜重輸卒	西濱名村下尾奈	仝	外山啓三郎
勳八等瑞寶章	一時金參拾五四	歩兵一等卒	西濱名村福長	仝	石橋濵平
	一時金貳拾五四	歩兵二等卒	西濱名村平山	仝	淺野安吉
	一時金貳拾五四	輜重輸卒	西濱名村下尾奈	仝	内藤桂作
勳八等瑞寶章	一時金五拾四	歩兵上等兵	西濱名村福長	仝	清水新平
仝	一時金參拾五四	歩兵一等卒	西濱名村下尾奈	仝	外山忠七
	一時金貳拾五四	歩兵一等卒	西濱名村三ヶ日	仝	内山房吉
勳八等瑞寶章	一時金參拾五四	歩兵一等卒	西濱名村津々崎	仝	河西斧平
	一時金貳拾五四	歩兵二等卒	西濱名村三ヶ日	仝	吉野宇平
勳八等瑞寶章	一時金參拾五四	歩兵一等卒	西濱名村宇志	仝	中村龜治
勳八等瑞寶章	一時金參拾五四	歩兵一等卒	西濱名村福長	仝	清水柳次
勳八等瑞寶章	一時金參拾五四	砲兵一等卒	西濱名村鵜代	仝	曾我光太郎
勳八等瑞寶章	一時金參拾五四	歩兵二等卒	西濱名村鵜代	仝	夏目廣作
	一時金貳拾五四	歩兵一等卒	西濱名村只木	仝	高橋五平
	一時金貳拾五四	輜重輸卒	西濱名村本坂	仝	梅藤惣一郎
	一時金貳拾五四	歩兵一等卒	西濱名村岡本	仝	大谷玉吉
	一時金貳拾五四	歩兵一等卒	西濱名村釣	仝	松井治郎吉
勳八等瑞寶章	一時金參拾五四	砲兵上等兵	西濱名村三ヶ日	仝	梅本増次郎
	一時金貳拾五四	歩兵下等兵	西濱名村上尾奈	仝	石田權太郎
勳八等瑞寶章	一時金參拾五四	二等看護長	西濱名村三ヶ日	仝	縣等

元東濱名村長　　木杯一組　縣　勇
元西濱名村助役　　賜金十五圓　相津德一郎

癒　兵　（明治三十七八年戰役）

右は得利寺役に於て戰傷のため　　歩兵一等卒　森田庄吉

右は沙河戰役に於て負傷す　　歩兵二等卒　石橋米作

戰時に於ける後援事業

イ、恤　兵

明治二十七八年戰役各戸より梅干を集めて送る

ロ、軍人家遺族救護事業

1軍人家族保護會（三十七八年戰役）

引佐郡西濱名村軍人家族保護會々則

第一條　本會ハ其事務所ヲ本村役場内ニ置ク

第二條　本會ハ本村居住者ヲ以テ組織シ西濱名村出征軍人家族保護會ト稱ス

第三條　本會ハ出征從軍者ヲシテ後顧ノ憂ナカラシムルヲ以テ目的トシ左ノ事項ヲ施行ス

一、海陸軍人ニシテ動員令下リ應召スルモノニ對シテハ餞別トシテ金參圓ヅヽヲ贈呈スルコト

但現役兵モ之ニ準ズ

二、出征軍人ヲ送迎及慰問スルコト

三、軍人出征中ソノ家業ハ各字内ニ於テ夫役ヲ以テ之ガ業務ノ助力ヲナス事

但シ本項ハ大字限リ日割ヲ以テ分担スルコト

四、出征軍人留守宅ヘハ會長以下委員ノ中ニテ時々訪問スルコト

五、生計困難ナル從軍者ノ家族ニ對シテハソノ生活ノ狀況ニ應ジ壹ケ月金貳圓以下ノ救護金ヲ贈呈スルコト

六、戰役負傷又ハ病氣ノ爲メ歸鄕シタルモノニ對シテハ金貳拾圓以下ヲ贈呈スルコト

七、戰死又ハ病死者ノ葬式ハ村葬ヲ以テ之ヲ行ヒソノ遺族ニ對シテハ祭資料トシテ金貳拾圓以上金五拾圓以下ヲ贈呈スルコト

八、從軍者ノ家族ニシテ疾病ニ罹リタル時ハ特ニ金錢又ハ物品ヲ贈與シテ之ヲ慰問シ火災其他非常ノ事變ノ場合ハ相當ノ救護ヲ與フルコト

九、從軍者ノ家ニハ各字ノ門役ヲ免除スルコト

第四條　本會ハ出征軍人ニ對シ時々慰問狀及感謝狀ヲ贈呈スル事

第五條　本會ハ第三條ノ各項ヲ實行スルタメ會員ヲシテ應分ノ金額又ハ夫役現品ヲ寄附セシムル事

第六條　本會ニ左ノ役員ヲオク

一會　長　一人　一副會長　一人
一理　事　一人　一常務委員　十五人
一評議員　三十三人　一書　記　一人

第七條　會長ハ村長副會長ハ助役ニ理事ハ收入役ニ囑託シ評議員ハ村會議員區長ヲ以テ之ニ充テ常務委員ハ區長ヲ以テ之ニ充テ書記ハ會長之ヲ選任ス

第八條　會長ハ會務ヲ總理ス副會長ハ會長ヲ補佐シ會長ノ代理ニ任ズ

第九條　常務委員ハ會長ヲ補佐シ評議員ハ寄附金募集ノ任ニ當リ各其大字ノ事務ヲ處辨ス

第十條　理事ハ會計ヲ處理シ書記ハ會長ノ指揮ヲ受ケ庶務會計ニ從事ス

第十一條　本會ノ會議ヲ評議員會及常務委員會ノ二種トシ會長之ヲ召集ス

第十二條　本會ノ會議ハ普通會議法ニヨル

第十三條　評議員會ニ於テ評議スベキ事項左ノ如シ

一、金品ノ寄附募集方法及夫役現品賦課徴收ニ關スル事
二、贈與金額ヲ定ムル事
三、費用ノ收支豫算決算ニ關スル事
四、右ノ外必要ノ事項

第十四條　常務委員會ニ於テ協議スベキ事項左ノ如シ

一、評議員會ニ於テ決定シタル事項ノ打合セヲナスベキ事
二、軍人送迎準備ニ關スル事

第十五條　寄附金額ハ左ノ種類ニヨリテ之ヲ募集スル事

一、特別寄附金
二、地價割及縣稅戶數割ノ標準ニヨル寄附金

第十六條　寄附金ハ年度內四回（四、七、一〇、一月）各月廿五日限リ納付セシムルモノトス

第十七條　家族保護金ハ毎月末日其他ノ贈與金ハ其時々交付スルモノトス

第十八條　本會則ハ明治卅七年三月一日ヨリ施行シ事變終局マデ之ヲ繼續ス

2 家族農耕補助

軍人家族保護會ノ趣旨ニヨリ各字ニ於テ數人ヅヽノ人夫ヲ以テ時々農耕ヲ助力セシメタリ

ハ、軍人慰問

1慰問狀發送

軍人家族保護會ヲ初メ諸團体ヨリ發送シ特ニ土地ノ狀況等ヲ報セリ

2慰問袋應募

3慰問使（內地勤務者）

ニ、戰捷祈願及祝捷

1祈願　半僧坊　豐川　摩利支天　本宮山　近鄕神社佛閣ニ日參又ハ總參等ヲナシテ戰捷祈願及武運長久ヲ祈レリ

2歡迎會規則

第一條　本會ハ最モ名譽アル常勝軍ノ凱旋ニ際シ歡迎ヲ壯ニシ戰旅ヲ慰藉シ以テ國民援護有終ノ美ヲ濟スヲ以テ目的トス

第二條　今回ノ戰役ニ關係アル軍人家族ハ將來凱旋スルモノ及傷病事故ニヨリテ已ニ歸鄕シタルモノヲ包含ス

第三條　本會ニ左ノ役員ヲ置キ所定ノ會務ヲ執ラシム　但シ任期ヲ一ケ年トシ凡テ名譽職トス

會長　一名　　副會長　一名

特別委員　十名　　歡迎委員　三十三名

理事　一名　　書記　一名

會長ハ會務一切ヲ總理シ會ヲ代表シテソノ任務ニ當ル副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ代理タルベシ特別委員ハ會長ノ諮詢ニ答ヘ若クハ意見ヲ開陳シ會務ノ遂行會費ノ精算調査ニ從事スルコト

歡迎委員ハ事務幷ニ會議ニ參與シ衆ヲ其大字ニ於ケル歡迎ノ準備施設ニ從事スルコト理事ハ會費ノ出納ヲ掌リ備品ヲ保管ス書記ハ會長ノ指揮ヲウケ會務ノ整理通信應答其他雜務ニ從事スルコト

第四條　役員選擧ハ會長ニ村長ヲ副會長ニ助役ヲ理事ニ收入役ヲ歡迎委員ニハ村會議員及區長ヲ以テ當テ特別委員ハ委員中ヨリ互選ス書記ハ會長之ヲ選任ス

第五條　本會ニ左ノ物件ヲ備ヘ會ノ徽章トス

一、村旗　一流　　赤十字旗　一流

一、大字名旗　十五流　　大國旗　二本　　提灯　三十七　　小國旗　五十本

第六條　凱旋ノ報ニ接シタルトキハ本會ハ役員及當該大字ヘ通報シ左ノ準備ヲナシ置クヿ

三ケ日海岸ニ凱旋門ヲ設ケ煙火三發ヲ以テ合圖トナス會長ハ委員三名以上ヲ從ヘ旗章ヲ以テ飾レル船ヲ艤シ鷲津停車場ニ迎ヘ三ケ日海岸ニ上陸シ鄉社ニ至ル本會役員及當該大字幷隣區民ハ一同上陸地ニ參集歡迎スベシ

第七條　全部凱旋ノ曉ヲ以テ凱旋式ヲ擧ゲ軍人慰勞ノ宴ヲ張リ併テ記念品ヲ贈呈スルコト

チ、戰病死者村葬

葬儀規程左ノ如シ

1 葬儀委員ノ任命ハ村長ノ指名ニヨル

2 村葬ノ都度委員ノ協議會ヲ開キ其ノ執行ノ順序方法ヲ定ム

3 葬具ハ僧侶ニ依囑シ豫メ準備シ置クコト

4 導師ハ一人位階ハ居士號トス

5 會　葬　者

役場吏員　村會議員　學校職員　各區長及代理者　協議委員　本村赤十字社員　當該區民一同

在鄉軍人　出征軍人家族

6 香　　料

會葬シタルモノ十錢以上

會葬セサルモノ三錢以上

7 費　　用

戶數割ノ等級ニ應ジテ徵集シ之レガ費用ニ充ツ

戰　病　死　者　　引佐郡西濱名村鈎

陸軍歩兵一等卒　竹　腰　喜　三　郎　　明治二年七月二十三日生

明治二十二年十二月一日徵兵にて歩兵第十八聯隊に入隊仝二十四年十月一日歩兵一等卒申し付られ仝二十五年十二月一日豫備役編入仝二十七年八月二十五日征清軍として從軍し各地の戰鬪に參加し凱旋歸鄉す仝戰役の功に依り金二十五圓を授け賜る仝三十七年十二月五日充員下令仝月十一日後備歩兵第五十二聯隊へ編入仝三十八年一月二十三日歩兵第六聯隊補充大隊へ轉入仝年四月二十六日征露從軍として字品港出帆淸國上陸後各地の戰鬪に參加す仝年八月二十二日盛京省馬仲和に於て膺懲扶斯に罹り仝年九月十日馬千台舍營病院に於て病死す仝戰役の功に依り遺族へ特別賜金二百四十圓並に扶助料年額三十四圓賜與せられ仝年十一月十二日仝村鈎に於て村葬執行せらる

引佐郡西濱名村鵜代

明治二十五年十二月一日徴兵として歩兵第十八聯隊へ入隊仝二十六年十二月一日歩兵一等卒申付らし仝二十七年征清從軍の爲め宇品港出帆韓國並清國各地に於て戰鬪に參與し凱旋歸郷す仝二十八年十一月十六日仝戰役の功に依り勳八等瑞寶章及金五十圓を授け賜る仝三十七年十二月三十日補充召集として歩兵第十八聯隊補充大隊へ應召仝三十八年一月二十八日後備歩兵第八聯隊へ轉入仝年二月七日征露從軍として宇品港出帆清國上陸仝年三月八日歩兵上等兵を命せられ仝月十日盛京省揚官屯附近渾河に於て頭部貫通銃創を受け戰死す仝戰役の功により勳七等青色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金五百二十圓並に扶助料年額五十五圓を賜與せられ仝年六月一日仝村鶴代隣海院に於て村葬執行せらる

陸軍歩兵上等兵勳七等　夏目卯吉
明治五年九月八日生
引佐郡西濱名村摩訶耶

明治二十五年十二月一日徴兵にて補充兵役に編入仝三十七年九月十一日充員下令仝月十五日第三師團第十二補助輸卒隊へ編入仝年十月三日征露從軍として宇品港出帆清國上陸後軍務に從事中仝三十八年十二月四日盛京省大連に於て腸窒扶斯兼右中耳炎に罹り仝三十九年一月五日第一關東陸軍病院に於て病死す

陸軍輜重輸卒勳八等　田中保之助
明治十五年九月二日生
引佐郡西濱名村摩訶耶

仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金二百二十圓並に扶助料年額三十圓を賜與せられ仝年三月九日仝村摩訶耶寺に於て村葬執行せらる

陸軍歩兵二等軍曹　小池專次郎
明治年月日生
引佐郡西濱名村三ヶ日

明治二十七年十一月征清第一軍第三師團後備歩兵第五聯隊第七中隊に屬して出征し仝二十八年六月新發田丸にて凱旋仝年七月四日廣島似島陸軍臨時檢疫所避病院に於て病死戰功に依り賜金二百圓並に遺族扶助料年額金四十圓を賜はる

陸軍歩兵上等兵勳八等　外山甚藏
明治七年十一月五日生
引佐郡西濱名村下尾奈

明治二十八年八月一日豫備徴員として近衛歩兵第二聯隊補充大隊へ應召仝年十一月十八日歸休仝二十九年三月三十一日現役補充として復隊仝三十年十二月一日豫備役編入仝三十七年二月五日充員下令仝月十日近衛後備歩兵第一聯隊へ應召仝年三月十七日征露從軍として宇品港出帆戰地上陸後各地に轉戰し仝年十月十一日歩兵一等卒申付られ仝日更に上等兵を命せられ仝日清國盛京省本溪湖に於て遂に戰死す仝戰

役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金五百二十圓並に扶助料年額五十五圓を賜與せられ仝三十八年一月二十一日仝村下尾奈に於て村葬儀執行せらる

引佐郡西濱名村本坂

陸軍輜重輸卒　梅藤音藏

明治十四年四月十日生

明治三十四年十二月一日徴兵にて第一補充兵役に編入仝三十七年四月十九日充員下令仝月二十三日第三師團第八補助輸卒隊へ編入仝年五月二十九日征露從軍として宇品港出帆戰地上陸後軍務に從事中仝年八月二十七日清國盛京省騰鰲堡に於て脚氣に罹り療養の爲め後送中仝年九月二十八日運送船吉林丸内に於て遂に病死す仝戰役の功に依り遺族へ特別賜金二百二十圓並に扶助料年額三十圓を賜與せられ仝年十月二十九日仝村本坂大月寺に於て村葬儀執行せらる

引佐郡西濱名村下尾奈

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　外山幸三郎

明治十四年九月十五日生

明治三十四年十二月一日徴兵として歩兵第十八聯隊へ入隊仝三十六年十二月一日兵歩一等卒申付られ仝三十七年三月六日充員下令仝年四月二十日征露從軍として宇品出帆清國上陸後各地の戰闘に參與し仝年十月十一日上等兵を命ぜられ仝月十二日英得牛泒に於て頸部貫通銃創を受け戰死す仝戰役の功に依り功七級金鵄勳章年金百圓及勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金五百二十圓並に扶助料年額五十五圓を賜り明治三十八年二月十八日仝村下尾奈小學校に於て村葬執行せらる

引佐郡西濱名村上尾奈

陸軍歩兵一等卒勳八等　鈴木万一郎

明治十五年八月十五日生

明治三十五年十二月十五日徴兵として歩兵第十八聯隊へ入隊仝三十七年三月六日充員下令仝年四月二十日征露從軍の爲め宇品港出帆仝年五月二十五日歩兵一等卒申付られ仝年五月二十六日清國盛京省南山の戰闘に於て右大腿貫通銃創を受け戰死す仝戰役の功により勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金四百七十圓並に扶助料年額五十圓を賜與せられ仝年七月十日仝村上尾奈玉洞寺に於て村葬執行せらる

引佐郡西濱名村福長

陸軍歩兵一等卒勳八等　清水權四郎

明治十六年八月二十日生

明治三十六年十二月十五日徴兵として歩兵第十八聯隊へ入隊仝三十七年三月六日充員下令仝年六月十四

日野戰隊補充員として宇品港出帆清國上陸後各地の戰闘に參與仝年九月二十四日歩兵一等卒申付られ仝年十月十一日清國英得牛泵の戰闘に於て下腹部盲管銃創を受け翌十二日双台子第三師團衛生隊に於て傷死す仝戰役の功により勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金四百七十圓並に扶助料年額五十圓を賜與せられ仝三十八年一月二十二日仝村三ヶ日金剛寺に於て村葬儀執行せらる

引佐郡西濱名村宇志

陸軍歩兵二等卒勳八等　片山菊十

明治十六年九月二十五日生

明治三十六年十二月十五日徴兵として歩兵第十八聯隊に入隊し仝三十七年三月六日充員下令仝年九月十四日野戰隊補充員として宇品港出帆清國上陸後加答兒性肺炎兼急性口内炎に罹り仝年十月二十七日清國板橋堡第三師團第一野戰病院に於て病死す仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金二百二十圓扶助料年額三十圓を賜與せられ明治三十八年三月十六日仝村宇志利生院に於て村葬執行せらる

引佐郡西濱名村上尾奈

陸軍歩兵一等卒勳八等　中村覆治

明治十六年九月十五日生

明治三十六年十二月十五日徴兵として歩兵第十八聯隊へ入隊仝三十七年三月六日充員下令仝年六月十四日征露從軍として宇品港出帆清國上陸後各地の戰闘に參與し仝年十月十六日歩兵一等卒申付らる仝日後三道嶺子附近戰闘の際生死不明の處仝三十八年三月二十九日魏家樓子西北端に於て死体發見戰死と認定せらる仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金四百七十圓並に扶助料年額五十圓を賜與せられ仝年八月五日仝村上尾奈玉洞寺に於て村葬執行せらる

引佐郡西濱名村平山

陸軍歩兵一等卒勳八等　山田好藏

明治十六年三月二十日生

明治三十六年十二月一日徴兵として第二補充兵に編入仝三十七年十月三十日補充召集として歩兵第十八聯隊補充大隊へ應召仝年十二月二十七日後備歩兵第十八聯隊へ轉入仝三十八年一月三日征露從軍として宇品港出帆仝年三月四日歩兵一等卒申付られ仝月五日清國盛京省孤家子北方に於ひて前額盲管銃創を受け戰死す仝戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜り併せて遺族へ特別賜金四百七十圓並に扶助料年額五十圓を賜與せらる仝年六月十日仝村平山小學校に於て村葬執行せらる

引佐郡西濱名村鵜代

陸軍歩兵二等卒　夏目秀治